
GURDEN

高千穂ゆずる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G U R D E N

【Nコード】

N 0 9 1 0 B

【作者名】

高千穂ゆずる

【あらすじ】

四人の神が創り上げし国。神に仕える、三人の翼人により護られし国。G U R D E N。人々の魂は咲き乱れる花。額に祝福の紋章を持ち、平和な日々を送るG U R D E Nの民。翼人：フィデリオ。グラジオ：カスケード。ニウしかし、三人目の翼人：オルレカはいない。その重き役目のためにオルレカは短命で、前任者も訳あって早くにその生を閉じた。そして、ひとりの少年が選ばれる。スプレケリアという名の…紅き花を咲かせる孤高の少年。

プロローグ

そこはけして太陽が翳ることもなく、木々の葉はざわざわと風になびき、芳しい香りを放つ花々は、四季折々に咲き乱れていた。

世界を支える大樹の根元に四人の神々が住み、祝福を受けた花の精と思しき人々が平和に暮らしていた。

四人の神々には、フィデリオ「グラジオ、カスケード」ニウという翼人が仕えていた。そしてもう一人。

特別な任務のために花々の中から選出される“オルレカ”と呼ばれる翼人がいた。彼はその努めの特殊さから短命だった。

前任のオルレカが消失してから、一年が過ぎようとしていた。“生”を司る神・オステオスの命により、新たなオルレカ誕生の為、二人の翼人は世界を見て回った。そして選ばれたのは、フィデリオが持ち帰った一株の花だった。

「その地にたった一本だけ存在していた花でした。凜と立つその姿に、私の心は打たれたのです。孤高の中にあつてさらに気高いこの花の美しさに、誰も幸福を信じてやまないことでしょう」

フィデリオはオステオスの前に跪き、言った。

オステオスがゆっくりと口を開き、花の名を訊ねた。

フィデリオは顔を上げ、満面の笑みを浮かべ、

「スプレケリア」といいます」

「そうか。ではフィデリオの屋敷にて育てると良いだろう。期待している」

フィデリオは頭を垂れ、畏まりましたと答えた。

オステオスは、衣擦れの音と共に退室した。謁見室に残されたフィデリオは、愛しそうにスプレケリアを抱き上げた。

その花は成熟している為に、すでにオルレカとしては使えなかった。フィデリオは屋敷に花を持ち帰り、新たに株から育てなければならなかった。

森の中を歩いていて、スプレケリアをみつけた時の感動を、フィデリオは今でも忘れてはいない。

辺りに花という花はなく、まるでフィデリオが自分を探し出すことを信じ、咲いていたのかと思うほど、たった一人で咲いていたのだ。だが、その姿は決して哀れみを誘うものではなかった。

フィデリオは、今までのオルレカたちとは明らかに違う感情をスプレケリアに抱いた。

だが、それもその一瞬のことで、今ではオルレカとして育て上げること何の迷いもなかった。

湖から引いている邸内の池に、微かな水音が響き渡る。

ゆらゆらと揺れる小船から、白い腕が水面に向け伸び、つまらなさそうに水悪さをしている。

ガラス張りになって天井には満天の星が瞬き、時折、その中を一筋の流れ星が通り過ぎていく。だが、白い腕は変わらず水悪さを続け、空の星の瞬きには目もくれない。

「つまらない…」

小船の中から、溜息と共に少年と思しき声が聞こえてくる。

「フィデリオはガーデンに行くと言って帰りが遅くなる」

ふてくされた声の主は身体を起こし、 つまらないよ！ と

両腕を高々と突き上げ、声高に叫んだ。

小船を棧橋に寄せ、飛び移る。

現れた少年は、肌も露に颯爽と棧橋を駆け抜けていく。

大扉は、派手な音を立てて開け放たれた。

廊下には煌煌と灯りが灯されている。少年の、水気を含んだ漆黒の髪。水滴が滑り落ちていく、透けるように白い肌。眩しさに細めた瞳は左右の色が違い、右が深緑。左は金に近い山吹色だった。まさに光彩陸離の一言に尽きる見事なそれは、芸術品のようである。

「ケリーさま！ またそんな格好で池に行っていたんですね？ あ

れほどフィデリオさまからきつく言われて、どうして守れないんです！」

そんな芸術品を手厳しく叱咤するのは、小さな身体を精一杯伸ばしている少女だった。

「ああ、ごめん。サム。忘れてた」

ケリーは悪びれずにそう言つと、ぺろつと舌を出して笑った。

サムと呼ばれた少女は（と言っても、けして年齢が少女であるというわけではない）足を踏み鳴らした。

「またそんな嘘を！ 大体ケリーさまは」

「ああ、いい所に来た。ルード。サムがね、うるさいんだ」

サムの説教を遮り、ケリーに逃げ出すチャンスを与えるように姿を現したのは、サムとよく似た容姿のルードだった。

ルードの登場にもめげずにサムの小言は続いているが、ケリーはそんな彼女を無視し、ルードへと声をかける。

「フィデリオは今夜でも戻ってくるかな」

「先ほど、ガーデンから御使者の方がみえられて、今夜あちらを發たれる予定だとのことでしたから、フィデリオさまが屋敷に到着なさるのは、朝になってからだと思いますよ？」

「…。その使者つて人は、もう帰ったの？」

「ええ。もうずいぶん前に」

ルードは笑みを浮かべ、言った。緩やかに話すその口調は、のどかな春の午後を思わせる。

そこへ割つて入るように、

「ルード！ あなたがそうやってケリーさまを甘やかすから、いつまで経つても言いつけの一つも守っていただけなのよ！」

サムのヒステリーはまだ治まっていなかった。彼女の怒りの矛先がルードに向けられると、それ今だと言わんばかりにケリーがその場を逃げ出した。

サムの小言は場所をケリーの寝室に移しても続いていた。

大人しくベッドに収まっているケリーに、

「いいですか？ 明日、フィデリオさまがお戻りになられても、けして飛びついたりしてはいけませんよ？ 行儀良く、おかえりなさいときちんとご挨拶なさってくださいね」

ケリーは途端に口吻を尖らせた。

「なんで！ ぼくの“おかえりなさい”の挨拶がああなんだ。フィデリオがガーデンに行って、いったい何日経ったと思ってるの。飛びついたり抱きついたりしたっていいじゃないか！ サムの意地悪っ」

「意地悪なんかで言ってるんじゃないやありません！」

たとえサムにその気がなくても、ケリーには充分すぎるほどの意地悪なのだ。

ケリーはブランケットを頭から被ると、サムに背を向け、ふて寝を決定した。

三人の翼人<1>

ごとごとと揺れる馬車の中はすこぶる居心地が悪い。しかし、その居心地の悪さは、何も悪路のせいばかりではなかった。

死を司る神・パンディオンから、ケリーにオルレカとしての任を与えるという正式な命が下ったのだ。時期が早いとフィデリオは食いついてみたが、無駄だった。

ケリーはまだ幼すぎる…。

フィデリオの脳裏に、前任のオルレカの姿がよぎった。

彼はとても物静かで、聡明で。そして愛情深かった。それ故に訪れた悲しい出来事を、フィデリオは忘れられなかった。

彼を育てたのは、フィデリオとは反りの合わないカスケードだったが、オルレカとは良い友人として付き合っていた。

ケリーを彼と同じ目には合わせたくない。その為には、まだ時間が必要なのだ。

神々の言う“オルレカの存在の普遍性”など。これまでのオルレカの歴史を重んじて鑑みれば、おのずと解かりそうなものだった。

フィデリオはせせら笑う。

「ああ。だから歴史は繰り返されるわけだ」

車窓から見える、寒々しい風景が懐かしい景色へと変わる。

屋敷へと続く森を抜け、湖面にうつすらと氷を張った湖を眼下に眺めながら、馬車は走り続けた。

小さな丘を越えると、フィデリオの屋敷が姿を現した。

フィデリオの到着が告げられると、邸内は俄かに活気づいた。誰もが彼の帰りを待ちわびていたのだ。とりわけ賑やかなのがケリーである。あれほどサムに小言を言われておきながら、誰よりも先に屋敷を飛び出し、フィデリオの元へと駆け寄っていく。

「フィデリオ！」

御者に何やら指示をしているフィデリオの背中に、勢い良く飛びついた。予測していたのか、フィデリオはよろめきもせず、御者に指示を出し続け（もちろん、その間もケリーは背中に張り付いたままである）馬車が車庫へと移動する様子までも見届けた。

「フィデリオ！ おかえりつたら！」

相手にされなかったからか、ケリーはフィデリオの首に腕を巻きつけ、締め上げた。

「ケ、ケリー。苦しいよ。放しなさい」

はぐいと素直に従い、ケリーはフィデリオの背中から下りた。

フィデリオはケリーに向き直ると、改めて、ただいま、と告げた。ケリーが少し照れ臭そうに笑う。

「おかえり、フィデリオ。ガーデンはどうだった？」

「おや？ 今日はいやにおとなしいね。いつもの元気はどこいったんだい？ さっきの抱きつきで終わりなのかな。ケリー？」

フィデリオは、おいでと言わんばかりに両手を広げた。

ケリーが視線を後ろへと動かす。その視線の先にはサムがいた。

サムの目が、駄目です、と言っている。ケリーはしばらくサムと睨み合っていたが、やはりおとなしくしているのは性に合わないらしく、

「終わりじゃない！」

結局、フォデリオの胸に飛びついた。

フィデリオの腕に抱き締められると安心するのだ。例え、背後からサムの溜息が聞こえてきても、こればかりはやめられない。

「あっちでルードの手伝いをしてくる」

ケリーは、それはもう嬉しそうに屋敷へと戻っていく。その去り際に、サムへ舌を見せ、

「ぼくの勝ち」と喧嘩を売った。

齒軋りするサムを、見かねたフィデリオが宥める。

「サム。構わないじゃないか。俺はなんとも思わないんだから」

「フィデリオさま！ いつまでもそんなことを仰っていると、大変

なことになりますよ？ ケリーさまは、いずれオルレカとなられる方じゃありませんか。いつまでも、あのような子供染みた真似ばかりされていては、いざガーデンへ上がられる時に恥をかいてしまいます」

「…。知っているのかい？ ケリーがガーデンに上がる日のことを」サムは咄嗟に視線を逸らした。それでは、知っていますと言っているようなものだった。

「ケリーは？」

「ケリーさまはご存知ではありません。私とルードだけです」

「ケリーには、まだ話すつもりはないからね。それに、俺としては時期が早いとガーデンには進言するつもりなんだよ。だから俺が指示するまでは、ケリーは今のままで構わない。サムの気持ちは本当にありがたいと思うんだけどね」

一呼吸置いて、フィデリオは笑顔を見せた。少し辛そうに見えるその笑顔に、

「そのように致します」とサムは頭を垂れた。

再度、進言したとしても、それが受理されようはずもないのは、サムも承知していた。ガーデンから命を受けたのであれば、そこにどんな理由があろうとも、従うほかないのだ。

「それにしても、春は未だ遠くつてやつだねえ。ここら辺りは雪が少ないが、戻ってくる途中の村々は真っ白に染まっていたよ」

「そうでしたか。それではルードの作った温かいスープでも飲んで、温まっていただかなくてはいけませんわね」

そう言って笑顔を見せるサムの鼻が、冷気で赤くなっていた。フィデリオはサムの赤鼻を指で撫で、彼女の小さな身体をコートの中に包み込んでやる。

屋敷へと歩き出した二人の足元で、さくさくと霜柱が音を立てた。屋敷の中からは、ケリーの嬉々とした笑い声が聞こえてくる。

フィデリオの胸は、焼けるように

痛んだ。

三人の翼人<2>

雪解け水が、屋敷の池に流れ込み出す春。

寒い冬の間、フィデリオがどこにも出かけず、自分の傍らにいてくれたことをケリーは心の底から喜んだ。

ケリーの他愛のない話にも耳を傾け、声を上げ、笑い、そして慈しむように 事あるごとに抱き締めてくれる。

サムの変わらない説教。ルードの作る美味しいスープ。

ケリーは幸せだった……。

屋敷の中に、ケリーの姿がどこにも見当たらなかった。

フィデリオは屋敷を出て、湖へと足を伸ばす。春になると芝桜が一面に咲く場所が、そこにあった。そして ケリーのお気に入り場所でもある。

ピンクや白の小さな花々に埋まるようにして、眠るケリーを見つけるのは骨が折れたが、その分、みつけた時の安堵感や愛しさは格別だった。

丘の上から芝桜の絨毯を見渡した。

湖から流れてくる爽やかな風に吹かれながら、花畑の中でケリーはぼんやりと空を眺めていた。フィデリオはそっと近づき、傍らに腰を下ろす。

「空になにか珍しいものでもあるのかい？」

ケリーは、うーんと気のないような生返事を返し、

「勉強をしるとか、行儀良くしるとか：フィデリオが言わなくなっただけだ」

その分サムがうるさいけど、と舌を出して笑う。

「サムは家の小姑だから」

とフィデリオも、ケリーを真似て舌を出し、笑った。

蜜蜂がね そう言う、ケリーの表情が少し沈んだ。

「一生懸命に蜜を集めているのを見て…思ったんだ。ぼくは、このまま何もしないで　サムやルードに食べさせてもらうのかなって。

屋敷から出ることもなく…」

フィデリオは、ケリーの唇に指を優しく宛がって、
ケリー
「ここが嫌いかい？」と訊いた。

ケリーはふるふると首を振って、好きだよと答えた。

「俺の傍は嫌いかい？」

フィデリオの思いがけない言葉に、ケリーは跳ね上げるように面を上げ、そして、ふいと俯いた。フィデリオが酷く悲しげな顔を見せていたからだ。

「ぼくの今の質問は　フィデリオを困らせた？」

ケリーは、俯いたままフィデリオの手を握り締めた。
困らせたくて言ったんじゃない、と呟く。

「少しだけ…ここから出てみたいって　思っただけ。外の人の声が、とても楽しそうだったから」

フィデリオは、ケリーの手を握り返し、軽く溜息を吐いた後、
「いずれケリーはこの屋敷を自由に出入りできる日がくるよ。ただ

時期が決まっただけで、それはもう少し先のことなんだ」

「もう少し待てば、出られる？」

ああ、とフィデリオは大仰に答えた。

まだ幼いケリーは、それだけで表情を明るくさせる。屈託なく手を繋ぎ、指を絡ませる。あどけない少年は、いずれやって来る自由を夢見て　幸せそうな笑みを零した。

簡単な手荷物を抱え、フィデリオは荷台へ大きな鞆を乗せた。執事へ出発の指示を出した後、座り込んだまま一向に顔を向けないケリーに視線を寄越し、声を掛けてみたが拗ねた少年はぴくりともしない。

ケリーの頭に、優しく手を乗せ、出発の挨拶をした。ケリーは、ふいと横を向いて何も答えない。フォデリオは苦笑しながら、呆れ

顔のサムとルードに、ケリーを頼むと言い残して馬車へと乗り込んだ。

時折見せる、ケリーのわがままである。

いつもは笑って済まされることが、今回ばかりは様子が違うようだ。重苦しい空気が辺りを包む。

サムは、これ見よがしに大きな溜息を吐いて屋敷の中へ入っている。

べえ、とサムの背中に舌を出すケリー。

「ケリーさま。今、何月か覚えておいでですか？」

可笑しなことを訊くものと、ケリーは思いながら、
はなのこりづき「花残月」と答えた。

「そうですね」

ルードは、しゃがみ込んでいるケリーを立たせた。

向き合い、

「早緑月さみどりづきになれば、ケリーさまはこの屋敷を一旦離れ、ガーデンへ
と行かれるのですよ。“オルレカ”として……」

ルードのその真剣な眼差しとは対照的に、ケリーは小首を傾げ、
オルレカという言葉を、どこか他人事のように聞いていた。

胸の内を支配するのは“ガーデン”へ自分も行けるということだけである。

フィデリオは通うガーデン。

そこには何があるのか。思いを馳せる。

ルードから視線を逸らし、先ほど馬車が駆けて行った石畳の道を見つめた。

この道の先にあるガーデンへ、自分も行けるのだ。

三人の翼人<3>

ガーデンの敷地の中には、4人の神の神殿が、それぞれ建ち並んでいる。

門番が控えている鉄の門を潜り、両脇を青々とした芝が敷き詰められている石畳の通路を真っ直ぐ行くと、神殿が現れる。

通路を挟んで右側がムスカリ、マウリーンの神殿で、左側がオステオス、パンディオンの神殿となる。通路はそのまま進むと渡り廊下へと変わり、更に奥へ進むと、オステオスの再生を待つ“花園”へと続く。

フィデリオがガーデンへと赴いた際は、直属の神にあたるオステオスの神殿で過ごす。

カスケードはムスカリとマウリーンと兼任している為に、状況によつて、過ごす神殿が変わる。

山越えも何の問題もなくクリアし、早めに出発した分、ガーデンにも幾らか早く到着した。

「気が重いな…」

フィデリオは溜息混じりに呟く。 神苑（ミヤノ）の剣拝領（けんぱいりやう）の儀の日程が、

今日、決定するからだ。

足取りも重く、ふと立ち止まるフィデリオの背後に人の気配がして。

「いい加減、慣れたらどうだ。これで何人目のオルレカだ…?」

カスケードである。マウリーンの神殿から出てきたようだ。両手には、資料と思われる厚い本を何冊も抱えている。

「カスケード。そうは言うが、なかなか慣れるものじゃない。むしろ、慣れる事の方が 俺には怖ろしく感じるけどね」

「フィデリオは真面目過ぎるからだ」

「はっ…。俺がか？ 真面目ってというのは、お前のようなヤツを指す言葉だと思うが？」

フィデリオは皮肉たっぷりに言う。

カスケードは、同じ翼人ではあったが、どうもウマが合わない。オルレカを自分と同じ翼人のように扱わず、役に立たなくなれば何の躊躇いもなく切り捨てることのできるヤツなのだ。 だから、好きになれない。

オステオスさまとの約束があるからと、フィデリオはその場を離れる。

カスケードは何も言わず、すたすたと歩いて行った。ちらりとその後ろ姿に視線を遣りながら、手荷物を執事のSTEM「コニフォー」に手渡しながら、

「あんなヤツにケリーを会わせなきゃならないのかと思うと、虫唾が走るな。そうは思わないか STEM」

STEMは軽く会釈をして、フィデリオの手荷物を預かる。

「私には別の心配がございます」

フィデリオは、少し目を見開いて、なんだ、と訊ねた。

「カスケードさまと意見の合わないケリーさまが、ガーデンで大暴れなさるのではないかと 。私はその辺りが大変に気になるところです」

フィデリオは更に目を見開いた。 まったくだな！ フィデ

リオが声を上げて笑う。

行き交う女官達が足を止め、大声で笑うフィデリオを訝しげに見つめる。

窘めるSTEMを無視し、フィデリオは楽しげに笑った。

フィデリオは、意外な光景を目にして、僅かではあったが動揺していた。

オステオスの神殿の謁見の間に、他の神々までもが席を連ねているのだ。

「これは一体？」

「フィデリオが驚くのも無理はない。しかし、状況が変わってしま

ったのでね。私が皆をここへ呼んだのだよ」

オステオスは、柔らかな笑みを浮かべ、答えた。

「本来、スプレケリアに対しての“拝領の儀”の日時を告げるべき時なのだが、私のわがままから、それを今しばらく先送りにしたいと、彼らに相談したのだよ。パンディオンは良い返事をなかなかくれなかったが、先ほどようやく承諾してくれた。　フィデリオ。今しばらく、スプレケリアをお前の元に、置いておいてはくれまいか」

それはフィデリオが望んでいたことだ。断る理由もない。

だが、オステオスは更に言葉を続けた。

「但し、それには条件があるのだ」

フィデリオは訝しげな顔で、「条件でございしますか」と訊ねた。伺うように、神々の顔を順に見ていく。

オステオスは、フィデリオの視線が自分に戻って来たことを確認すると、緩やかに唇を動かした。

「スプレケリアから“音”と“声”を奪うことだ」

オステオスの口調はあくまで自然だった。それは、今日の天気の場合を話しているのと、何ら変わらない声音で告げた。

俄かには信じられなかった。フィデリオは、何度もオステオスの言葉を反芻する。

少なからず動揺を隠せずに、取り乱しかけているフィデリオに、オステオスは、心配は要らないと付け加えた。

「フィデリオにそれをしうと言うのではない。お前が屋敷に戻る頃には、パンディオンの術により、すでにスプレケリアの身に、それらは存在していないのだから」

パンディオンが返事を渋っていたのは、この術のせいだったのか。フィデリオは、パンディオンを凝視する。

パンディオンは、刺すようなフィデリオの視線に耐えられず、俯いて、

「スプレケリアは苦痛を感じません。突然　失うだけです」

苦し紛れに　　神であるはずの彼は、そう釈明した。

頭が痺れて、神の言葉が理解できなかった。オルレカから音と声を奪うなど、今までにはなかったことだからだ。

立ち尽くしていた膝が、がくりと折れて、冷たい石の床にへたり込む。

気がつくのと、神々はどうに部屋を出ていた。重苦しい、冷たい空気がフィデリオを包む。

拝領の儀の意味はあるのか。ケリーから音と声を奪うことで、すでにそれは終わっているのではないのか。

衣擦れの音がして、フィデリオが振り返る。　　パンディオンだった。

パンディオンは、肩を落としているフィデリオの傍らに腰を下ろした。

“死”を司るパンディオンは、その役目とは裏腹に、気さくに声をかけてくれる神だった。フィデリオは4人の神々の中で、とりわけ彼のことが好きだった。直属のオステオスよりも、それは顕著だった…。

オルレカは、彼直属の翼人である。オルレカがいなければ、彼の職務は遂行されない。オルレカを傍に置けない今の状況を、フィデリオは訊ねた。

「ケリーをパンディオンさまの元へ送るのが遅くなれば、それだけ職務も滞ることになります。それを承知で　　何故、ケリーにあのような術をかけられたのですか？」

パンディオンは、何度か言葉を飲み込む仕草を見せた後、重い口を開いた。

「オルレカの職務は、あなたやカスケードのものとは違い、特殊、且つ異質なものです。人々にとって、忌み嫌われるものです。今までのオルレカたちは、その職務を全うせんが為に、己の精神を犠牲（こころを）にしてきました。そのせいか…彼らは短命です。　　フィデリオ。オルレカとして育てられる花が美しくなければならぬ理由を、知

つていますか？ 人々がその魂を狩られる時、いわば最期の瞬間に垣間見る者が、オルレカなのです。オルレカを恐怖として捉えられないように…。

だからオルレカは、この世界でもっとも美しい存在でなくてはならないのです。

しかし 考えてみたのです。私たちは常々、狩られる者のことを考えてきたけれど、狩る側 つまり、オルレカのこととはどうなのだろうと…。彼らは常に、人々の断末魔を聞いていたかもしれません。命乞いも聞いていたかもしれません。それらがオルレカに良いはずがないと…。

いけないことでしたでしょうか。ケリーの心を守る為に、その代償に 音と声を奪うことは

「
」
フィデリオは黙った俯いた。

ケリーの心を守る為だと言われては、返す言葉もない。

フィデリオが望んでいたことの一つに、それはあったのだから…。

三人の翼人<4>

寒々しい夜空には、くつきりと月が浮かび上がっていた。少し欠けた十六夜の夜。幾つかの雲が青く浮かび上がり、ゆったりと流れていく。

芝桜の花畑にしなやかな体躯を投げ出し、青白い月光を浴びているケリーは、夜空に浮かんだ欠けゆく月を眺めていた。

この空の下、ケリーの知らない場所にあるだろうガーデン。大好きなフィデリオが仕事をしている場所。

見渡す限りの広大な土地は、すべてフィデリオのもので、永遠に出られることのない檻だと思っていた。

自由に出入り出来る日がくる。

フィデリオの言葉が、ふと思い出された。自然とケリーの頬が緩む。

その時がくれば、フィデリオと一緒にガーデンへも行けるだろう。そうしたら、今以上に、もっとたくさんの時間をフィデリオと過ごせるのだ。

心臓が、跳ね上がるように何度も強く鼓動を打つ。期待に胸が弾むとは、まさにこういう事を言うのだらう。

膝を抱えなおす。湖から吹き上げてくる柔らかな春の風が、ケリーの頬を撫で上げていく。ふふふ。嫌だ、笑っちゃう。

早くその日がくればいい。

ケリーは堪え切れない笑みを満面に浮かべながら、その小さな紅い唇から洩れ聞かせながら願った。

ざざざと…。一陣の風が吹きぬけた。

サムにきちんと結われていたケリーの髪が、漆黒の闇に溶け込むように風に攫われる。

ざざざ。

葉風は疾風のようにケリーを襲い、小さな花や葉先を引きちぎり

ながら通り過ぎていった。

嘘のように風が止み、辺りは柔らかな月光と、湖から吹き上げる風だけになった。

しん、と静まり返る湖畔。

風で乱された髪を撫でつけながら、ケリーは口吻を尖らせた。

「うん、もう。ひどい風だなあ」

おや？ と思った。口にしたはずの言葉が耳に聞こえない。独り言だったかしら、とケリーは首を傾いだ。

さして気にも留めずに立ち上がった。そろそろ戻らないとサムが煩い。身代わりに置いてきた羽根枕も、そうそう長い時間は誤魔化しきれないはずだから。

さて。裾に付いた草や土を払った。
まただ。

ケリーの耳には何も聞こえない。パンパンと勢いをつけて裾を払っているのに、何も聞こえないとはどういうことだろう。

辺りを見回した。風は相変わらず吹きつけていて、湖面もざわついている。足元の草原はそれに葉先を靡かせて、たわんでいる。

耳に手を当ててみた。指先の体温がじわりと耳朶に感じられるが、やはり音はしない。

足元の葉に手を伸ばし、引きちぎってみた。ちぎれた葉は湖からの風に飛ばされ、すぐさま遙か向こうに消えていく。

これは一体…。

世界から音が消えて無くなってしまったのだろうか。

ケリーは辺りをぐるりと見回した。中空の月から降り注ぐ柔らかな光りも、湖面の煌きも、ざわめく草の様子も。何ひとつ変わっていないはずなのに。

音だけが抜けているのだ。

おかしいのは世界なのか？ それとも自分だけ？

ケリーは激しくなっていく鼓動を懸命に抑え、転がるようにして駆け出した。

胸から溢れ出しそうな恐怖感と闘いながら、月に照らされた夜道をひたすら走った。

じやりじやりと鳴っているはずの足元。吐く息は白く見えるのに、自分の息遣いが聞こえない。こんなに激しく呼吸しているのに、何も聞こえてこないのだ。

おかしいのは誰。世界か。自分か。

「フィデリオ。フィデリオ。フィデリオ！」

口を大きく開けて叫んだつもりでも、やはり自分の耳には届かない。

ようやく辿り着いた屋敷のドアを、必死に叩く。この音はサムたちに聞こえているだろうか。もしも、世界から音が失われたのなら、永遠に気づいてはもらえないではないか。

永遠に、このドアを叩き続けなければならないのか。ケリーの思考は、恐怖の為にすでに破綻していた。

ドアが開けられたのにも気づかず、中に倒れ込むまで手を振り上げていた。

誰かに抱え上げられ、ようやく正気に戻ったケリーは、世界から音が失われてしまったのだと訴えた。

サムは酷く驚いた顔でこちらを見つめている。

ケリーは耳に手を当て、音が無くなったのだと叫んだ。

サムはルードへと顔を向け、首を傾げながらなにか喋っている。

悠長にも取れるその様が、恐怖で思考を囚われているケリーをヒステリックにさせた。

「ぼくにも理解するように喋ってよ！」

サムとルードは落ち着くようにと言っているが、音の無い世界にいるケリーは怯えも酷く、なにも通じない。

「ルード。ケリーさまのこの様子はいったい…？」

「まったく見当もつかないわ。フィデリオさまはガーデンだし。とにかく落ち着いていただくしかないものね。着替えはいいから、このままベッドまで運びましょう」

ルードは、わあわあと喚き散らすだけのケリーの背中を軽く叩いてやり、落ち着かせようと試みる。

ケリーは、幼子のようにいやいやと首を振りながらルードに縋りついた。

寝室に運ばれて、ベッドへ横になったものの、しばらくは興奮状態が続いた。

サムとルードはケリーの手を握り締め、汗で張り付いた髪を梳いてやる。

泣いて、しゃくり上げ。疲れたケリーは二人の手をぎゅっと握り締めたまま、眠りに就いた。

三人の翼人<5>

朝日がまだ姿を見せてもいない、闇が残る明け方。

まるで昼間のように明るく照らされた、ケリーの部屋の前。

フィデリオは、微かに震える拳を扉に寄せた。

無事であるはずがないことは先刻承知だが、それでも、一刻も早くケリーの顔を見て、安心したかった。

固く閉ざされた扉を、幾度となく打ちつけてみたが、中からの返答は一向にない。衣擦れひとつ聞こえてこないことが、ガーデンから急ぎ戻ったフィデリオの胸に、一抹の不安を覚えさせた。

神々の理屈に、一定の理解はしているつもりだ。それでも、この一枚の扉を挟んだ向こう側で、大切なケリーが辛い思いをしているのかと思うと、フィデリオの胸は息苦しくなる。

それ以上に、ケリーは 音の無い世界で不安に押し潰されそうになっているのだ。

ガーデンに上がってからも良かったのではないのか。フィデリオは唇を噛み締めた。

オルレカの職務の厳しさに、ケリーが耐えられそうにないと、そう判断されてからでも遅くはなかったのではないか…。

何も知らないケリー。

自分が何の為に在るのかも、オルレカに選ばれるということの覚悟も。

これから少しずつ教えていこうとしていたのだ。

間違いを繰り返さない為に。 そうであるのに…。 神々は無情にも刻限を迫り、拳句……。

握り締めたフィデリオの掌に、うつすらと血が滲む。

それでも、ガーデンの輪を守る為に、オルレカは必要なのだ。 フィデリオは、そのジレンマに顔を歪めるほかなかった。

もう一度、扉を叩いてみる。 やはり反応は返ってこなかった。

ずず、と力なく床に跪いた。

様子を見に来ていたルードが、見兼ねて声をかける。

「フィデリオさま。お戻りになられたばかりですから、あちらでしばらくお休みになられてはいかがですか？ ケリーさまは私が見ていますから……」

青白い顔で俯くフィデリオに、

「ケリーさまはいつも朝が遅いですもの。まだ起きていらっしやらないだけですわ。夜が明ければ、きっとその扉も開きます。さあ、あちらでお休みになってくださいませ」

ルードは精一杯の笑顔を見せた。

「いや……。俺はここにいますよ。ここで休むことにする。ケリーが目覚めたら、俺が一番最初におはようを言ってやりたいんだ」

フィセリオは疲れたように笑い、掠れた声で答えた。

「俺のことよりも、馬をゆっくり休ませてやってくれ。かなり無理をさせて走らせたからな。あれも疲れているだろう」

フィデリオは、ガーデンから馬車ではなく、馬を飛ばして戻って来たのだ。

休みも取らず、馬上に居続けたフィデリオも、かなりの疲労があるだろうに　そんなことより、と強引に山越えをさせた馬を労った。

ルードが馬小屋を覗くと、遅れて戻って来たステムに、サムが食ってかかっているところだった。

「ガーデンで何があったのか、教えて。ケリーさまに何をしたの！」
「私はなにも知らない」

ステムは素っ気なく答える。

「そんなはずはないわ。フィデリオさまと一緒にガーデンに行っていたんですもの」

「確かにガーデンには行っただが、そこで何が行われたかまでは、私

の知る範疇ではないよ。フィデリオさまだけがご存知なのだ」

「ケリーさまはね。音も聞こえないし、話すこともできなくなったのよ？」

ステムは呆れたように、短い溜息を吐き、

「ガーデンで何かが行われたのは事実だろうが、それらすべてを私たちが知る必要もなかるう。今後、ケリーさまの身にどんなことが起きようとも、それはすべてガーデンの意思なのだ。私たちはそれに従うまでだ」

ステムの回答に、サムの顔が一気に紅潮した。

激昂するサムは腕を振り上げたが、ルードが速やかに割って入り、事なきを得た。

「ステム。あなたが従うのは 誰の意思？」
ルードが静かに問う。

「可笑しなことを訊くものだな。私の主はフィデリオさまだけだが

……」

ステムは、そう言つて一頭の馬を連れ出した。ルードは黙つてそれをみつめている。

どこへ行くつもりなのか、と怒りが治まらないサムが怒鳴つた。

「山越えで疲れた馬を水浴びに連れ出すところだ。用があるのなら、湖まで呼びに来るといい。私はそこにいる」

馬を連れ立つて行くステムを見送りながら、ルードはサムに声をかけた。

「不安に押し潰されそうなのは、ケリーさまなの。あなたや私が取り乱していたら、一体どうなるの？ こんな時だからこそ サム。私たちがしっかりしないとイケないのよ」

「わかつているけど……」

サムの声は震えていた。わかつてはいても、あの晩のことが忘れられないのだ。

ケリーが握り締めた、自分の手を一頻り眺めた後。見上げた蔦の這う屋敷の石壁。山裾から伸びてきた朝日が反射する二階のガラス

窓。

いつもの朝なら、あの窓を派手に開けた笑顔のケリーが、サムに向かつて憎まれ口を叩くのにな。

その憎まれ口でさえ、今は酷く懐かしい。

サムは、ルードの肩に凭れかかり、小さな嗚咽を漏らした。

三人の翼人<6>

窓から差し込む光に手を翳し、ケリーは朝が来たことを知る。

喉に軽い痛みを感じた。昨夜、大声を上げようと、何度もがなり立てたからだろう。 と言っても、自分の声がしわがれているのかも、今のケリーにはわからないのだが。

くう、と腹が鳴った。

ケリーは、お腹を擦りながら眉根を寄せる。突然、声が出なくなつて、耳も聞こえない。とても怖くて、泣いて、叫んで。もう、この世はきつと終わるのだと思つたりもした。それなのに、今こうしてケリーの腹は空腹を知らせてくる。

何だかとても情けない気がした。

お腹が空いた…。

溜息とともに呟く。

この現実から目を逸らす為に、朝食を一度抜いたところで、何にも変わりはないだろう。

朝食が我慢できたとしても、昼食は？ 夕食は？ そんなことを考えれば考えるほど腹は減っていく。

また、くう、と腹が鳴った。

ルードのスープが飲みたいな。今日のはなんだろう。…豆のすり潰したヤツだったら嫌だなあ。

こんな状況だが、嫌いなものはやっぱり嫌いなのだ。

とりあえず階下に下りてみよう。

悩んだところで変わりはない。ぐずぐずとゴネてみたところで、治る保証はどこにもない。さしあたっての問題は、この空腹をどうにかすることだった。

ケリーは、皺だらけのブラウスのまま、ベッドを下りた。のらるくらりと扉へと向かう。

ぐいと扉を押す。

いつもなら、何の軋みも立てずに開く扉が何故だか開かない。
もう一度押してみた。

びくともしない。

あれ？ 開かない…。…？

廊下側では扉に凭れかかってフィデリオが休んでいた。熟睡している彼は、扉が押されていることに、すぐに気づかない。

何度も押され、揺れる扉にようやく気づいたフィデリオは飛び起きた。

それと同時に勢い良く扉が開かれ、フィデリオはしこたま顔面を打ちつけた。打った鼻を擦りながら、ケリー、と叫ぶ。

扉を開けたケリーはというと、きょとん、とした顔でフィデリオを見ている。彼がそこにいるということが、まだ理解できていないようだ。

ケリーの中では、フィデリオはまだガーデンにいるはずだからだ。そのフィデリオが目の前に立っていて、泣きそうな顔で自分をみつめている。

「目がこんなに赤くなって。酷く泣いたんだな」

赤く腫れ上がっているケリーの臉をやさしく撫でた。

フィデリオ？

夢なのかしら、と思いながら、フィデリオの名前を呟いてみる。

フィデリオ…なの？

夢ではないのだと頭が理解をし始めると、そのつぶらな瞳いつぱいに涙がみるみる溢れ始めた。その涙を、長いふさふさした睫毛がかろうじて堰きとめていた。

フィデリオ！

ケリーは勢い良くフィデリオに飛びついた。

いつもと変わらない再会の光景なのに、唯一違っているのは…。

フィデリオの名を呼ぶケリーの声がそこになかった。

「おはよう、ケリー。それから ただいま」

零れ落ちた涙で濡れているケリーの頬に、フィデリオは自分の頬

を重ねた。そして、ケリーにはその心中を悟られないように、いつもと変わらない笑顔を見せた。

「ケリー。これからは掌で話をしよう」

フィデリオは人差し指を立て、良い名案であるかのように言った。そしてケリーの手を取り、手本のように指で文字を書き始め、

「これからは、こうやって話をしよう。 ゆっくりと、ね？」

ケリーは、自分の掌とフィデリオとを交互にみつめた。

「慣れるまで時間はかかるだろうが、やってみよう」

慣れないケリーの為に、フィデリオはゆっくりと文字をなぞり、それに合わせるようにゆっくりと喋った。

ケリーは時々頷きながら、今度は自分の番だと胸を叩き、フィデリオの手を取る。

おかえり、フィデリオ。

唇から、洩れる息とともにフィデリオの掌になぞられていく文字。フィデリオは胸が締めつけられた。

フィデリオの帰宅を喜び、涙と一緒に見せた満面の笑み。

お前から音を奪ったのはガーデンなのだ。そして俺はそれに逆らえもせず、ただこうして傍にいただけ…。

それならばせめて

ここがケリーの帰る場所であり続けるようにしよう。

ケリーの支えとなろう。

オルレカとして

人々の魂を狩る

その責務

に耐えられるように。

ねえ、いっしょに朝ごはんを食べよう？

ケリーは、フィデリオの手を握り締める。

その顔は、純粹にフィデリオの帰宅を喜んでいた。一緒に食事ができることを喜んでいた。

「ああ、そうだね。確か…そら豆のスープだったよ？」

ケリーは、げえ、と舌を大袈裟に出して見せた。

フィデリオは、悟られまいと、ただ、ただ……笑顔を見せるだけ

だ
っ
た。

三人の翼人<7>

ガーデンへ上がるはずの早緑月を過ぎ、青葉輝く雨五月も終わり、涼暮月を迎えた。

言語行動を阻害されたケリーは、フィデリオやサムたちのおかげで、さほど生活に支障をきたすことはなかった。

変わった事といえば、新たな家族が増えたことだ。

大きな犬を飼ったのだ。

特に訓練は受けさせてはいなかったが、彼女は常にケリーの傍らにいて、耳の代わりをしているようだった。

ケリーも、ふかふかの毛を持ち、いつも自分の傍らにいてくれる彼女をとてにも気に入っていた。

パンディオンは自分の耳を疑った。

目の前で寛いでいるオステオスは、女官が差し出したカップを手に取り、紅茶の香りを楽しんでいる。今しがた発した言葉とは裏腹なその様子に、パンディオンは確かめずにはいらなかった。

「オステオス。それは、あなただけの意思ではなく、マウリーンやムスカリの意味でもあると言っんですね？」

オステオスはすぐには答えず、妙な間を開けた。結局、その紅茶には口をつけないままテーブルへと戻すと、

「ああ、そういうことになるね。君も、今のままでは何かと不便だろう。私やマウリーン達には翼人がいてくれるから、職務が滞ることはないが、君にはいないだろう？」

「しかし。あなたはスプレケリアの件に関して、先送りにすると言われたではありませんか。その詳しい理由も、なぜが私にだけは伏せている。それなのに。今度は職務が滞るからと言って

スプレケリアをガーデンに呼び寄せるだなんて。合点がゆきませんよ」

「では。こう言えば納得してくれるとも言つのかい？ 花芯（魂）を狩られず、無意味に生きながらえる者達が、やつかいな疫病を発生させている恐れがある。その為に、火急の速やかな排除が成されなければならないのだ。 花芯は“神苑の剣”でしか狩ることはできない。そして、それを操れるのはオルレカだけなのだ」

「確かに疫病が発生しているのは承知しています。ですが、それすらも含んだ上で先送りにしたのだと、私は思っていたのです」

パンディオンは尚も食い下がる。

オステオスの胸中が図れないままでは、承諾することはできないのだ。

「死を司るが故の、君のその優しさには敬服するよ。だが、ね。スプレケリアだけを取って物事を量るのは止めてもらいたい。この世界全体を考えれば、私はそう無茶な判断を下しているとは思えない従って もらえるね？」

この世界全体を…。ガーデンを取り巻くすべての世界を。そう言われては何も反論できない。

永遠に巡る魂の環…。5人いた神がひとり減り、4人になった時。誓い合った言葉だ。

オステオスは、パンディオンの答えを聞かないまま、部屋を後にした。それはまるで、パンディオンが逆らわないことを知っているようにも見える。

パンディオンは引き出しから文箱を取り出した。

「この書簡を、フィデリオの元へ持って行ってください。なるべく早く。いいですね？」

パンディオンは、フィデリオの領地から来ている役人を呼び、言付けた。

せめて心積もりでもできれば……。

パンディオンは、それぐらいしかしてやれないことを悔やんだ。オステオスの口調からすると、それは、そう遠くない未来に実現されるだろうからだ。

裏門からひっそりと駆け出していく馬の姿を見送るパンティオンの双眸は、暗い闇を見据えていて、ひたひたと音を潜めて近づいてくる、見えない何かに怯えるように、わが身を抱き締めた。

三人の翼人<8>

ガーデンの敷地から、少し離れた見晴らしのいい丘の上に、ひとつの小さな墓があった。墓石は苔生していて、風雨に晒された幾つかの箇所が崩れている。名前と思われるものも見えたが、彫られた年代が古すぎてよくはわからない。

墓石が見下ろす辺りにガーデンがあり、それをぐるりと囲うように城壁が立っている。ところどころ森や遺跡のような跡も見えた。

墓石の下には、真新しい花束が添えられていた。

忘れ去られたような墓石の下に、みずみずしさを残した花…。

地平線に陽が半分ほど姿を隠し、宵闇が音もなく、しつとりと辺りを覆う。

その闇に紛れるように、丘を登ってくるひとつの影が見える。その影は、真っ直ぐに墓石へとむかっているようである。

坂の途中に現れる、途切れ途切れの城壁や剥き出しの岩、岩。影は、その間を縫うように、泳ぐようにすすいと上ってくる。

最後の城壁は影よりも遥かに高く聳え立っていたが、入り口のような穴があり、影はそこを潜って更に近づいてくる。

残り少ない陽の光の中に現れた影の腰布の間には、すらりとした足が伸びており、古びた文様を柄と鞘に刻み込んだ立派な剣を携えていた。

腰から垂れ下がっている、金糸銀糸を幾重にも織り込んだ装飾の帯は、ガーデンのものではない。

影が墓前に立つと、地平線に長く光を留めていた陽がぷつりと消えた。

影は手に持っていたランプに火を灯すと、手を組み、跪いた。頭を垂れ、まるで自らの忠誠心を確認するかのように呟いた。

「我が主は、生涯唯一人と心に誓っております」

忠誠の言葉は、懺悔のような嘆きを含み、ランプの明かりに照らされた藍錆色の瞳は、映る明かりを揺らめかせながら、遠い記憶の彼方を漂っているようだった。

すでに、その名も読み取れない文字を見つめ、カスケードは跪いていた。

「我が主は…我が…主は。 この命が尽きるまで、あなただけなのです…」

帯の端を手に取り、遠い誰かを思い出しているのか。
愛しそくに、自らの唇を押し当てた。

ああ。

カスケードは嘆きの声を漏らすと、突っ伏した。
泣くでもなく 叫ぶでもなく カスケードは、帯の端を抱き
締め、肩を振るわせ続けた。

藍錆色：アメジストのような紫色。

三人の翼人<9>

ぎしつ。フィデリオが深く腰掛けた一人掛けのソファが軋んだ。虫の声と共に中庭から夜風が入り込んでくる。フィデリオの手にはパンディオンの書簡が握られていた。幾度読み返そうとも、ケリーがガーデンへ上がることに変わりはなかった。

フィデリオの足元に散らばっている、ガーデンからの正式文書にも同じような事柄が載っていた。私信の書簡と違うそれには、すべての神々の同意であるという言葉で終わり、代表者でもあるオステオスのサインで締め括られていた。

パンディオンも不安は的中していたのだ。

彼の書簡がフィデリオの元に着いた翌々日には、ガーデンから正式文書が送られてきたのだから。

そして、明日が。ケリーがオルレカとなるべく、オルレカとなる儀式を受けに。ガーデンへと赴く日なのである。

緊張して眠れないだろう心配したフィデリオは、ケリーの寝室に行つて様子を見ることにしたが、それが意外にも緊張などしておらず、拳句すうすうと寝息さえ立てて眠っていたのだ。事の重大さが理解できていないことが吉となるか。それはフィデリオにもわからないことだった。

ガーデンではフィデリオが教育係として、ケリーにつきつきりになる。フィデリオの花が選ばれたのだから、教育も遍く責任を持つのだ。

ケリーにとつてガーデンに行くということは、フィデリオを独占することができるという喜び。ただそれだけなのだ。

オルレカの何たるかなど問題ではなかったし、屋敷の外へ出られる喜びも又、それに拍車をかけた。

だから傍目から見ただけでは、ケリーの内面にある不安や怖れなどは量れない。

気がつけばしらじらと夜が明け始め、朝靄の冷気がテラスから吹き込んできてとても心地いい。階下では、朝食の準備に起きたサムとルードの忙しい物音が聞こえ始めた。

「花狩りまでには三月みつきしかない。三月で何ができると言うんだ」

フィデリオは憎憎しげに呟くと、ふとカスケードの姿が脳裏をよぎった。

口角を歪め、

「カスケードなら。ヤツなら平気なんだろうな。なぜヤツはオルレカを同じ翼人として見ないんだ。まったく屈折していて、理解できんっ」

フィデリオは散らばったままの文書を拾い上げ、机の引き出しの中に無造作に押し込む。いつまでも目の当たる場所にあって欲しくないと思ったからだ。

苛つく気持ちを落ち着かせる為に、テラスへと出た。朝靄が床板の上を這うように漂っている。肌に当たる風もなかなか心地よく、手摺りに凭れながら、紗がかかってばやけた朝日を眺めた。

こつこつと扉がノックされた。フィデリオは、サムかルードのどちらかが今日の出立のことでも訊ねに来たのだろうと思い、何も答えずにいた。

扉は躊躇いがちにほんの少しだけ開き、ケリーがひょっこりと顔を覗かせた。

虚を衝かれた形でケリーが現れたものだから、フィデリオはズいぶんと驚いて、

「ケリー。いやに早起きだね。嵐でもくるんじゃないのかな」

少し攣れた笑顔を見せた。自分の不安をケリーに悟られてはいけない。ケリーにはいつも笑っていて欲しいのだ。それがこの屋敷の中であるうと、ガーデンであるうと。

「どうした？ いつまでもそんな所にいないで、こつちへおいで。少し寒い気もするが、気持ちがいいよ」

手招きするフィデリオの元へ、ケリーはぱたぱたと足音を立てな

がら一目散にやって来た。

本当ね、ボク。ガーデンへ行くのが楽しみだったんだ。だってフィデリオがいつも行くところでしょう？ それなのに何でか早く目が覚めて、手や足が震えるんだよ。どうしてなの？

眉根を寄せて不安な思いを掌へとなぞるケリーを、フィデリオはその胸の中に優しく包み込んでやると、思いのほかケリーの夜着が冷えていることに気づく。あの扉の前ですっと立ち尽くしていたのかと思うと、やるせない気持ちになった。

ケリーは、自分の質問に答えてくれないフィデリオの背中を何度か小突いた。ようやく離してくれたフィデリオ、やはり先程のケリーには答えず、

「ベロニカも一緒に行けるのは、とても嬉しいことだね」
笑顔をケリーに向けたまま掌に書いてやる。

うん！ ケリーは満面の笑みを浮かべ、大きく頷いた。

花狩り：オステオスの神殿内にある花園で再生させるために、選ばれた人々を“神苑の剣”で狩る行為を指す。また、それが行われる機関を指す。

三人の翼人<10>

見送りに出てきたサムは、不安である胸中をフィデリオに告げた。「それは俺も同じだよ、サム。だけど 頼むからそんな悲しい顔をケリーには見せないでやってくれ。あの子には、いつでも帰ることのできる場所があるんだと そう思わせてやりたいんだ。わかるね？ サム」

「はい」

サムはそう言つて、すでに馬車へ乗り込んでいるケリーの元へ駆け寄つた。

「ケリーさま。ガーデンへ行かれましたら、けしてつまみ食いなどという卑しい真似をしてはいけませんよ？ それから、ベロニカを使つて人様にご迷惑をかけることも です。それから食事の好き嫌いを言つてもいけません。我儘もいけません。それから それから」

サムの言葉が詰まる。あれほど見せてはいけないと言われたのに、やっぱりサムの瞳には涙が溢れる。窓から顔を出したベロニカが首を傾げた後、ペロりとサムの頬を舐めた。

サムのお小言を聞かないで済むと思うと、清々するよ。だからサム。泣かないで？

ケリーはサムの頬に口づけた後、別れの挨拶をした。

「しばらく屋敷を空けることになるが ルード、サム。後のことは頼んだよ？」

そう言つてフィデリオは馬車に乗り込んだ。

向かい合わせに座っているケリーは、俯いたまま顔を上げようとしない。両膝に乘せられている拳は強く握り込まれていて、ケリーの足元で寝転がっていたベロニカも、鼻を鳴らしながら頭を持ち上げ、我が主人を見上げた。

フィデリオが御者側の小窓を軽くノックすると、直後 馬車は

うねるように大きく揺れ、動き始めた。

ぼつりとケリーの拳に涙が零れる。フィデリオに気づかれまいと、慌ててそれを拭いた。しかし、何度拭いても馬車が揺れるたびに涙は零れ落ちてくる。

その様子にフィデリオも気付いてはいたが、敢えて声はかけまいと思った。ケリーが必死の思いで隠そうとしているのだから、ここは気づかない振りをするべきなのだ。ケリーの涙の理由はわからない。オルレカのことなど小指の先ほどとも知り得ていないのだから、単純に考えれば、気心の知れたサムやルードとの別れを悲しんでいるのだろう。

フィデリオは、車窓を流れていく見慣れた風景に目をやった。

ガーデンでの生活は、ここでのものとは一変してしまう。サムやルードとの一時的な別れの悲しみが、ガーデンでは取るに足らないものだと思い知る瞬間がくるだろう。

フィデリオの眉間に深いしわが刻まれる。

剣の指南から、狩るべき紋章の見分け方など。ケリーが覚えなければならぬ事柄は数多くある。それらすべての指導をフィデリオが受け持つ。いつにも増してその大役に溜息が出る。

神苑の儀。オルレカになる為の前段階的な“拝領の儀”が、恙無く終了したとしても、魂を狩る剣 神苑の剣 に選ばれなければ、この儀式は失敗となり、また初めからやり直さなければならなくなる。

オルレカとなるべき“花”を探しに当て所もない旅を始めなければならぬのだ。それもいいかもしれない。フィデリオは苦笑する。次の花を探す旅にケリーを連れて行こう。きっと楽しい旅になる。

だから 選ばれなければいい。

フィデリオはそんな自分の考えを鼻で笑った。ケリーが選ばれないはずがないのだ。

あの森で。初めてみつけた真っ赤な花。辺りの木々といわ

ず、苔といわず、周囲を圧倒させていた赤い花の存在感は、間違スレリットいなくオルレカの資質を備わっていた。魂を狩るが故の孤高の魂が、森の中で凜と咲く一輪の赤い花にもあったのだ。

記憶の中の風景が、車窓の景色へとゆるやかに変わる。視線をケリーへ向けた。

ガーデンの人々の中に紛れれば、十四、五歳の少年と何ら変わらない姿をしている。それでも彼はまだ　この世に生を受けてまだ一年そこらしか経っていなかった。

その無垢な双眸に映るのが、累々と並ぶ屍のような人々であったり、幼き童であったりするのかと思うと　。やはり、選ばれなければいいと思ってしまう。そんな思いを持って余しながら、じっとケリーをみつめた。

彼の白い肌の上を、滑るように漆黒の髪が流れ落ち、涙を溜めているであろう双眸は、春の陽光を反射した湖面のきらめきのように輝いていることだろう。

ケリーの美しさは、命の終焉を迎えた者が見るには相応しいものであり、神苑の剣を他事さえた彼は空恐ろしくなるほどの美麗さに違いないと思う。

おかしなものだ、と呟く。

選ばれなければいいと願いながら、その実、選ばれて当然のような思考も働いてしまうのだ。フィデリオは、自分の矛盾した心の浅ましさを呪った。

泣き疲れたのか。ケリーは俯いたまま窓に凭れ、眠ってしまった。

顔にかかた髪を持ち上げ、肩にかけてやる。
ずいぶんと伸びたものだな。

ケリーの髪にはこれまで一度も鋏をいれたことがない。だからある意味思い入れがある。伏せた睫毛にも　白い肌にも　艶やかな唇にも。

フィデリオはそこで思考を止めた。

小窓をノックすると、STEMの返事が返ってきた。今はどこら辺りを走っているのだろうかと問うと、これから山越えに入るところですという答えが返ってきた。

目指すガーデンはまだ先である。フィデリオは座席に深く腰掛け、腕を組み、目を閉じた。

フィデリオたちの乗った馬車は、日が暮れる前にガーデンへ到着した。

「これは決まりごとだから。いいね？」

フィデリオはケリーをパンディオンの神殿へと連れて来た。

仕える神の神殿で生活することは、すでに定められたことである。教育係であつてもそれは曲げられない。ケリーはパンディオンの神殿でこれからは生活するのだ。そして、神苑の儀が行われる木染月の満月の晩まで、楔のためにケリーは神殿から出ることを許されない。

ケリーは心細そうな顔でフィデリオの袖口を掴んだまま離そうとしなかった。見兼ねたSTEMがケリーの手を取り、サムの言い付けをもう破るのかと諭すように言った。

ケリーは、別れ際のサムの泣き顔を思い出したのか、すぐにフィデリオから離れた。

STEMは安心したように、柔らかな笑みをケリーに見せた後、フィデリオの方へ向き直り、荷物を運びますので、私はここでと告げ、馬車の方へと戻って行った。

「ケリー。一先ずここでお別れだ。パンディオンさまは優しい方だから、安心するといい」

フィデリオは、門番に改めて到着を告げた。門番が中に入ってから程なく、数人の女官を連れ立ったパンディオンが直々に出迎えにやって来た。

「よく来ましたね。私がパンディオンです。神苑の儀までのひと月

半は、楔の為にフィデリオに会うことは許されませんが、儀が終われば出入りも自由になります。それまでの辛抱と思つて、楔を済ませなさい」

パンディオンの話し方はとてもゆっくりしていて、その後を追うように、フィデリオが筆談で内容を伝えてくれた。それが終わると、次は翼人としての挨拶が始まる。

「パンディオンさま。此度のスプレケリアの楔、併せて神苑の儀が恙無く終わりますことをお祈り申し上げます」

「フィデリオ。堅い挨拶など無用です。それよりも、日暮れまでまだ時間もあることですし、もうしばらくスプレケリアと過ごしていても良いのですよ？」

「いいえ。私はここで休暇いたします。いつまでも私の姿を見ていればスプレケリアに里心がつきましよう。別れがたいのは仕方の無いこと。ですが、スプレケリアは賢い子です。私の真意をきちんと汲んでくれるでしょう」

フィデリオは、パンディオンの心遣いをやんわりと断った。離れがたいのはむしろ自身の方だと悟っていたから、楔が済む間に自分の気持ちにも整理をつけて、晴れてオルレカとなったケリーの為に、尽力を尽くそうと思うのだ。

ケリーにフィデリオの言葉はわからない。いつもの別れの抱擁がない現状が、言葉の代わりにそれと理解させた。

フィデリオの目に映るケリーは、涙を堪えているいつもと変わらない泣き虫の少年だった。我儘を言つてはいけない。サムと交わした約束を、ただひたすら守っていた。
では。

フィデリオは軽く会釈をして門を離れた。振り返りもせずに階段をゆっくりと下りていき、石畳の道に出ると真つ直ぐオステオスの神殿へと歩いていくフィデリオの後姿をじつと見送るケリーに、女官の一人が声をかけようとしたが、パンディオンがそれを遮った。女官たちはそれぞれ会釈をし、しずしずと神殿の中へと引き上げて

いく。

門の前では、ケリーとパンディオンだけが
送っていた。

フィデリオを見

三人の翼人<11>

ケリーの楔の一日は、身体を清める入浴から始まる。

ケリー付きの女官にはパンディオンの神殿の中で一番の年長者になる女性が選ばれた。ケリーがこの神殿で過ごす間の世話は、すべて彼女の仕事となる。

夜明け前に彼女はケリーの部屋へと赴き、浴場までまだ目が覚めて間もない少年を連れて行く。当然、身体を清める作業も彼女の役目なのだが、幼い頃は別としても、身体を他人に触れることなど、ケリーにとっては初めての経験だった。

寝ぼけ眼で連れられて来た浴室の中、揺らめくランプの明かりはケリーと中年女官との激しい攻防戦を映し出していた。

女官は、オルレカの身体を清めるのは自分の役目なのだと何度も伝えようとしたが、如何せんケリーは筆談でなければ話が通じなかった。おまけに酷い人見知りを起こしていて、彼女に触れられるのが例え指先であろうとも、断固拒否する構えであるのだ。

どうして見知らぬ女性に身体に触れられないのか。
自分の身体くらい自分で洗えるのだ。よけいなお世話である。

しかしオルレカ付きの女官は、ケリーの状況を聞かされていないのか。尚も説明を言葉で行う。

「良いですか？ 楔、と言いますのはお体もさることながら、お心も清めるものなのです。その為の一日の始まりを入浴から行うのは楔の慣わしなのですから、いい加減に諦めて大人しくなさいませ」
手を伸ばしてくる女官の手をぴしゃりと払いのけ、浴室の向こうで大人しく待っているベロニカへ向け、声ならぬ叫びならぬ奇声を上げると、忠犬はその耳をぴくりと動かし主の危機を察した。器用に浴室の扉を開け、主の下へと駆けつけると、薄絹一枚の主が泣きそうな顔で訴えているではないか。コイツをやっつけてと。

忠犬は女官と睨み合った。大切な主人を守るのは自分の使命なの

だ。ベロニカは、ううと唸り臨戦態勢に入る。

女官にも負けるわけにはいかない事情があった。

ケリーの世話付きを任された以上、それはつまり楔の成功をも任されたことに他ならないのだ。これまで楔を失敗した女官の話など聞いたことがない。もし失敗したとなったら、それはとてつもない不名誉なことである。目の前に立つ美姫の如く麗しい面立ちの少年が、神苑の剣に選ばれる選べないはこの際どうでもいい。

楔さえ 無事終わらせることができればいいのだ。

女官はごくりと生唾を飲み込んだ。己の前に立ちはだかる大型犬と対峙し、覚悟を決めたようである。

わかりましたと女官は決意を表明し、腰を低く屈めた。

浴場から奇声が発せられ、すわ何事かと色めき立つパンディオンの神殿内。

執務室では早朝から書類に目を通していたパンディオンは、おやおやと目を細めて笑った。

ケリーは、まだ拭いきれていない水滴をぼたぼたと派手に零しながら、同じく毛を濡らしたベロニカを従え、神殿の廊下を歩いていた。

かろうじて薄絹を着てはいるが、濡れた身体にそれはあまり効果がないようで、湯で火照った薄桃色の肌が浮かび上がっている。

ひたひたと裸足で廊下を突き進むケリーの表情は、明らかに慚然としていて不機嫌だった。

同じ強引さでも、サムはもっと愛嬌があった。ケリーと同じ目線で説得してくるから最後には言うう事を聞く羽目になる。それでも嫌気が差すことはない。しかし、あの女官は違った。ケリーの気持ちなど一切無視して、まるで芋の皮むきのように淡々とこなそうとするのだ。

ぼくは芋じゃない。なあ、そうだろう？ ベロニカへ視線を向けると彼女は、きゅうんと鼻を鳴らして答えてくれた。

部屋へ戻ったケリーは、またやって来るかもしれない女官の侵入を防ぐ為に扉を厳重に施錠してやった。

ふんと鼻息荒く振り返ると、無駄に広いだだけの室内が目飛び込んできた。

天蓋付きの大きなベッドは確かに寝心地は良かった。大きな体のベロニカと一緒に寝ても少しも狭くはなかったし、それどころかよけいに広々と感じられて何度も泣きそうになったくらいだ。

唯一外界との接点であるテラスへの出入り口には、大きな錠前が取り付けられていた。

楔とは、神殿から出ることが許されないのではなくて、外気との触れ合いを許さないものなのだろう。だとするなら、あの女官も同じように楔の間はこの神殿に閉じ込められるということだ。

ケリーは少しだけ後悔した。

自分が我慢することでこの楔が滞りなく終われば、彼女の苦痛も軽減されるはずである。

閉じ込められることが苦痛でないはずがない　それが誰よりも理解できるケリーだからこそその後悔だった。

それでもやっぱりべたべたと触られるのは嫌いだと思うケリーは、明日もまたやって来る入浴をどうすればいいか思案に暮れる。

ぎゅっとカーテンを握り締め、しかめっ面になる。その足元に、朝焼けの光が差し込んできた。顔を上げて外を見ると、しらじらと明けていく空が赤紫に染まっていた。

フィデリオはもう起きているだろうかと窓に縋りついて、隣りの神殿の様子を窺ってみる。フィデリオの部屋はケリーのいる場所とは反対側にある為、その様子を垣間見ることができなかった。

項垂れて溜息を吐く。

ガーデンでつまらない場所。とくに

そう思いながらも一度テラスの遠くに目を遣ると、石畳の道を横切る人影をみつけた。夜が明けたばかりだというのに、一体誰だろうとケリーは首を傾げた。

こちらに近づいてくるようで、人影の姿が少しずつはつきりしてきた。

影が近づいてくるとテラスの手摺りが邪魔で見えなくなるものだから、ケリーは急いで一人掛け用のソファを引き摺って持ってきた。ソファに乗るとその人影は再度姿を現した。よく見えるようにと背伸びもしてみよう。

見慣れない衣服が目飛び込んできた。もっとよく見ようと窓に張り付くと、その人影は突然止まり、ケリーのいる部屋を見上げた。見ていたのが知れてしまったのだろうか。

とくん　と鼓動が大きく跳ねた。

ケリーは引き込まれるように彼の姿に魅入った。

初めて見る模様の上着。立派な剣を携え、背筋を伸ばしてこちらを見上げている彼の凛としたシルエットに息を呑んだ。

月下の明晰。

明け始めた赤紫の空。

残された白い月の下で彼の姿だけがくっきりと浮かび上がる。辺りの景色は皆朧げなのに、彼だけがはつきりと見えた。

何て綺麗な人なんだろうと、ケリーはうっとりときとみつめる。

押し付けるように顔を近づけたせいでガラスが白く曇り、慌ててそれを拭き取ったが彼の姿はもう消えていた。

夢か幻か。

他所からの来訪者なのか。それとも神官か何か。それにしても剣を携えているのはおかしかろう。

ケリーはあれこれと逡巡する。そのどれもがしっくりこなくて苛々することこの上ない。楔のもしかさが一層増しただけである。

それでも退屈していたケリーは、何故だか謎めいて見えた彼の正体が知りたくて、その日から時間が許す限りテラスの前で過ごすようになった。

三人の翼人<12>

彼が、必ず決まった時間にこの神殿の前を通ることにケリーは気がついた。

夜明け前と夕暮れ時である。

女官は相変わらずケリーの言葉に耳を貸そうとはせず、ひたすら自らの役目を果たそうとそればかりだった。その甲斐甲斐しさは、良く言えば女官見習いのもようであつたが、すでにトウが立っている彼女では 気の毒だが初々しさは微塵もない。

神殿内の誰とも馴染もうとしないケリーは、決まった時間に姿を見せる彼を眺めるのが唯一の楽しみとなっていた。

目が合ったのは 少なくともケリーはそう思っている 最初の一度きりで、それからただ黙々と歩いていく彼を、こっそりとテラスの窓から覗き見るだけだった。

いつもと同じ上着 。腰には複雑な文様が刻まれた長剣 。背筋を伸ばして歩く彼の姿は男であるのに、さながら気品溢れる白百合のように凜としていて目を惹きつけた。

ある日 。一陣の風が彼の上着の裾を大きくたなびかせた。その下から現れた帯の絢爛さはケリーを釘付けにした。上着の乱れを整える彼の所作のひとつひとつが優雅で、彼がその場を去った後、ケリーは鏡の前で彼の真似をして楽しんだ。

ケリーのそれは、けして優雅な動きとは言えなかったが、鏡に映る自分の姿に彼を重ね合わせると 何だかとても面映かつたが 彼のように背筋を伸ばしてみれば、腰にあの立派な剣を携えているような錯覚に陥り、ただの部屋着の綿のブラウスが、彼の身体を包んでいる異国の服のように見えた。

あの人の声はどんなだろう。

自分の耳が不自由であることを忘れたケリーは、聞こえもしない彼の紡ぎ出す声や言葉に思いを馳せた。

ケリーの神苑の儀を明日に控えたフィデリオの元へ、オルレカの衣装が届いた。花狩りの時に着用するものだ。もちろん神苑の儀でも身につける。

箱から取り出した衣装の出来栄に、フィデリオは溜息を吐く。どんな思いであの二人がこれを縫ったのだろうかと思う。サムとルードである。

生地はすべて絹で織られ、胸当てにはスプレケリアの花の色でもある紅い宝石が縫い込まれていた。胸の中央には大振りの鮮赤色の貴石が、そこから左右に星型に縁取られた刺繍をさらに囲うように、小振りの貴石が散りばめられている。

額飾りの貴石は涙の雫にカッティングされていて、こちらは大振りな石だった。

明日の晚には、いよいよケリーがこれを身に纏い、儀に望むのだ。オルレカとして、神苑の剣と二対の翼を得るのだ。フィデリオの中で、すでにケリーは選ばれるものと決まっていた。望む望まないに関わらず、ケリーはオルレカとして剣を振るう日が来るのである。その時には、ケリーの辛さも苦しさも、何もかもと一緒に抱えて生きていくのだ。

フィデリオは心に誓った。

木染月の満月の日を迎えた。

夜の帳が下り始める夕刻。

フィデリオは、パンディオンの神殿へとオルレカの衣装を届けに向かっていた。

ケリーとはまだ会えないのだが、何故だか浮き足立っていた。大きな箱を抱え、フィデリオは早足で石畳の上を進んだ。

「大きな荷物だな。今夜オルレカが着る衣装か。ご苦労なことだ。それが花狩りをするわけでもあるまい？」

聞き慣れた声の嫌味をやり過ごすこともできたが、今日はとても

気分がよかった。極度の緊張は、精神的にどこかの螺子が緩むよう
だ。

「しかし儀式である以上、形も大事だ。一度きりの儀式なんだから
それに花狩りの衣装でもあるんだ。美しいものに越したことはな
いだろう」

「ずいぶんとご機嫌だな。以前はあんなに嫌がっていたのに、変わ
れば変わるものだ。それとも　ご執心の花がオルレカになるのは
嬉しいものか」

「いやに絡むじゃないか。確かに以前の俺は気が重たくて仕様が
なかった。カスケードの耳にも入っているだろうが　今、国中のあ
ちこちで疫病が流行っている。病気は花芯の命を奪うことなく、た
だ病を蔓延させているだけだ。オルレカが必要なのだと言われれば、
納得もする。　違うか？」

フィデリオが問う。カスケードの顔に暗い影が落ち、ぽつりと呟
く。

「病を治すことなく花芯を奪うが正義か……？」

フィデリオは腑に落ちない顔で、どういう意味だと訊き返す。

しかしカスケードは踵を返し、背を向けたまま、

「意味だと？　　気にするな。お前に言ったのではない」

そう言って立ち去るカスケードの背中を、フィデリオは憎憎しく
睨みつけた。

フィデリオだけではない。その場に居合わせた誰もが、形容し
難いほどの美しさと気品を漂わせるケリーに心を奪われていた。

衣装の煌びやかさなど瑣末なことである。ケリーの所作のひとつ
ひとつが　まるで　王族のそのようで、儀式に居合わせてい
る者は呼吸することすら忘れてしまうほどだ。

その中であって、フィデリオだけはさの様子に奇妙な違和感を覚
えた。裾捌きの際の細やかな指使い。腰に体重を乗せる独特の立ち
姿が誰かに似ている。

ケリーは四人の神々の前に立ち、両手を高々と天へ向け 掲げた。満月は煌煌と輝き、下界を照らす。

ケリーを中心に、円を描くようにして立つ神々の祝詞が天へと吸い込まれていくと、満月から一条の光が差し込んできた。神殿を囲む草原が、月からの光で引き起こされた風でざわざわと波立ち始める。

光はケリーだけを取り込むように広がり、目も眩むような強い光を放った。

そして、あれほど激しかった風がぴたりと止み、耳鳴りがするほどの静寂が訪れた。

月光の中の細かな光の粒子が次々にケリーの肢体を包み込む。螺旋状に回転しながら、光の粒子はひとつの形を形成し始めた。

背中に群がる光の粒子の密度が濃くなっていく。俯いたケリーの顔を粒子の輝きが激しく照らすと、舞い上がった彼の黒髪の向こうに二対の翼が現れた。

ケリーは翼を広げ羽ばたかせると、羽根の先から残された粒子が飛ばされ、きらきらと光を放ちながら落下していく。

そしてケリーの頭上には、ふわりと一振りの剣が浮かんていた。古びた文字のような文様が描かれた鞘に収まっている。柔らかな曲線を描いたその剣は、ゆっくりとケリーの元へ下りてくる。

ケリーはその剣を受け取り、しっかりと握り締めた。ケリーは選ばれたのだ。儀式は成功した。

そしてケリーは迷うことなく、それを腰に携えた。

瞬間。フィデリオは違和感の正体を知る。

カスケードである。ケリーのすべての所作のオリジナルは 間違いなくカスケードだった。

ぎゅうと手を握り締められて我に帰ると、儀式はすっかり終わっていて、目の前には無事大役を終えたケリーが立っていた。何度声をかけても返事をしなかったものだから、不安そうな表情で覗き込んでいたようだ。

フィデリオの目がこちらを向いてくれたことでようやく安堵したケリーは、

「ぼく、上手にできていた？」

「ああ。上手だったよ。あの裾の捌き方なんて見事なものだ。あれは一体誰に教わったんだい」

「誰にも教わらないよ？ だって、あの神殿にいる人たちは誰もぼくの言葉をきいてくれないからね。」

「じゃあ、どうやって覚えたんだ？ 屋敷では誰も教えなかったはずだ」

知らない。

「そんなはずはない」

一体だれなんだと尚も問いただすフィデリオの声音には、明らかに敵意が感じられた。

ケリーは顔を顰める。フィデリオがどうしてそんなことに拘るのが理解できないからだ。それでも懸命に応えようと、辺りを見回してみるが見当たらない。

そう告げようとした時である。

一人の青年の姿が目飛び込んできた。

あんな風に歩きたい。あんな風に立ち、振舞いたい。そう願う、どれだけの時間を費やして彼をみつめていただろうか。その人物が、今、自分と同じ場所に立っている。ケリーの心は震えた。

その横では、ケリーの視線の先に立つカスケードを、険しい表情で睨み据えるフィデリオがいた。

三人の翼人<13>

立ち尽くしているケリーの前に、カスケードがゆっくりと近づいてきた。

ケリーの足は、まるで地面に吸い付いているかのように動かない。一歩一歩近づいてくる、カスケードの草の葉を踏みしめる音が耳につく。

「新たなオルレカの誕生を、今は素直に喜ぶのでしょうか？」

ケリーは、カスケードが何か自分に話しかけてきたのはわかったが、内容はさっぱりだった。困ったような、悲しいような顔でケリーがカスケードを見上げると、彼は ああ と呟いた。

そして自らの唇を指差した後、ケリーの唇へその指を軽く当て、もう一度自分の唇を指した。

「ゆっくり話すから。ここを見る。 オルレカ。おめでとう。フ

イデリオが、見立てた、その衣装が、とても、よく似合う」

ああ！ わかる。わかるよ。えっと…えっと。あなたの真似を…えっと。真似…

ケリーは嬉しくて仕様がなかった。手振り身振りで喜びを表す。何せ、筆談しなくてもカスケード言いたいことが理解できるのだから。ただし、自分の気持ちは上手いかわからない。急いて言葉が何度も詰まり、えっとえっとを繰り返すばかりである。

ケリーのそんな姿がいじらしくて、カスケードのいつもの皮肉も影を潜める。

急いてばかりで上手く言えないケリーの唇に指を押し当てて、カスケードは優しく制止した。

「ゆっくりだ。そう ゆっくりと。 読唇術だよ。練習したら

もう少し早く会話が出来るようになる」

カスケードはそれだけ言ってケリーの傍を離れた。するとケリーは慌ててカスケードの前に立ちどかる。

両手を広げて彼の行く手を阻み、名前を教えて欲しいと懇願した。今、目の前に憧れの人物がいるのだ。知りたかった名前。

カスケードの表情が突然曇り、見つめ返していた視線を僅かに横へずらした。

「カスケードニウだ」

ぶつきらばうに名乗ると、ケリーの横をすり抜けるようにして通り過ぎていく。

カスケード。カスケード。カスケード…。

ケリーは覚えたての単語のように、カスケードの名前を繰り返した。そして、なぜだか慌てて顔を上げると、数歩歩いた先でカスケードが立ち止まっていた。

彼は振り返り。

「狂乱は静かにやってくる。お前にも。俺にも」

視線を落とし、そう呟いた。

習いたての読唇術で、ケリーは辛うじてその言葉を拾うことが出来たが、それが何を意味するのかまでは理解することは出来なかった。

何がやってくるのか。

それとは何なのか。

なぜ、ケリーにもカスケードにも、それが訪れるのか。

ケリーは呆けた顔でカスケードを見つめた。

カスケードはそれだけ言うと、踵を返し歩き出した。

今の彼は、ケリーの良く知る異国の衣装ではなかったが、ドレスの多いガーデンの衣装でも所作の優雅さは相変わらずで、その意味を訊くことも忘れ、ケリーはぼんやりとカスケードの背中を眺めていた。

草原の中を颯爽と歩くその姿は凛々しく優雅で、ケリーの心の中にカスケードの存在が染み渡っていく。

月の光がじんわりと沁み込んでくるような、柔らかな早さでカス
ケードはケリーの心を支配していった。

次回より第二章 開始します

廻り出した環<1>

静まり返る湖面に、微かな水音がひとつ響く。

ゆるりと水面から現れた細い指。何かを掴むような仕草をして、ゆるりと沈む。

にわかに湖面がさざめくと、弾けた水滴が玉になり辺りを激しく打ちつける。

その音に紛れながら、呪文のような美しい歌声が聞こえてきた。悲しげな旋律のその歌は、ただ一人を愛する歌であり、ただ一人を呪う歌でもあった。

霧の中に歌声は含まれて、緑深い森の中を当て所もなく彷徨うようにたゆたう。

疫病の発端の地でもあるプラージュ地方の小さな漁村 ラケナリア。パンディオンの部下は現状を把握するよう命を受け、視察に来ていた。

当初ガーデンでは、海から吹く潮風に因る塩害であろうと見ていた。しかし国全土を徐々に覆い尽くそうとするそれは、塩害に因るものではないようなのだ。

村のそここに骸と見紛うばかりに干乾びた人々が横たわっていた。

だが ガーデンの人々は死なない。

神苑の剣により魂を狩られ、オステオスの庭へと運ばれた人々はそこで再生の時を待つ。そうして死なない彼らは、巡る命の環の中を幾度も再生を繰り返して、ガーデンを生きているのだ。

干乾びても尚、彼らの額にはオステオスの祝福の紋章が輝いている。それは、まだ彼らが狩られる人々ではない証だとも言えた。

「しかしこれは、また。随分と酷いものだ。パンディオンさまは決して我らには伝染りはしないと仰ってくださいましたものの、この有様

を目の当たりにしては　いささか不安になるというものだ」

「プラージュはフィデリオさまの領地でありましたね。このような事態になるまで何故放っておかれたのだろうか」

異臭が漂うその骸のひとつを、ある意味で感慨深げに眺めながら言った。もう一人の男は鼻を上着で覆い、臭いを嗅ぐのを酷く嫌いながら　それは君　と言い、

「フィデリオさまが今のオルレカさまにご執心だからだよ」

「いやいやそれは噂だろう？　幾ら何でもご自分のお立場は理解しておられるはずだ。領地の大事は最も慮るべきこと。君もそのような噂を信じるなど。浅はかにも程があるというものだ」

「君が何故と問うからこそ答えたんじゃないか。　ああ、ほら。あそこをご覧。まだ動ける者がいるようだね」

彼が指し示したのは、領主の屋敷の門から顔を覗かせている少女だった。

少女は、この身分の高そうな衣服を身に纏った二人の男をじっと見つめていた。救いを求めるわけでもなく、その双眸は見知らぬ侵入者を威嚇しているように見えた。

「あの子は救われると思うかい？」

「まず無理だろうね。ここは十中八九オルレカさまに拠って殲滅される」

「あの子が侵されているとは限らないじゃないか。今からでも保護すれば間に合うかもしれないだろう」

そう真つ当な意見を述べる同行者に向ける男の瞳に、蔑みが籠る。

「愚問だね。他の国民の不安材料はすべて取り除かなければならない。多くの国民のために神々は、その胸から血を流しながらラケナリアを抹消するんだ。それがあの子にとっても最良であるのだし。何より　新しいオルレカさまの御身を拝める最初のひとりになれるかもしれないんだ。素晴らしいことじゃないか。君は見たかい？

今度のオルレカさまの美しさは尋常じゃあない。フィデリオさまが心を奪われてしまうのも頷ける」

だから、と彼は言つて少女に一瞥をくれ、誰一人不幸と思う者など居やしないのだと吐き捨てた。

もう一人の男はなにも語らなかつた。その気すら失せたと云つた方がいい。頭を二三度振り、その場を後にした。

二人が屋敷から離れ始めると、少女は首を伸ばし、彼らの行く先を見た。

男が振り返つた時にはすでに少女の姿は消えていた。

パンディオンの神殿から、すでに日常と化した女官の叫び声が轟いてくる。

「ああ。これはいい所においで下さいました。フィデリオさま。オルレカさまをご存知ありませんか？」

息を切らしながら神殿を飛び出してきた女官の目の前に、都合よくフィデリオが立っていたのだ。

どこか出先から戻つて来たばかりなのか、二人は正装をしていた。フィデリオは、ステムとちらりと目を合わせると、

「残念だが、私たちはたつた今戻つて来たばかりでね。オルレカに行く先は皆目見当がつかない。いつもいつもすまないね。私が自由奔放に育てたのが仇になつたようだ」

「いいえ。そんな滅相もございませんわ。確かにいささか奔放ではございますが。わたくし、その分使命に燃えておりまして、必ず

あの神苑の儀で見せた所作が常日頃から出せるように頑張りますわ。それでは」

彼女は軽く会釈をし、神殿へ戻つて行つた。

神苑の儀で見せた所作。その言葉にフィデリオの表情がにわかに曇る。

「フィデリオさま？ お急ぎになりませんか、オステオスさま方がお待ちでございます」

塞ぎ込むように口を噤んだ主に、ステムが優しく声をかけた。

フィデリオは思い出したように、ああと呟いてオステオスの神殿

へと向かった。

ラケナリアの報告である。

フィデリオが握り締めている書簡がそれだった。

都合よく奇跡が起こるはずもなく、フィデリオの領地の小さな漁村は壊滅的な打撃を被っていた。そこまでの放置の理由を問いただされるだろうことは必至である。

しかし。

フィデリオにとってそれは寝耳に水だった。国中を震え上がらせている流行病が、フィデリオの領地から出たものだということ。

フィデリオとカスケードの二人はそれぞれ領地を国中に持ち、その町や村に必ず屋敷を持っていた。二人はそれぞれの領地に行くとその屋敷に宿泊し、何日もかけて見回りをする。

それを怠ったことなど唯の一度もないとフィデリオは豪語する。

それなのに病は突然現れ、フィデリオの領地を荒らし、その触手を国中へと広げようとしているのだ。

パンディオンが調査に向かわせた部下の報告を、フィデリオにも知らせてくれた。とにかくにも件のラケナリアに急いだフィデリオとSTEMの目に飛び込んできたのは、報告通りの骸ばかりで、唯一の希望とも言えた少女の姿はなかった。

骸のひとつとなったのだろうとSTEMが溜息交じりに呟いた。

「急ぎましょう」

STEMは立ち止まってしまった主の背を軽く押した。機械人形のそれのように、フィデリオの足はぎくしゃくと歩み始める。

胸をよぎるケリーへの心残りを、胸の奥深くに押し込めて。

廻り出した環<2>

フィデリオは苦渋に満ちた面持ちで、ステムから手渡された一通の手紙をくしゃりと握り潰した。扉の横で控えているステムもまた同じ表情である。

「参ったな…。ガウラの病院はことごとく満杯なんだろう？」

フィデリオが苦々しく呟く。ステムはそれに対し、無言で頷くことしか出来ない。

「ガウラから最も近い街はどこになる」

「フルーブ地方のコリウスになります。ですが病院設備に些か問題がございます。そこは病院と呼ぶにはおこがましい、只の診療所でございますので、設備が整ったことを条件に致しますとデュラントが最有力でしょう。しかしこれには時間的な問題がございますので、200km近く南下しなければならぬデュラントへ搬送するよりは、都のエスプラントへ向かわせた方が遥かによろしいのではないかと思われます」

それについてフィデリオは即答を避けた。

都エスプラントはここガーデンのお膝元だ。最も神域に近い場所である。国全土への拡がり警戒してオルレカの儀式を早めた神々であるから、その中枢へ病に侵された者を迎え入れる懐の広さを望むべくも無い。

花狩りが とステムが呟く。

「花狩りが近うございます。ご決断は早い方が賢明かと思われます」

「いやもう少し待とう。回復するかもしれんからな」

「ご決断を」

ステムは厳しい口調でフィデリオの決断を仰ぐ。

フィデリオはくしゃくしゃに丸めた手紙を握り込んだまま、顔を覆った。答えは 最初から決まっていたのだ。決断などする必要もなく、処置の早さだけが求められているのだ。

それなら。

「それなら収容せずにそのまま屋敷で療養させるとしよう。病院設備は重病患者のみに限らせるんだ」

「そうですね。パンデイオンさまからも正式な原因は未発表のままですし…。なにか良い解決策が出てくるやもしれませんから」

「決断を迫ったヤツが言うことか？」

STEMは悲しげな笑みを湛えながら、

「せめて 他の街や村に広がらぬよう力を尽くすほか…ないでしょう」

パンパン。

軽い拍手の後。星空からゆっくりと降下してくるケリーの姿が闇に浮かぶ。得意げな表情で喉を鳴らしながら爪先から着地すると、羽ばたきを二三度してから一気にそれを仕舞い込む。

「見事だな。二週間程度でどれほど上達するものか興味はあったが…。実際に見事だ」

そりゃあ。特訓だったもん。

ケリーは仁王立ちでカスケードを見上げた。

二週間でどれほどカスケードの飛行術に近づけたかはわからないが、かなりの集中力でその習得には励んだつもりである。

カスケードの科白が心底褒めているようにには思えなかったが、成長は認めてくれていたようだった。

「明日から始まるな。花狩りが…」

カスケードが思い出したように口にした花狩りの言葉。

神なかり月の一日を明日に控えていた。

明日の晩からケリーの花狩りがいよいよ始まるのだ。

オルレカの重荷を未だ理解していないケリーは、楽しそうに翼を羽ばたかせてみたり消してみたりと浮かれている。

「神苑の剣には馴れたか？」

馴れたよ。最初は身体の中にあんなものがあるって思っただけで

違和感があつたけど。もう

何ともない。フィデリオにも褒められたんだ。

そうかとカスケードは苦笑いを浮かべる。

それでね。明日の晩はラケナリアって村に行くんだ。ぼくが住んでたフィデリオの屋敷からそ

んなに遠くないから、こつそりルードやサムに会って来ようかって思うんだ。花狩りの衣装を

着たぼくを見たらきつと驚くと思うよ。サムなんて特にね！

ラケナリア。やはりあそこが一番最初なのか。

「なにをするかは聞いているんだろう？」

カスケードの声音が低く籠る。自分が言わんとしていることをケリーが果たして汲み取れるのだろうか、いささか不安であるがそれはカスケードの踏み込める部分ではなく、理解できないのなら、それはそれで幸せなのだろうと独善的な自己完結で終わる。

印のある人を迎えに行くんだよ？

ケリーは自分の額の辺りに指を宛がい無邪気に笑った。

「そうか。迎えに行くのか」

うん。そう。“花園”まで連れて行ってあげるのがお役目だつてフィデリオが教えてくれたん

だ。ぼくね。一度…だけでもないか。フィデリオを困らせることを言ったことがあるんだ。ぼ

くつて疎まれる存在なの？つて。フィデリオは違うつて答えてくれたけど…。きつとあのままフ

ィデリオの屋敷で暮らしていたら、今もあの気持ちを抱えていたと思うんだ。だから オルレカ

になつて フィデリオの役に立てることがとても嬉しいんだ。…本当だよ？

ケリーは人差し指を唇に当て、これ内緒だよと恥ずかしそうに頬を赤らめながら言った。

秋風が吹く丘の上でそう照れ笑いするケリーとは裏腹に、カスケ

ードは言いようのない不快感を感じていた。

オルレカの役目を綺麗事のように言い繕っているフィデリオに対してなのか。不可侵であるはずのこのオルレカに必要な以上に関わっている己自身なのか。

それとも、綺麗事に惑わされ花狩りの意味を理解することすらしないケリーなのか。

夜風にそよぐコスモスの中でケリーは無邪気に只笑っている。その笑顔は、カスケードの中の不快感を押さえつけ、ちりちりとその胸を痛ませた。

廻り出した環く3>

身体に纏わりつく風に潮が含まれ始める。べたべたとした湿り気を含んだ風がケリーの向かう方角から吹き付けてくる。

月のない新月の夜。漂う雲間をすり抜け星空の中を滑るようにケリーは飛んでいく。軽やかに羽根をはためかせながら一心不乱に目的地 ラケナリアへと向かった。

「いいかい、ケリー。けして間違えてはいけないよ。額の祝福の紋章がくすんでいる者だけが花園へ迎え入れられるのだから」

念を押すようにフィデリオはケリーに言った。嫌と言うほど習ったのだから間違えるわけがないとケリーは口を尖らせる。それでもフィデリオは

「祝福の紋章がくすんでいる者は、皆、花園へ。行けばすぐにわかるから…」

と繰り返した。

目の前に夜の闇よりも暗く、真つ黒な海が広がり始めた。眼下にはラケナリアの村が見える。誰もいないのか。村の明かりは申し訳程度にとどころ点いているだけだった。

ケリーが村へと降下する。

村の入り口に立ったケリーは、初めて嗅ぐ異臭に顔を顰めながら、人気の無い道を進み、一軒一軒家を開け、中を調べる。だがどこにも村人の姿は無かった。

道をそのまま進んでいくと広場に出た。通りの真ん中には大きな噴水が水を噴き出している。そこには多くの街灯が立ち並び、本来ならば村人の憩いの場となっているのだろう。だが今はひっそりと静まり返り、息を殺しているようにも見えた。

ケリーの視線が噴水のある一点に釘付けになる。

オブジェなのだろうか。噴水の周りになにかが積み上げられている。ケリーは訝しげに歩を進めた。緊張からか喉がひどく渴いた。唾を飲み込もうにも口の中はからからに渴いていて、軽い痛みさえも伴う。

噴水の前に立ったケリーは愕然とした。

これは…なに？

噴水の前に積み上げられていたのは、まさしくケリーが捜し歩いていたラケナリアの村人たちだった。

村に入った頃から漂っていた異臭はここから発していたらしく、先程とは比べようが無いほどの悪臭が立ち上っていた。

とにかく紋章を調べようと近づいてみる。

しかし、彼らは統べ括られた、狩られる者たちだった。

どこの誰がやったのか、ご丁寧にもそれらを一箇所に集めておいたのだ。

皆を花園へ…。

ケリーは熱に浮かされたうわ言のように呟いた。

緊張の余り手が震える。神苑の剣を呼び出すのに手こずってしま

う。
風が吹き、噴水の飛沫がケリーの顔にかかるが、その風に潮の香りが含まれていないことにケリーは気づかない。焦りの表情を浮かべながら、剣を呼び出すのに必死である。

月に仕えし我が主。御霊迎えの神苑の剣。

ようやく思い出した呪文を唱え終えると、ケリーの身体はすぐに輝き始める。

ケリーの額にスプレケリアの花が浮かび上がり、そこからゆつくりと剣が現れる。目の前に下りてきた剣の鞘をケリーは掴み、それを腰に携え、大きく息を吐いた。

えっと。大人数の場合は剣を地に刺して。

謀られたように絶妙のタイミングでケリーは出がけにこれを反復させられた。

花園をイメージして。それから…。

しかし、ケリーは疑問も抱かずフィデリオに言われた通り、花園をイメージしながら土中へと剣を突き刺した。

深々と地に刺さった剣から風と光が沸き起こり、渦を成したそれは噴水の周りを駆け巡る。

風は噴水の水をも巻き込み、ケリーはぐつしよりと濡れそぼった。一時の間。ケリーは動けずにいた。

頬に張り付いた髪の毛から雫が幾筋も流れ落ちていく。激しく体力を消耗したケリーの両肩は、乱れた息で大きく上下に揺れている。両手で頭を支えながら山積みになっていた村人たちへと視線を移した。

彼らは跡形もなく消え去っている。風と水で吹き荒れた形跡だけが花狩りの証であり、彼らが確かにそこに在ったという証でもあった。

潮気のない風は止んではいなかったが、ケリーはこの初仕事に幾らかの満足感を得ていた。

これならフィデリオにも褒められるだろう。後は、村にくすんだ紋章を持つ村人が残されていないかを確認するだけだった。

とん。

ケリーの腰の辺りになにかが当たった。ケリーは剣を鞘に収めながら振り返る。

女の子。

こんな夜更けにこんな場所だとケリーは不思議に思った。

少女の額の紋章は眩しいほどに輝いているから、彼女は対象外のようなのだ。だがその紋章の輝きとは裏腹に、彼女の瞳は暗く、ケリーの姿を映してはいなかった。

何でこんな所にいるの？ お家の人心配するよ？ ああ。ぼく

の言葉はわからないか。

ケリーはそこまで言っ、彼女が握り締めている黄色い花に視線を落とした。

一輪の月見草。

摘まれたばかりで花はまだ生き生きとしていた。

ケリーは顔を綻ばせながら、

誰かにあげるんだね。カスケードみたいに。

少女の頭に手を乗せ、くしゃりと撫でてやる。その感触に反応した少女が顔を上げた。

暗い瞳がゆつくりとケリーをその視界に留めると、ぽつりと大粒の涙を零した。

ざわざわと風が騒ぎ始める。潮気を含まない、それでいて纏わりつくような生臭い風がラケナリアを覆う。

ケリーは踵を返し、少女に背を向け、駆け出した。

救いを求めるように……。真つ暗な闇の中へ手を伸ばし、見えな
い何かに縋りつこうともがきながら空へと飛び立った。

廻り出した環<4>

ケリーはこの季節に似つかわしくない生暖かい嫌な風の中を飛んでいた。

ラケナリアを逃げるようにして飛び立ったケリーは、フィデリオの屋敷に向かい一直線に飛ぶ。

自分がなにか 酷いことでもしてしまったのか。

サムの言いつけを無意識に破り、あの少女を傷つけたのだろうか。ケリーの心は混乱を極めていた。

あの少女も 花園へ行きたかったのだろうか。

サム！ ルード！ 俺だよ。ケリーだよ！

ようやく到着したフィデリオの屋敷は寒々としていて、人の気配がまったく感じられない。

月の出ていない晩をこんなにも薄ら寒いと感じたことが無いケリーは、夜ももう遅いから二人は寝てしまったのだらうと強引に思い込もうとした。

暗い廊下をケリーの靴音だけが響く。次第に急ぎ足になっていく。焦燥感がふつふつと沸き起こってくる。

以前にも似た思いを体験しているケリーは、泣きそうな顔になっていた。

音と声を奪われた晩と同じ感覚なのだ。

怖い夢を見ている時みたいに思うように走れず、その恐ろしさで目覚めるように足が纏れて上手く走れない。いつそ飛んだ方が早いのではないかと思った。

ようやく辿り着いた二人の部屋の前。

音が聞こえないだけで真実 この扉の向こうでは談笑している二人がいるのだ。

扉を開け放つ。

暖かい暖炉の前では二人が笑っている。

寒い部屋の中で二人はそれぞれのベッドで横になっていた。

驚いた表情で花狩りの衣装を身に纏うケリーを二人が見つめる。

虚ろな顔で空を見つめているサムが横たわっていた。

孫にも衣装ねとサムが笑い。

ルードは辛そうに身体を起こし、ケリーに手を差し伸べた。

私は良く似合っていると思うわとルードは微笑む。

だが現実はずう。ケリーの希望は打ち砕かれて、死の影に覆われた二人の姿を目にして居るのだ。

一体どうしたんだよ！これは……！サム！ルード！

差し出されたルードの手を取り叫ぶ。

ルードの声は弱弱しくて、依然のままだったら聞き取れなかったかもしれない。だが今のケリーは違う。カスケードのお陰でルードの言葉が分かる。

「なにも……」

ルードは懸命に笑顔を作り、なにも、と答えた。

「今夜がケリーさまの狩り初めの日と知らせがありました。本当に、衣装が良くお似合いですわ。私たちが心を込めてお作りした甲斐がありました。それも狩り初めの日にお目にかかれるなんて……幸せです」

サムはどうしたの？ どうして二人とも紋章がくすんでるの……。どうして。

ルードはケリーの問いかけに気づかず言葉が続ける。

「さあ。オルレカとしてのお勤めを全うしてください。私たちにその立派なお姿を見せてください」

どうして……。

ケリーの脳裏にかつてのルードの言葉がよぎった。

訊いて良いことなのか悪いことなのかを考えると。

これは訊いてはいけないことなのか……？。

ケリーは仕方なく、望まれるままに呪文を呟く。

月に仕えし我が主。御霊迎えの……神苑の……剣。

鞘から剣をすらりと抜いた。

抜き身のそれは自ら発する光で輝いている。ケリーが最期に見たルードの幸せそうな笑顔は、直視を避けた切っ先に映ったものだった。

ルードをどう斬ったのか。サムをどう斬ったのか。なにも憶えてはいなかった。

床に突き刺した神苑の剣の横で、ケリーは途方に暮れる。

部屋に灯る明かりもなく、窓から差し込む月明かりもない。薄暗い部屋の中で、ラケナリアの少女を思い返していた。

少女の頬を落したアレは何だったのだろうと考える。

村人はガーデンの花園へと向かったのだ。その花園で彼らは帰郷を待つ。幸せなはずなのだ。そう教わった。それなのに何故少女は。

風が吹く。

開け放たれたままになっている扉の向こうから夜風が入り込み、ケリーの身体を包み込んだ。

ぼつり。

床の上に黒い染みが一つ。

ぼつり。

染みが二つ。

ぼつり。

染みが三つ目を数えたとき。ケリーはそれを涙であると知る。

花園へと向かったルードとサムを思うと、床の黒い染みは途端に数を増やした。

少女の暗い瞳の理由も理解できた。

ケリーは床を踏み鳴らして泣き出す。身体を揺すり髪を掻きむしり、拳を床に何度も殴りつけた。それでも涙は止まらない。

それでも 二人は 村人たちは帰らない。それは紛れもない事実だ。

ケリーの狩り初めは、やはり今までのオルレカと同様に慟哭の夜に終わる……。

廻り出した環<5>

その頃。マウリーンの神殿では忘却の儀式の準備が着々と進められていた。歴代のオルレカがそうであったように、ケリーもまた己の罪を嘆くだろうことは神々の間でも予想されていた。

まして、今回は狩り初めの夜に家族とも言えるルードとサムを狩ることを告げられていたフィデリオは、オステオスにもその旨を報告していた。

出来得るならば短命は避けたいオステオスは思い切った策に出た。嫌がるマウリーンを説き伏せ、前任のオルレカに試験的に行っていた忘却の儀式を行うことを指示したのだった。

カサリと枯葉が乾いた音を立てた。

木に手を掛け倒木を跨いで茂みを進む。鬱蒼と生い茂るそれらを潜り抜けると、ひやりとした空気が頬を掠めていく。

水鳥が驚いて羽根をばたつかせ、静寂を破る。一羽が飛び立つと続いて群れ全体が一斉に飛び立つ。水鳥のはばたきは、靄をすうつと薄れさせていった。

現れたのは、湖と呼ぶには少しおこがましい様な池である。

靄の向こうに朝日が朧げに浮かんでいる。靄のお陰で朝日の眩しさが幾分和らぎ、カスケードは池の中央へ視線を走らせた。

もうすぐ二年かとカスケードが呟いた。携えた剣を外し、どっかりと朝露に湿った草原に腰を下ろした。

「俺にはたった二年だが、貴女方には永遠とも思える長さなのだろうな」

池には、戻り始めた数羽の水鳥たちが羽根を広げ寛ぎ、餌を啄ばみ始めていた。辺りは獣の声ひとつなく静けさも水鳥と同じく戻って来たようだ。

花狩りに向かうケリーの姿を昨夜、漆黒の夜の中で垣間見た。心許無いその姿が目には焼きついていて、カスケードは首を振り、正義などないのだと一人ごちた。

ふと、何故ここに來たのだろうと思ひ立つ。

ケリーに懷かれる不思議を思つた時、何故だか彼らのことが思ひ起こされたのだ。

二年前に引き裂かれた彼らのことを。

「お前の想いに応えなかつたのが善いことだつたのか悪いことだつたのか。未だに俺には答えが出せていない。お前を殺したことも俺には善悪の判断がつけないでいる。それが正直な気持ちだ」

お前は幸福だったか？

カスケードは二年前のことを思い返した。

ケリーの前任のオルレカは、カスケードが探し出した花が選出された。ツインカラーのアマリリスの彼は、感情表現が乏しく、それ故に、常に笑顔だった。

カスケードが意識してそうしたように、一定の年齢までは自身の意志を持つことは無かつた。それはまるで、過去にも未来にも興味を持たない機械のようである。

だがそれはカスケードが望むべくそうしたのだ。

完璧だった。

フィデリオにどれほど非難されようと、カスケードがその姿勢を崩すことは一度たりともなかつた。

見るべきところを間違えていたカスケードは、マリールーの心に微妙な変化が起こり始めたのを見逃していた。

時計のように正確で、それが狂う予定はどこにもなかつたそれは、一人の女神と出会うことによつて狂つていった。

屋敷から火急の呼び戻しがガーデンに掛かつたのは、マリールーがまだオルレカの任命を受ける少し前のことだった。

屋敷に戻ったカスケードの前に現れたのは、肩口から右腕全体を紫色に変色させ、血の気を失った顔のマリールーだった。

「壊死している……」

カスケードは言葉を失った。

屋敷の者たちも同様に言葉を失う。

固く口を閉ざすマリールーの心を解き解す為に人払いをし、とりあえず患部を診る為にと彼の衣服を脱がせた。そしてそれはもう一度カスケードの言葉を失う結果となる。

右の肩口を麻布で固く縛りつけているのだ。いつからしているのかと問えば、マリールーは一月くらいだと答える。どうということなのかと又問うと、マリールーは唇を噛み、カスケードの気持ちを確かめたかったのだと答えた。

カスケードには彼の行動の理屈が理解できなかった。自分の気持ちを確かめてどういふと言っただろう。そんなことの為に彼は自らの腕を腐らせたのか。腕を失ってまで確かめたいカスケードの気持ちとは何なのか。

「それで確かめられたのか」

麻布を外し、患部を消毒する。が、やはり壊死している。これはもう諦めるしかないだろう。

マリールーは痛みに少しだけ反応したが、笑顔であることに変わりはない。

「カスケードが僕を愛していないことがわかった」

「愛……？」

カスケードは耳を疑った。機械人形のように育てたはずのマリールーの口から出た言葉が愛などという、およそカスケードには不釣り合いな言葉だったからだ。

「僕を愛して僕だけを見て。そうしていたら僕の腕は腐らなかった。僕はいつもカスケードを見ていたのに。僕は　僕の最後の賭けに負けたんだ」

だからその代償を払うんだと、マリールーは言葉を続けた。

カスケードが腕を切り落としてと、変わらない笑顔のままマリールは言う。

確かにこの腕では切り落とす外ないだろう。今更病院に担ぎ込んだ所で、医者の見立ても大差あるまい。だがそれを医者ではなくカスケードにしると言うのだ。それも「カスケードのその剣で」とマリールはカスケードの剣を指した。

カスケードは柄を握り締めた。

「カスケードは愛もなにもかも捨てた翼人だから出来るでしょう。だってウルマが言っていたもの。簡単でしょう？ 愛してもいない僕の腕を切り落とすことなんて、造作もないことじゃない」

こんなセリフを吐く時でも、マリールは笑顔を崩さない。

「お前はオルレカになる運命だからだ。よけいな感情に囚われるとお前自身が苦しむことになる。そんな戯言に付き合う謂れはない」カスケードは剣を抜いた。

本来この剣はこういうことに使用する代物ではなかったが、マリールの望みをせめての酬いと叶えてやろうというのだ。

このままでいいかとカスケードがその覚悟を尋けば、マリールは真っ直ぐこちらを見据え、構わないと答える。

カスケードが振り下ろした一閃の元に、マリールの右腕は宙を舞い、カスケードの足元に転げ落ちた。痛みで崩れ折れたマリールの髪を噴き出す鮮血が真っ赤に染め上げ、夕日のように黄金色に輝いていた彼の髪がスローモーションのように床へと投げ出された。血に染まる絨毯の上に倒れ込んだマリールの瞳に、止血の処理に急ぐカスケードが映る。

剣は、カスケードの足元で鞘に収められないまま無造作に置かれていた。刃には紛う方ない己の血が滴っている。

僕の想いは戯言なのかなとマリールは消え入りそうな声で呟いた。その声はカスケードの耳にも届いていたが、彼はなにも答えなかった。カスケードに抱え上げられ、幾重にも巻かれた布を通しても尚、滲み出てくる血が彼の腕を紅く染め上げていく。

マリールーはその後、隻腕のオルレカとしてその剣の腕を振るうこととなる。

そして彼に愛を説いた女神、ウルマと恋に落ちるのだ。

ガーデンを逃げ出した二人はこの池まで辿り着いたが追っ手も追撃の手を緩めるわけもなく、この地で夜明けを待っていた二人はオステオスに捕らえられてしまった。

この地に降り立った神々の一人でもあったウルマは、愛を司り、そしてオステオスの妹神でもあった。

オステオスの激情に触れたウルマは、兄の愛故にこの池の水底深く、今尚、鎖に繋がれたまま封印されている。

そしてカスケードは自らの手で、育て上げたマリールーの命の花を月読の剣によって散らせたのだ。

あの時のマリールーの瞳の意味を、未だに理解できていない。

睨み据えた恨みがましい瞳だと思えますか、とマリールーは囁くように言った。恨まれても致し方ないことだとカスケードは思ったが、どこか胸の内がその答えを拒んだ。

マリールーは悟りを開いた瞳だとも言いますが、とも囁いた。

それも違うと思った。彼が悟りを開いたのではなく、カスケードの罪を諭しているように思えたのだ。諭した上でその罪を赦す。だが真実は闇の中だ。マリールーはそれを胸に抱いたまま瞳を閉じ、その魂は月読の中へと吸収されたのだから……。

カスケード自身が赦されたかったのではないのか。そう信じ込みたいだけなのではないのか。カスケードはわからない。マリールーは命を絶たれたのだ。月読の剣は、再生さえも絶つことができる唯一無二の剣なのだ。

マリールーは黙して死んだ。

カスケードは己の信じた正義が揺らぐのを感じたが、それは赦されぬ。マリールーはその名の下に肅清されたのだ。揺らぐことこそ間違いである。

マリールーとウルマは今も離れ離れた。

今更幸福だったのかとマリールーに問うのは酷というものだろう。やはりカスケードがそう信じただけなのかもしれない。

愛を拒んだのは誠だったのか。否、マリールーを愛していたのか。いずれにしてももう遅い。

ウルマは今もこの池の水底で鎖に繋がれたままであるし、マリールーに到っては月読の剣の、闇の中へと落ちてしまったのだから。結局よけいな感情は排斥するべきなのだという結論に落ち着く。

なにも思わなければ、なにも感じなければ、苦しむことも悲しむこともないのだ。そう　あの時に誓ったのだから。

池の靄の方から水鳥のものではない水音が起こり、カスケードは音の方へ意識を集中させる。

人の気配だった。

霞んだ朝日を背にして、風によって分けられた靄から現れたのはケリーだった。

二対の羽根の内の一対は、折れて骨が剥き出しになっていて、そこから滴る血が水面を紅く染めている。色を失った顔は酷いもので暗い瞳は焦点がまるで合っておらず、ふらふらとたゆたうように歩くその姿はさながら亡霊のようだ。

カスケードは咄嗟のことで、剣を置き去りにしたままケリーの元へと走り寄った。身体を支え岸へと上げてやる。草むらに横にしてやり、外傷が他にないか確かめた。どうやら翼以外に怪我はないようだ。

「村ひとつ殲滅するのにどうしてこんな大怪我をするんだ」

折れたままの翼を脱いだ上着で包むと、吐き捨てるように言う。意識があるのかないのか。ケリーはカスケードに縋りついたが、瞳に色は戻ってこない。

ケリーを抱え上げたカスケードは、怪我の具合よりもケリーのこの様子に重きを置いた。理屈ではなく、今、ケリーをガーデンに連れて戻るのは得策ではないと判断したのだ。

池の近くにウルマの別荘があったことを思い出し、ケリーをそこ

へ連れて行く決心をする。

ケリーの血が滲んでカスケードを紅く染めた。

廻り出した環<6>

久しく開けられたことのない門扉は、まるで侵入者を拒むかのよう
に重く、なかなか開こうとはしなかった。力任せに開け放つと、
赤茶けた錆がカスケードの掌にこびり付いた。

ケリーを抱え直し、生い茂る、名すら思い出せない雑草たちの中
をカスケードは突き進む。腕の中のケリーの息遣いがやや安定した
かのような気配を見せ、任せきりだったその身に力が籠るのを感じ
た。それでもケリーの口唇は流れ出た血の多さから紫色に変色した
まま、麗しい桜色のそれは微塵も見当たらなかった。

屋敷の扉には大きな蝶番と何重にも括られた鎖で更に侵入者を拒
んでいた。

カスケードはこの扉を諦め、裏へと回る。

裏庭にはサンルームがあり、ガラス張りのその部屋は当時の面影
をそのままにひっそりと佇んでいた。サンルームの入り口にも蝶番
が掛けてあったがさして嚴重なものではなく、錆びて綻び始めてい
たそれは、カスケードが手を掛けただけで脆く壊れてしまった。

容易に侵入できたサンルームの中へ入る。

埃よけに掛けられたと思われる白いシートを外し、人ひとり横に
なるのに足るソファへとケリーを寝かせる。ケリーはソファへと身
体が沈むと、少しだけ安堵の溜息を吐き、口唇が僅かに痙攣した。

現在は誰も住んでいないとは言え、当時のままに残されている屋
敷には、当然救急用具のひとつくらいは残されているだろうと、カ
スケードは家捜しを始めた。程なくそれは発見され、カスケードは
翼の治療を行う。

カスケードが仕える神の一人。マウリンは時と共にそれと関連
するように癒しも司っていた。カスケードは見様見真似でケリーの
翼を癒していく。それを手助けするように薬草も使った。

それらは完璧とは言えなかったが、そうだとするとケリーの翼が

らの出血を止めるには十分だった。

大量の血を失い、体温も低下しているケリーを暖める為に隣室の暖炉に火を灯した。

サンルームと言えど、どんよりと雲が空を覆い尽くしては、その働きが充分とは言えないのだ。

暖炉の火がぱちぱちと音を上げ、部屋の温度が十分に暖まったことを確認すると、カスケードはケリーをサンルームから移した。

その時にはもうケリーの口唇には僅かばかりの色が戻りつつあった。

暖炉の前に並べられた羽枕の上に、ケリーの細くてしなやかな身体が横たわる。池の水でぐっしょりと濡れていた黒髪も乾き始めていて、さらさらと床の上を流れるようにして黒髪も横たわる。

傷ついた羽根は仕舞い込むことも出来ず、無防備にその悲惨な有り様を晒したままだ。

ケリーが落ち着くとようやくカスケードも安堵の表情を見せた。漠然とした不安は変わらず胸の内を駆け巡ってはいるのだが。

ケリーをガーデンへ連れ帰らなくて良かったのか。先程の判断は最良だったのか。考えるべくもなく、咄嗟に判断してしまった自分は浅いかではなかったか。カスケードは逡巡する。

いつの間に降り出したのか、窓を雨が激しく叩いている。

窓の外を見ていた視線をケリーへと移動させ、ぎくりとする。

ケリーがじっと見ているのだ。

虚ろだった彼の瞳にカスケードの姿がくつきりと映り込んでいた。大きな瞳を見開き、カスケードを凝視している。驚いているとも言えた。

「翼が折れていたぞ」

ケリーにカスケードの言葉は通じているはずだったが、ケリーの表情は凍ったまま動かない。見開かれたままの双眸が、瞬きを忘れ凝視し続ける。

ケリーの傍らに寄り添っているカスケードの月読の剣が甲高い音

を出した。かたかたと鐔が鳴る。

カスケードは月読を取り、その鐔鳴りの激しさに珍しく取り乱した。

普段の彼からはけして想像がつかないほどの狼狽振りである。

共鳴しているのか、とカスケードが呟く。

「いや。違う。これは……これは」

カスケードの顔から血の気が引いていく。彼は口唇を一度強く噛み締めた後、独白のように呟いた。

「斬れと言っている」

ケリーへ視線を走らせる。彼は凝視したままだった。

月読の剣がケリーを斬れと鐔を鳴らせているのだ。

カスケードは訳が分からない。翼が一对折れた程度で、処分しなければならぬとは到底思えなかった。

雨足が一層強くなり、明かりが暖炉だけのこの部屋は薄暗く、自分を見つめるケリーの深緑と山吹の瞳が嫌に目立つ気がする。

カスケードは左手で剣を押さえた。右手が震えながら月読の柄へと伸びていく。

「ケリー。オルレカの運命から逃れたいか？」

そう問うカスケードのこめかみを、一筋の汗が伝い落ちる。

ケリーは変わらずじっと見ている。

「ケリー。自由になりたいか？」

そう問うカスケードの声が僅かに震えている。

ケリーはやはり凝視したままだ。

「ケリー。言わねば伝わるまいよ」

堪えきれず、一旦は柄へと伸ばした手をケリーの頬へと宛がった。大きく見開かれたケリーの瞳から、ぽつりと涙が零れる。

カスケードは苦痛に顔を歪ませる。唇を食むように強く噛み締め、絞り出すような低い声で、

「お前まで俺に託すのか。お前の真意など俺がわかるはずもないだろうに。言わねば伝わらん。俺にはわからん！ 何故！ そうまで

して俺になにをさせたい。お前まで黙して死ぬのか。そうして俺に
悔恨を刻み込むのか！ 何故この場所なんだ。ウルマの池。ウルマ
の屋敷。マリーがいる月読。ケリーとその身の中の神苑。いや。正
義を語るな。疑うな。俺が今成すべきことは ケリーを斬ること
だ」

ケリーの頬から素早く手を離し、それは流れるように月読の柄へ
と向かう。

ケリーの口唇がわななきなにかを紡いだ。

廻り出した環<7>

4人の神々は重く口を噤んだまま、オルレカ失踪の対応策を考えていた。集まっているのはオステオスの神殿であり、謁見の間である。

ラケナリア殲滅は成功していた。だがその後のオルレカの行方が杳として掴めないのだ。

最後に赴き、そして最後の花狩りを行ったのはフィデリオの屋敷であることまではわかっていた。狩られた花がサムとルードであり、その衝撃にオルレカが行方を晦ましたのであるうことは否めなかった。

「屋敷には血痕が残っていたのでしょうか？　ならばケリーは怪我を負っているということ。早く探し出して手当てをしてあげなければならぬでしょう」

パンディオンは深い溜息を吐きながら呟くように言った。

「私もそれには賛成です。怪我の大小に関わらず、一刻も早く探し出してあげなければ。彼の心の傷は血が流れ出ない分、最も深い痛みだと思えますから」

鈴の音のように澄んだ声で、マウリーンは悲しげに言う。

仮に、と重々しく口を開いたのはこの神殿の主であるオステオスだ。

「仮にケリーを探し出したとして、だ。彼はオルレカとして果たして使えるのだろうか？」

オステオスは伏目がちのままで続ける。

「我らが慮るべきはオルレカの処遇でもなければ生存の有無でもない。このガーデンに暮らす人々が、恙無く暮らせる平和ではないのか？　私としてもオルレカを秤にかけるような真似はしたくない。しかし熟慮してみればわかることだ。彼女を失っている今、このガーデンはひとつの環のように廻り繰り返す。だがそれが我らに齎し

たのは何だったか。平穏な日々ではなかったか。淘汰されることなく、繰り返し訪れる安穏とした平和。ウルマを失ったことは確かにはガーデンにとつてかなりの痛手ではあったが、意外にもそれは我らの求めていたものを齎してくれたではないか。輪廻する生命。不死とは何ぞや。永遠に繰り返し巡るひとつの環。違うか？」

オステオスらしからぬ早い口調で、そう問うて言葉は終わった。誰もが互いの顔を見合い、だけがけてオステオスに反論をしない。正論だからだ。

窓の外の天気は芳しくなく、遠くの空で雷鳴が轟いている。重く垂れ込めた雲は、まるでガーデンを覆い尽くしている陰鬱な様を映しこんでいるようだった。

押し黙ったままだったムスカリが、重く口を開いた。

「では 探索の必要はないと？」

「そうは言っていない。探索はさせるつもりだ。無事であるならばオルレカの職務を続けさせるだけだ。だが そうでなかった場合も含めて、策は講じなければならぬだろう」

「そうでなかった場合とは……つまり」

オステオスはムスカリに一瞥をくれると、

「死んでいるか使えないか、だ」

マウリーンの薄紅色の口唇から小さな溜息が漏れた。

「ケリーの探索はパンディオンに任せる。フィデリオの花である限り、その責任の一端は君にもあると思いたまえ」

オステオスは両肘を付き、パンディオンを睨めつけるように見つめて言った。

パンディオンとマウリーンは場所をパンディオンの神殿へと移し、先程の会議での話を繰り返した。

マウリーンの顔色は優れず、心なしか身体が震え、怯えているように見えた。

「わたくしが知っているケリーは、表情がくるくると良く変わる、

明るい心根の優しい子でした。あのような酷い仕打ちにあっても笑顔をやさない子でした。フィデリオが愛情を込めて ああ。こういった言葉をオステオスは嫌っていましたね。とにかく。そのフィデリオのことも心配でなりません」

マウリーンの口唇は話している間であつても絶えず震えていた。

パンディオンは憂鬱そうに眉根を寄せ、

「フィデリオは同時に家族を二人も失っていますから……。今はずつとこの神殿の自室に籠っています。時折STEMが様子を窺いに入りをしてはいるようですが……。探索を一任されても……。果たしてそれをフィデリオが受け入れてくれるでしょうか」

ふう とマウリーンは大きな溜息を吐き、それでも告げるつもりなのでしようと言った。

パンディオンは苦笑いを浮かべながら、ええそうですと答えた。

「もうすぐこの部屋へ訪ねて来る頃です」

パンディオンが言うと、頃合を見計らつたように扉が叩かれた。扉の向こうから聞こえてくるのは件のフィデリオの、入室を請う声だった。パンディオンは「どうぞ、お入りなさい」と扉に答えた。扉は大儀そうな音を立てゆっくりと開いた。

ゆらりと中に入って来たフィデリオは、ここ一日二日で見る影もないほどに目を落ち窪ませていた。部屋の中にマウリーンの姿を認めると、小さく会釈をして、すすす、とパンディオンの前に進んだ。パンディオンは覚悟を決めたように椅子から立ち上がると、小さく息を吸い込み、

「先程、オステオスから指示がありました。ケリーの探索をあなたに任せるということです」

思いがけずフィデリオの瞳に生気が宿った。

「それはまだケリーにオルレカとしての可能性が残されているということですね。望みはあるということですね？」

フィデリオの反応に驚いたパンディオンはマウリーンと顔を見合わせた。マウリーンもまた驚いた顔をしている。

私はてつきり　とフィデリオは言葉を続けた。

「てつきりケリーの探索はカスケードに任せ、そのまま処分するものだと思っていましたから。私に探索を任すということはケリーの命も救われるということでしょう。　ああ。良かった。これ以上家族を失うのはもう耐えられない……」

フィデリオは部屋に入って来た時とはまるで別人のように、生き生きとした表情でパンディオンとマウリオンを交互に見返した。

「一度屋敷に戻って来たいと思うのですが　よろしいですか？」

「ええ。それは構いません。フィデリオさえ良ければ探索に専念して貰って構いませんよ。私の方の仕事は、ケリーが見つかるまでは当分急ぐようなものではありませんからね」

パンディオンは胸を撫で下ろしたい気分だった。

それはマウリオンも同じ思いだったようで、彼女の震えていた口唇には色が戻り、いつもの薄紅色が濡れたように輝いていた。

フィデリオはパンディオンの返事を聞くなり、急くように部屋を飛び出して行った。

パンディオンの神殿の前で、残すシステムに色々な指示をフィデリオがしていると、システムが視線をフィデリオの背後に走らせ、会釈をするのに気付いたフィデリオもまた、視線を自分の背後へと向けた。

「カスケード」

鼓動が大きくぎくりと一つ打ち、それはフィデリオにとって嫌な感覚を思い浮かばせた。

「そつえば。最近ガーデンで見かけなかったが一体どこに行っていたんだ？」

「俺の領地の視察にフィデリオの許可がいるとは知らなかったな。それより　何をそんなに急いているんだ？」

領地の視察？　フィデリオが訝しげに問う。

「ああ、そつだ。疑うのならムスカリさまでもマウリオンさまにで

も訊けばよからう。出かける前に一応の挨拶は済ませておいたからな」

「いつからガーデンを空けているんだ？」

「これは可笑しなことを聞く。それが一体どうしたというんだ。俺にはさっぱり訳がわからない」

カスケードは嫌味な笑みを口元に浮かべ、

「フィデリオくんの大切な大切なケリー殿の狩り初めの日からだよ。これでいいかい？ フィデリオ」

「一度も戻って来ていないんだな？」

「くだいな。そんな暇があるものか。俺が視察に行っていたのはフオレ山脈のピレア村だ。そう何度も一晩かけて空を飛ばうとは思わない」

カスケードは厳しくフィデリオを睨み据えた。

「そこまで言うのなら信じよう」

フィデリオは鞆を抱え、ステムに後を頼むと告げた。ステムは畏まりましたと答え、深々と頭を下げた。

「それでこの騒ぎは一体何なんだ？ 随分とガーデンが騒がしいようだか」

カスケードは聞こえよがしにステムに声を掛けた。ステムは主の背中に視線を送りながら、

「ケリーさまが行方不明になりましたもので。フィデリオさまはオステオスさまの命によって、只今よりケリーさまの探索にお出かけになるところです」

そうか、とカスケードは人差し指を額に宛て、では あの犬はと続けた。

「あの犬の世話は一体誰がやるんだ？ 夜な夜な主人を恋しがって鳴かれても困るのだが」

ステムの顔に一層困惑の色が増していく。主の背中に答えを待った。主はくるりと向きを変え、

「あれはケリーの物だ。ケリーが戻るまでは誰にも触れさせはしな

いよ。特にカスケード。君にはね」

「俺が訊いているのは誰が世話をするのかってことだ。何故俺がそんなものに立候補せねばならん。もし世話をする者がいないのであれば、ちょうどピレアで子犬を亡くして寂しがつている子供がいたから、そこに貰えないだろうかと尋ねたかったんだよ。それで？ 犬の世話をする者はいいるのか」

フィデリオはすごい勢いでカスケードの胸倉を掴むと、

「ケリーの物は、例え絹糸ひとつたりとも渡さない。こればかりはけっして譲りはしない。絶対にな」

フィデリオの ケリーへの思いがひとと伝わる。そんな強い瞳だった。しかしその瞳にカスケードは負けてしまう。

視線をフィデリオから外し、胸元の手を退かした。

「それならせいぜい夜鳴きさせないよう気を配ることだな」

踵を返し、カスケードはマウリーンの神殿へと入って行った。

フィデリオは相変わらず疑わしげな視線をカスケードに向け、

「お前になにがわかる」

と吐き捨てた。

さんざめく者共<1>

芳しくなくも辛うじて保っていた空模様も、夜半過ぎには崩れ、大きな雨粒を落とし始めた。灯りを好まないカスケードは最小限の蠟燭で時間を過ごしていた。ゆらゆらと揺らめく炎の陰を読みふける蔵書の頁に映しながら、時折窓へと視線を走らせる。

窓の向こうは漆黒の闇である。

晴れていれば夜空に三日月が浮かんでいることだろう。

漆黒の闇が、花狩りに行くケリーを連想させた。窓硝子にはフラッシュバックのように湖でのケリーやウルマの屋敷でのケリーの姿が浮かび上がる。

本を閉じた。

疲れたように目頭を押さえ、ソファに深く腰掛けると、雨音に混じって扉を叩く音が聞こえてくる。

カスケードは耳を欹てた。確かに誰かが扉を叩き、カスケードを呼びつけていた。

ゆっくりとした所作で扉まで行き、少しだけ開けてみる。扉の隙間から漏れ出した明かりで浮かび上がったのは、ケリーの探索に行っている筈のフィデリオだった。彼の傍にSTEMは控えておらず、どこにも寄らないまま真っ直ぐここへ赴いて来たようだ。息は荒々しく乱れていて、吐く息の白さは止め処なくフィデリオの口元を覆っていて、ゆっくりとカスケードを見上げるフィデリオの瞳がざらりと光った。

まるで獣のそのような双眸だ。

外套もなにもすべてが濡れそぼり、額から真っ直ぐ流れ落ちてくる水滴はそのままフィデリオの鼻筋を辿ると、一気に顎先へと滑り落ちた。

「話がある」

低く物々しい声音でフィデリオが言う。

カスケードは無言で扉を開け、フィデリオを中へと迎え入れた。

「正面から入っては来れない用向きか？」

フィデリオが叩いた扉は、カスケードが特別に誂えさせた、この部屋から直接外へ出られる扉だった。

翼人の部屋は比較的奥まった場所に誂えてある為に、正面玄関を回ると意外に時間が掛かるのだ。カスケードはそれを面倒がつて直接出入り出来る扉を作らせていた。

「それで？ 話というのは一体何だ」

フィデリオは身じろぎ一つしないまま、ケリーのことだと答えた。
「ああ。それなら聞いたよ。行方を晦ましたのは狩り初めの日だったそうじゃないか。なに。オルレカが心に痛手を受けるのは今に始まったことじゃない。落ち着けば戻って来るだろう。気に病むほどのことではないはずだ」

カスケードは先程まで腰掛けていたソファへと歩み寄り、閉じた本を手には今度は本棚へと移動した。

フィデリオは、室内を移動するカスケードを視線だけで追いながら、内なる激しさを押さえ込むように、苦しげに言葉を続ける。

「ケリーは怪我をしているんだ。屋敷に血痕が残っていた。急いで見つけてやらなければ命に関わるかもしれない」

「それならこんな所で油を売っていないで、とつと探しに行けばいい」

フィデリオは「俺は！」と一瞬声を荒げ、落ち着かせるために少しの間を取った後、

「俺はお前がどうしてそんなに落ち着き払っているのかが解せないんだよ。ガーデンに知らせが来る前に、すでにケリーの失踪を知っていたかのような……。つまり、お前はケリーの居所を知っているんじゃないかってね」

カスケードは手にした本を凝視したまま、フィデリオの言葉に耳を傾けている。

フィデリオは固く目を瞑り「ケリーがどうなったかもな」と呟い

た。

カスケードはようやく蔵書を本棚に差し戻し、ふうと軽く溜息を吐く。

「ケリーはお前の花で オルレカだ。俺が関わることはまずない。それを承知で訊いているのか？」

振り返り、斬り捨てるように言うとき、フィデリオを見据えた。

先ほどから一歩も動いていないフィデリオの足元には水が溜まり、黒い大きな染みを黒光りするほど磨かれた床の上に作っていた。

「お前が関わるものがひとつだけあるじゃないか。お前にしか出来ないことだ。 オルレカを処分する時だ」

カスケードは一瞬表情を曇らせた。だがそれはほんの小さな一瞬の出来事で、頭に血が上っているフィデリオは気付なかった。

「マリールーの時もそうだった。お前は何の躊躇いもなく、自分が育ててきた花を一瞬で手折ったんだ。彼のあの悲しげな瞳を、俺は今でも忘れることが出来ない。お前を信じて真摯に見つめるマリールーに、お前は躊躇いも見せず、あの剣を振った。 わからない。わからないよ、俺には……。お前には慈しむ心はないのか？ 正義はないのか！ マリールーのあの瞳の意味をお前はわかってやれているのか！」

フィデリオは思わず感情のままに叫んでいた。

カスケードは冷めた目でその様子を眺めているだけである。それがまたフィデリオの癪に障ったようで、お前には情がないと吐き捨てるように言った。

カスケードは何も答えないでいる。

「処分が下される寸前まで、STEMは必死になって撤回を陳情していた。そのSTEMの思いも一緒にお前は斬り捨てたんだよ。お前もオステオスさまも」

「そこまでにしておくんだな」

カスケードはフィデリオの言葉を強引に遮った。

「そこまでにしておいた方がいい。幾ら気が動転しているとはいえ、

言葉は慎め。ここはガーデンだ。それに　お前が幾ら俺に愛や正義を説いても無駄だ。俺には効かん」

「ケリーを殺していないと言い張るのなら、それならどこかに隠しているんだろう」

「根拠は？」

フィデリオはぎらついた目でカスケードを睨み上げ、突然家捜しを始めた。それは誰かを探しているというよりも、思いに任せて暴れていると言った方が相応しい所業に見えた。

カスケードはそれを止めるでもなく、したいようにさせていた。ソファというソファはその大きさに関係なく引っくり返され、整然と並べられていた数々の蔵書は引き剥がされるように本棚から取り出され、床へと放り投げられていく。

フィデリオが腕を振り上げるたびに、衣服に染み込んだ水滴が部屋中に撒き散らかされた。

フィデリオは一通り暴れ終わると途端に落ち着きを取り戻したが、それでも口から付いて出るのはカスケードを罵る言葉ばかりだった。「お前はオルレカにそんなものは必要ないといつも言うが、オルレカの職務は過酷なんだ。俺たちの物とは比較にならないくらいにな。だからこそ、俺はオルレカに　ケリーに帰れる場所を作つてやりたかつたんだ。　お前は一人じゃない。お前の苦しみを俺も分かち合つんだと教えてやりたかつたんだよ。だがカスケード……。お前はどうか？　オルレカは言われた通りのことさえしていればいいだけの人形だと言っているよな。そうして創り上げたマリールーはどうなった！　結局は愛を知つて……。お前に殺されたんだ。　俺は許さない。ケリーにもその剣を向けるというのなら。俺は」

「いい加減にしろ、フィデリオ。ケリーの行方がわからずにいて動揺しているのは理解つた。だがさつきも言つただろう。ここはガーデンだ。言葉を慎め。お前の言う愛も正義も俺にはわからん。

それだけだ。俺に命令出来るのは　……。　ともかく。今夜のことは聞かなかつたことにしておいてやるから、早くケリーを探し

に屋敷へ戻るがいい」

フィデリオは憤懣やるかたない様子で部屋を後にした。

今夜のフィデリオは尋常ではない。カスケードは場合によっては真実を話そうと思っていたが、あの様子ではなにを話したところで聞く耳は持つまない。

「人形　か。花で作られたものならば美しくもあろう。だが俺は」

カスケードはそこで言葉を切り、足元に散らばっている蔵書を拾い上げ、本棚へと戻した。

雨足は一層強くなり、闇もまたその深さを増していった。

フィデリオがケリーの探索に出かけてから、すでに一週間を過ぎようとしていた。

あの雨の夜　。フィデリオが去った後、共も連れずにマウリーンが部屋を訪ねてきた。フィデリオが一暴れした後のその部屋を見たマウリーンは、言葉を詰まらせていたが、大切な話だからとカスケードに懇願し、中へ入った。そこでカスケードは、彼女の口からケリーの狩り初めの晩、忘却の儀式が準備されていたことを知った。「その儀式はマリールーの時に失敗しているはずだ。何故今更そのような儀式を行う必要があるんだ」

カスケードは呆れた。だが結局はケリーの失踪でその儀式は行われないまま済んでしまった。

「ケリーがもし見つければ、そしてオルレカとしてまた花狩りを始めてしまえばこの儀式は行われてしまいます。オステオスは本気なのです」

マウリーンは祈りを捧げるように両手を組み、俯いたまま黙り込んでしまった。

さんざめく者共<2>

青紫の小さな花をたくさん付けた香草が、山裾から吹き上げてくる秋風にそよそよと揺れていた。

畑の端の方から順に刈り取られていく香草。高地を上手く利用した段々畑だ。時折聞こえてくる談笑が山深い村ののどかさを際立たせていた。

高台から伸びている細い坂道を降りてくる、幼い少女を見つけた女性が、畑の中から大声で彼女を呼び止めた。

「アントニエッタ！ 買い物かい？」

アントニエッタと呼ばれた少女は懐こい笑顔をその婦人に向けると「はい！ 今からお夕飯の買い物です」と肩に掛けている麻の布袋を指差して、こちらにも負けじと大声で返した。

「ご苦労だねえ。 ああ、そうだ。野菜は買わなくてもいいよ。後からうちの坊主にでも持って行かすからさ」

恰幅のいいその女性はからからと笑いながら、足元で畑仕事を手伝う我が子の頭をもみくちやにした。少年は、視線をちらりとアントニエッタに向けた後、ちえっ、と舌打ちする。

「それじゃあ。おばさん。行って来ます」

アントニエッタは手を軽く振り、坂道を下って行った。

延々と続く段々畑を過ぎると、この長い坂道ともお別れになり、平らな道をまた数十分歩くと村の中心地とも云える拓けた場所に出る。

フォレ山脈の高地にあるピレア村は、薬草と香草を栽培し、大半の村人はそれを生計としていた。

その中でも薬草が主な農産物であった。先程の畑の香草は煎じて飲む薬草とは異なり、ガーデンでの儀式時に使用する香の原料となるものだ。栽培しているのは先程の畑だけで、後はすべて薬草を作っている。

もちろん野菜類の農作物も作っているが、これらは出荷する為の物ではなく、村民の糧として栽培していた。

すべてが互いの為に、平等に、飢えることなく日々過ごす為の知恵だった。

農作物以外の物は外から供給してもらわなければならなかった。肉に衣服に石鹼など、生活に必要な品すべてが対象で、それらは村の中心地にある、一軒しかない雑貨屋が一手に扱い、村人たちはその店で手に入れる。

アントニエツタは肉と洗濯用の石鹼を買いに降りてきていた。

彼女が住む家は段々畑の更に上。外壁を蔓性植物で覆われた煉瓦造りの家だった。こじんまりとした平屋だが敷地は結構広く、門から玄関までの間には花畑が広がっていた。今はチヨコレート色とキヤメル色の二色のパンダビオラが小さな花を精一杯咲かせている。それらの世話は当然アントニエツタがしていた。十歳とは思えないほどのしっかり者で、土いじりを苦とも思わずに花を愛で、育てていた。

ふう、と大きな溜息を漏らしながら、アントニエツタは肩に担いでいた麻袋を足元に置いた。

一塊の肉の燻製が頭を出す。腰に巻きつけていた別の袋からは洗濯石鹼がごろごろと出てくると、それらを戸棚に仕舞い込んだ。

勝手口には籐の籠いっぱいに入った馬鈴薯や人参やらが置かれている。

「おばさん、いつもありがとう」

アントニエツタは籠に向けて手を合わせた。

袖を捲り上げ、夕餉の支度へと取り掛かる。幼くてもこの家の一切合財を賄っているのだ。慣れた手つきで手際よく支度が進む。

すでに下拵えを終えていた具材を鍋に入れて煮込み、別の具材は炒めたりと、その様は熟練の賄い婦のようだ。

出来上がった料理を二人分の皿に移し変え、トレーに乗せてデー

ブルへと運ぶ。この家には食事部屋があるわけではなく、ロフトに上がる階段の下にテーブルが置いてあり、そこで食事をするのだ。夕餉が整うと、アントニエッタはロフトで休んでいる同居人を呼びに行く。

壁に括りつけの階段を上がると、書棚に囲まれた中にキングサイズのベッドがあり、同居人はいつもそこで休んでいた。

幾つものクッションを背もたれにして、彼はぼんやりと夕暮れの空を眺めていた。明り取りの窓はすでにその役目を終えて、闇に変わる前の群青色の空を映していた。

彼は日がな一日こうやって空を眺めているのが落ち着くのか。いつ見ても空を見上げていた。

「ケリー？ ご飯ができたよ。階下を下りて食べよう」

アントニエッタはケリーの手にそつと触れた。

ケリーはゆっくりとアントニエッタに顔を向けると、こくりと頷く。

白い寝巻き姿のままのケリーは、アントニエッタに手を引かれて階段を下りた。

胃に流し込むだけの食事。フィデリオの屋敷での夕餉とは比べ物にならない暗く沈んだ空気。

何度考えても出て来ない答え。

あのまま冷たい池の中で放っておいてくれた方が、どれほど気が安らいだか知れない。

どうしてカスケードがあそこに居たのか。

どうしてカスケードが救ってくれたのか。

出せない答えを思い、巡らす。

目の前の少女はラケナリアで出会った少女である。

彼女がその瞳から流した涙の理由が分からずに、赴いた懐かしい屋敷での惨劇。それはラケナリアでケリーが行った事実とも重なった。

少女はそのことに気付いていないのか。ケリーの世話を甲斐甲斐

しくやってくれている。自分の生まれ育った村を殲滅したオルレカを、目の前の弱い少年と知らずに面倒を見ているのだ。

カスケードに尋ねたくとも、彼はケリーをこの村に連れて来た日以降、一度も訪れてはいない。

カスケードに会いたい。カスケードに会いたい。今すぐにも飛んで行って、この数々の疑問をぶつけてみたかった。明日になったら来てくれるかもしれない。明日になったら……。

ケリーは、カスケード会いたさに、出された食事を飲み込んでいるに過ぎなかった。

いつそ罵ってくれたら。ケリーが視線を向けると、目の前の少女はにっこりと微笑み返してきた。

少女の心の内が計れない。

カスケード。カスケード。カスケード。

目を瞑り、黙々とスプーンを口に運び、ケリーは食事を味わうこともなく胃に流し込む。

アントニエツタはいつも早起きだった。それはもちろんやるべきことがたくさんあるからだ。が、なにより、前庭一面に咲くパンダビオラの世話はとくに熱心だった。

ラケナリアで出会った時も、その小さな手に握られていたのは月見草だった。

珍しくケリーはロフトから下りて来て、床から天井まである大きな窓の傍でアントニエツタを見つめていた。彼女はその小さな身体を屈めて、花ガラを摘み取っていた。

高地のピレアの朝はかなり冷え込み、彼女の吐く息は白い。いつたい何時に起きてくるのか。部屋の暖炉はケリーが目覚めた時にはすでに点いていて、ぱちぱちと木が鳴っていた。

カーテンを握り締め、アントニエツタを飽きもせず見つめていると、その視線に気付いたのか、彼女がくると振り返った。窓辺にケリーの姿を認めると、赤くなった鼻の頭を擦りながら笑った。作

業用の手袋に付いた花壇の土と彼女の笑顔は、今のケリーには真摯で眩しい。

ケリーは目を伏せた。

アントニエッタが笑う度にケリーは苛まれる。彼女が安らぎを与えようとすればするほどに、心は激しく動揺し、胸を掻き毟りたくなる。

アントニエッタをラケナリアから連れて来てくれとカスケードに懇願したのは、言うまでもなく、ケリー自身だった。

何故そう願ったのか。熱に浮かされていたケリーが口走ったことをカスケードが行動に移したに過ぎないが、それをそもそも口走る思いの根源がわからなかった。彼女を見れば、常にラケナリアの惨劇とフィデリオの屋敷での出来事が連動して思い起こされるのだ。

何故、敢えて自分を追い詰めるような真似をしたのか。

ケリーは苦悶の表情を浮かべ、嘔吐をつく。

それを考えようとすると身体が拒否反応を示すのだ。

ばたばたと足音を立てながら部屋の中を走り抜け、洗面台へと向かう。吐く物がないケリーの口からは黄色い吐しゃ物が溢れ出す。ぐるぐると目の前が回り、吸い込まれるように意識が遠のくと、切れた糸のように意識はぷつりと消えた。

人の話し声が微かに聞こえ始めると、それらは次第に大きくなり、ケリーの意識はそこでようやく目覚めた。口の中は自分の吐いた物で、酸味を帯びた味と嫌な臭いが充満していて強い不快感を感じる。ケリーが寝かされていたのは、一階のあの大きな窓のすぐ傍らにあるソファだった。いつもは静かな家の中がざわついていて、意識が戻ったばかりのケリーには状況が上手く把握できなかった。

「おや。気がついたかい。あんた、ちゃんとご飯は食べてんのかい？ 青つちろい顔して。そんだからブツ倒れちまうんだよ」

ソファの背もたれからひよっこり顔を出した女性は、ケリーの顔を覗きこみ、からからと笑った。

ケリーはただただ目を丸くするだけだった。

すると彼女の声に気付いた別の村人たちがこぞってケリーの傍らにやって来る。わらわらと、よくもまあこんなに入れたものだと思うほどの人数だ。交互に顔を覗かれ、ケリーは困惑した顔を見せた。その数の多さにラケナリアの人々の、山と詰まれた黒い塊を思い出した。

彼らもあなる以前はこうやって、笑い、話し、助け合いをして生きていたんだろう。サムもルードもそうだった。

ガーデンになど行かずにあのまま笑っていて欲しかった。

目の前の彼らのように笑って……。

だが、ケリーはオルレカの務めを果たした。そしていつかまたその時が来たらこの人たちも斬らねばならないのか。

ケリーの身体が拒絶反応を起こす。嗚咽が止まらない。そしてそれは嘔吐へと変わり、黄色い吐しゃ物を吐き出していく。両手で覆っても指の間から溢れ出す吐しゃ物は、容赦なく磨かれた床の上までをも汚す。

いやだ。こんな思いはもういやだ。

幾ら吐いても少しも楽にならない。ケリーは呻き声を上げながら喚き散らす。

ぼくの傍に来ないでくれ！ あっちに行ってくれよ！

ぼくに構わないで……。

「ああ。辛いねえ。苦しいねえ。でもあたしらが居るから大丈夫だよ？ 安心おし。病気の時は心細くなるってもんだ。まったくねえ。カスケードさまも人が悪いっただけやしなないよ」

最初に声を掛けた恰幅のいい女性は、宥めるようにケリーを抱き締めた。ケリーの顔を自分の胸に埋めるようにして抱き寄せ、頭を撫でていく。

サム……。ルード……。

ケリーの頭の中でサムとルードが交互に話しかける。大丈夫よ、私たちがついていくからと。

ケリーは堰を切ったように泣き出した。自分を抱き締めてくれる人に縋りつき、なりふり構わずに泣いた。

その場に居合わせた村人たちは、優しく、ケリーの頭を撫でていく。

ケリーはまるで幼子のように彼女にしがみつき、泣き疲れ、そのまま眠りに就いた。

さんざめく者共く3>

ケリーは元々人懐こい性格だった。愛情たっぷりに育てられていたからか、今ではすっかりピレアの村人たちとも心を通わすようになった。

ケリーが、言葉も耳も不自由であることが病気だと思った村人たちは、いつそう気に掛けてくれるようになった。

「アントニエツタは偉いねえ。小さいのに一人であの子の世話をしていたんだろっ？」

「それよりも人が悪いのはカスケードさまだ。一言私たちに言ってくればお世話のひとつやふたつ。喜んでするのにさあ」

「いやいや、そそっかしいお前さんには頼みやしないだろうさ」

「なんだい、そりゃあ」

「カスケードさまがこっそりお連れしたお人だよ？ 大層大事な方なんじゃないのかねえ。そのお人に怪我でもあっちゃあ一大事さ」

「それもそうだが」と、会話が途切れ、皆の視線は刈り取りの始まった畑の中へと向けられた。

視線の先には笑顔で鎌を振るケリーの姿があった。遊び遊びの手伝いである。ケリーの周りには子供たちが群がり、はしゃいだ声を上げて駆け回っている。

「お止し！ 遊び半分の手伝いは危ないだけだよ。手伝う気がないんなら広場にでも行って遊んどいでな！」

そこへコリーンの一喝が入る。恰幅のいい彼女の一喝は子どもたちにはよく効くようで、すぐに怒られてしゅんとなる。ケリーは突然おとなしくなる子供たちの様子から、怒られていることを察した。そして次にどんな行動をコリーンが取るかを瞬時に計り、足を踏ん張った。

案の定、鎌を取り上げられそうになるケリーは足で土を掴むように踏みしめ、コリーンに抵抗する。

手伝う！ 手伝うんだ！

「だったらきちんとおやり。ふざけて怪我でもして、カスケードさまに何てお伝えしたらいいんだい」

ケリーは恨めしそうにコリーンを見上げた。だが。

コリーン。大好き！

ふざけながらコリーンの胸に飛びつく。

「およしったら！」

コリーンは怒鳴り声を上げたが、けして怒りが込められているようなものじゃなく、抱きつくケリーを窘めながら我が子にするそれのように抱き締めた。

ケリーは、抱き締められると胸の辺りが妙にむず痒くなり、そして温かいもので満たされていくことに気付いていた。それは本当に嫌なものじゃなく、その証拠にケリーはやたらと人に抱き付くようになった。

時折、ケリーの心を掻き乱す、あの花狩りに出かけた晩のような真っ暗な夜の翌日など、それは顕著に現れた。

温もりを求めて、確かななにかを求めて。

ピレアの村でケリーは、懐かしい家族の温もりをもう一度味わっていた。

オルレカの失踪から半年が経過した。

神苑の剣を失ったままのガーデンでは、次の花狩りに向けての会議が再三再四に渡り、行われていた。

フィデリオは、ケリーの探索から未だに戻っておらず、ガーデンではその様子すら把握出来ていないのが現状だった。

花残り月に入ると、オステオスが緊急会議と称し皆を集めた。その中にはカスケードの姿もある。

「今日、皆に集まって貰ったのは言うまでもなく、オルレカの件だ。今年の花狩りまで後半年という危機的状況となった今、このまま悠長にフィデリオの報告を待っていても、それが徒労に終わらない保

障はどこにもない。皆はそれについてどう思っているのだろうか」

オステオスは困り果てたように溜息を吐いた。

しかし誰もが口を固く閉ざしたまま、なにも語ろうとはしない。

重い空気が部屋の中を覆い尽くす。

オステオスが幾度目かの溜息を漏らすと、カスケードが突然口を開いた。

「私の意見でよろしければ発言させて頂いても構いませんか？」

皆の視線が一斉にカスケードに注がれた。

彼は目を伏せたまま言葉を続けたが、その声音は臣下のそれとは大きく異なり、仰々しい遠慮深げな科白の割には、不躰な言い回しだった。

「あなた方はどうやらお忘れのようですが、私の持つもう一つの剣も魂を狩ることが可能です。神苑は再生への道標ですが、月読は終焉への導き。二度と再生されることは叶いませんが、その覚悟があるのならば私を　月読を使うといいでしょう」

彼の提案は、人々の魂を月読で狩るというものだった。月読で狩るということはすなわち、その魂にとってすべての終わりであり、神苑の時のように花園で再生を待つわけではないのだ。

環のように、すべての人々が永遠に命を紡ぐ世界を理想としたオステオスたちの意に、明らかにそれは反していた。

しかし、彼らにはそれを拒むだけの確固たる信念が、今、ある出来事によって揺らぎ始めていたのだ。

「なにもガーデンの人々を狩ると言っているわけではありません。あなた方の理想の国を壊す意志は私にはありません。血を流さない国を作ると言ったあなた方の意志に……私は従っただけなのですから。　ですが……。時には血を流す時がやってくるのです。それが今であるという　ただそれだけのことです。機会を逸すると必ず後悔します。私は　紋章を持たない人々だけを狩ると言っているのです。紋章のない人々が存在するという事実が白日の下に晒された時に、あなた方は即決するべきでした。在ってはならない存在

……。波紋は小さいうちに止めておくべきでしょうね。ですからこれが 最後の機会となりましょう」

カスケードは「あなたたちには選択権は無いのだ」と、その仰々しい科白で神々に告げているのだ。

神々は互いの顔を交互に見やり、そして重い口を開くようにオステオスが答えた。

「承知した。まずは紋章の無い者を月読で狩って貰おう。花狩りについてはフィデリオの報告を待つてから、もう一度会議を開くことにする」

カスケードは顔色ひとつ変えず、オステオスの言葉を聞いていたが、花狩りについての件で席を立ち、結局最後まで聞くことなく部屋を出て行った。

そうして花狩りの季節ではない雨五月に、カスケードによる狩りが開始されたのだ。

さんざめく者共<4>

春とはいうものの、ピレアの夜は透き通るほどに空気が澄み、肌に冷たかった。

空には満天の星と三日月が浮かんでいる。

ケリーは、時折訪れる眠れない夜を、こうして庭に出て、ぼんやりと夜空を眺めながら過ごしていた。

夜の闇を縫うように、どこからか琴の音が聞こえてくる。静かなフィレの山に響き渡る琴の音はケリーを優しく包み込んだ。ケリーが瞼を閉じると、聞こえないでもない琴の音に身を委ねているようにも見えた。ケリーの頬を撫でていく、少し湿気を含んだ夜風が琴の旋律のようで、その様は間違いなく琴の音色に聞き入っているようだ。風が止むと、不思議に琴の音色も止んだ。風が揺らしていたケリーの黒髪が静かに落ちる。

ケリーが瞼を開けると、目の前に見知らぬ青年が立っていて、気付けば庭のこここに、見たこともない人々が佇んでいた。

琴の音がゆったりと次の曲を奏で始める。

ケリーが眉根を寄せた。

何故なら。彼らの額にはあるべきものが無かったからだ。

あなた達はだれ？

口について出たのは疑問符だった。

このガーデンに紋章を持たない人々が存在するなど、有り得ないことだからだ。

額に紋章がないだけで、それ以外はこれといった違いは見受けられないのだが、ケリーにとって彼らは不思議な存在に他ならない。

目の前の青年が口を開いた。ケリーがそうであることを知っていたかのように、彼の口調は緩やかだった。

「会って頂きたい方が居るのです。私たちはあなたをその方の元へお連れする為にここへ参りました。お手間は取らせません。あなた

のお時間を少しばかりお与えください。夜明けまでにはここへお送り致します。なにとぞ。なにとぞ」

青年は拝むように両手を合わせ、頭を垂れた。それに続くように庭に佇む他の人々も次々に頭を垂れていく。

どこからか霧が入り込み、青年の足元を覆い隠し、更にはケリーの足元をも覆い隠す。ケリーは逃げる間もなくそのまま霧に包まれ、そして、庭から忽然とその姿を消した。

琴の音は変わらず良い音色を奏でていたが、庭の霧がすべて消え入る頃には、嘘のような静寂がフォレ山に戻っていた。

夜空の三日月が、僅かに西に傾く頃である。

絡め取られていた両足がようやく自由になると、霧も少しずつ晴れてきた。

その奥からは微かではあったが水音がする。

自分が立っている場所が何処かの水辺であるらしいことはわかった。

すべての霧が晴れると、ここまで連れて来た青年たちの姿はどこにも見えなくなっていた。

目を凝らしていると、目の前の水面に一人の女性が姿を現した。

女性と呼ぶには少し幼さの残る面差しが、現れた場所にあまりに似つかわしくなくて、ケリーは背筋に冷たいものが走るのを感じた。

髪は額の中央からきつちりと結び分けられていて、質素な衣服を身に纏っている割に、髪留めは随分と立派な物で、宝石類が贅沢に散りばめられていた。

辺りを覆う霧は彼女の元から湧き上がっているもののようなのだ。

私はウルマ　と彼女は言った。両手を胸の辺りで合わせ、

「あなたに逢えて嬉しい。あなたにとっても逢いたかった」

彼女を取り巻く霧が、彼女の感情に呼応するようにざわざわと色めき立つ。霧のざわめきはケリーの足元にも伝わってきた。

彼女の　ウルマの喜びが率直に伝わる。逢えて嬉しいと喜ぶ温かな感情が、ケリーの全身を駆け巡った。五感の内、二つの機能を失った分、そういった類の感覚が優れているようだ。

ウルマの温かい感情は、ケリーの心の奥底にあった様々な感情を呼び起こしていく。それは自らが封印した悲しい出来事すらも、呼び起こす結果ともなった。

狼狽するケリーに、ウルマは優しく声を掛けてきた。

「何故、悲しいかをあなたが知らないから辛いのですよ」

抑揚の少ない彼女の言葉は更に続いた。

「例え知らなくても、皆、持っているのですもの。知らなければ辛いです。その名前を教えてあげましょうか？」

ウルマの笑顔は更に幼さを増した。

「それは愛というものです。家族を愛する。花を愛する。誰かを愛する。そして、愛するが故に失った時の悲しみは計り知れない。それを怖れた愚か者は、封印することでその悲しみから逃れようとしたのです。封印したところで　彼にはその罪の重さからまったく別の苦しみを受けることになるのに……」

ウルマの言葉はそこで途切れた。まだ紡ごうとしていたようだったが、何故だか彼女は姿を掻き消した。先程まで居た水面にはその姿はなく、立ち上る水蒸気だけがその痕跡を残すのみだった。

愛？　サムを？　ルードを？　だけとおかしいんだ。似ているんだけど、なんだか違う。カスケードにも似たような感じがあるんだけど……。これは……なに？

ケリーの問いかけもまた、掻き消すように霧が発生し、辺りを覆い尽くし、そしてケリーの姿もまた水辺から消えた。

ケリーは、村人が実しやかに語るその話を、俄かには信じられなかった。

「プラージュのアロカシアにオルレカさまが現れたらしい」

「プラージュといえば、この間の花狩りの時に村人全員が花園に送られた、ラケナリアがあつたな。あそこは一体どうなつてんだ？」
「何にしても。今は花狩りの季節じゃないってのになあ。ガーデンの神々はどうなすつたんだろう。カスケードさまも、ちーっともお顔を見せには来てくだらないしな」

「ああ、そうだ。カスケードさまが来て下すつたらお聞きするんだがな」

そう言つて彼はケリーの顔を見つめた。ケリーはぎくりとし、咄嗟に作り笑顔を見せた。

村人の噂話に耳を欬てていたのがバレてしまったのかと思つたのだ。

もちろんケリーの耳は音を拾うことはないのだから、彼らの話を漏らさず聞こうとしていたならば、相当な真剣な面持ちで彼らの顔を、口元を凝視していたに違いない。

「ケリーだつてこんなに心待ちにしておいでなのになあ」

あ、そういうことが……。心待ち……。そうだね。逢いたいな。カスケードに。

「ほらほら！ 男のお喋りはそこまでにして、いい加減仕事に戻つて来たらどうだい？」

女衆の声に、男達は慌てて残りの茶を喉に流し込み、重い腰を上げた。

彼らは、季節外れのオルレカの出現にさして不安を覚えている風でもなかった。彼らにとつてオルレカの出現は至極当然のことなのだから、いちいち深い思慮を巡らす必要はどこにもないのである。

ただ……。本来のオルレカであるケリーを除いて、だ。

オルレカつていったい？ 俺はここにいるのに。誰が狩りを行っているつていうんだ？ じゃあ、俺は？ 俺は……なに？

雨五月の、初夏の爽やかな風が頬を撫でていくのに、ケリーの心は晴れない。それどころか、例えばような不安と胸騒ぎが、ざわざわとケリーの胸を押し潰さんとしているようだった。

「ケリーさま」

空になったケリーのカップをテーブルの端に寄せ、声を掛けたのは、霧の晩に現れた紋章のない青年だった。

タナソツム。

「はい。そう呼んで頂いても構わないのですが、ウルマさまから頂戴した名前がありますので、そちらで呼んで頂ければ喜びます」

タナソツムと呼ばれて応えた彼は、静かな笑みを湛えながら、ケリーのカップに二杯目の紅茶を注ぎ入れた。

「私の名前は、カリナタム」アルバと申します。アルバと、お呼びください」

上手い具合に潜り込んだものだね。その偽の紋章もウルマって人がやったの？

「いいえ。これは私共がやっていることです。ウルマさまはご存知ありません」

へえ。言いなりって訳でもないんだ。

ケリーの目には、彼らの紋章は空々しく映る。輝くでもなく、褪せるでもなく、ただそこに描かれているだけの図柄に過ぎなかった。「言いなりなどと、それは酷い誤解です。私共はそれぞれが、それぞれの意志で動いているのです。確かにウルマさまの手足となつて働ける喜びはございますが、それは決して命じられているものではないのです」

ケリーは空々しい彼の科白を聞き流しながら、一瞥をくれ、ごちそうさま。紅茶、美味しかったよ、と礼を言つて席を立ち、畑仕事の仲間に混じつた。

気になることは多いが、村人と過ごす畑仕事はとても楽しく、僅かばかりでも安らかな時を過ごせることをケリーは優先したかったのだ。

タナソツム アルバ達に監視されていることは否めないが、彼らは危害を加えるわけでもなく、その真意が読めない今は、村人の一人として接する以外はなかった。

「あの噂が気になるの？」

眠れずに、ごそごそと寝返りを何度も打つケリーに、アントニエツタは訊ねた。

ケリーは動きを止め、しばらくしてから、こくりと頷いた。ようやく起き出すと、ベッドを下りる。

アントニエツタは横になったままケリーを見つめていたが、なにも言わずにブランケットを肩まで上げ、瞳を閉じた。

ケリーが心の奥で苦しんでいるのはわかつてはいたが、それはケリー自身の問題だからと、アントニエツタは幼いながらも、そう割り切っていた。

庭に出ると、空に浮かぶ月が煌煌と辺りを照らしていた。

青白く浮かび上がる自分の両手を空に掲げた。指の間から覗く満月を眺めていると、黒い影が突然にそれを覆い隠した。ケリーは、雲ではないその黒い影を、じっと眼を凝らし、見つめた。

一对の翼が月光の中を黒く、くつきりと浮かび上がる。その右手には刀らしき物が握り締められている。

ケリーの額の紋章が、ゆっくりと、力強く脈を打ち始める。

翼が……。刀が……。

ケリーの神経が空に向けられているその時に、屋敷の物陰から転がるようにして誰かが飛び出してきた。ケリーは驚きの余り全身が総毛だつ。

今度はその黒い影に、ケリーの視線と神経が注がれた。影が激しい息遣いを見せながら、ケリーの方を見上げた。

月明かりに照らし出されたそれは、見知った顔だった。

アルバ……。

なぜここに、と言葉を続けようとしたその瞬間、先程まで空に浮かんでいたはずのもう一方の影が、ケリーとアルバの間に割って入る形で飛び降りてきた。

空から舞い降りてきた影は、ケリーに背を向けていたが、ここま
で至近距離になれば、もはやそれが誰であるかは一目瞭然だった。
アルバと対峙しているその姿は紛れもなくオルレカのそのよう
だったが、ケリーの思考がそれを拒む。

剣を持つ右手が振り上げられた。

月光が切っ先を照らし、光が瞬く。

影の肩越しに見えるアルバの表情は、固く強張り、わなわなと奮
える唇が、離れた場所にいるケリーにさえ見て取れた。

「わ、私を、ころ、殺す……のです……ね」

震える唇を懸命に動かし、アルバが言った。しかし影は身じろぎ
一つしない。

ケリーにはわかっていた。影はその剣を躊躇すること無く振り下
ろすだろうと。しかし止めずにはいられない。

目の前で、もう誰も消えて欲しくはなかった。小さな……小さな
光の粒子となって空へと昇っていく様を見たくなかったのだ。

駆け出すケリーと振り下ろされる剣。最早どちらが早いかは考え
るべくもない。

ケリーの目の前で、先程まで人型をしていたアルバが、ぱさりと
いう乾いた音を立てて地面へと散った。

膝から崩れ折れるケリーの前に、放射状に白い小さな花を付けた
一輪の花が散っていた。

ど……どうして。花の形を残したままここにある？

光の粒子となってガーデンへと飛んでいくはずだった。しかしア
ルバは、花芯の姿を残したままその場に散っている。

アルバを拾い上げ、影を見上げた。

夜空を移動した月が、影の顔を照らし出していた。

逢いたくて。逢いたくて仕様がなくて。でもその気持ちの
正体がわからない。ケリーの胸を締め付ける人物。

カスケードはケリーに一瞥をくれた。

酷く懐かしい藍錆色の瞳。一文字に結ばれた唇は固く閉じられた

ままで開くこと無く、カスケードはその面を、ふいとケリーから背けた。

踵を返したカスケードの上着が、ケリーの目の前で翻る。鼻をくすぐる香の香りは間違いようもなくカスケードのもので、月明かりに照らされた端正な面立ちも、風に煽られて舞う黒髪も、それをうつとうしそくに押さえる仕草も、なにもかもがカスケードだった。

そして、一輪の花を手折ったのもまた、カスケードであることも事実だった。

何故、アルバを斬ったのか。ケリーはその理由を聞きたかった。何の理由もなく、カスケードが斬るはずがなく、ましてオルレカとしてそこに立っている理由も問い質したかった。

オルレカは自分なのだから。

しかし、カスケードは一言も語らない。ケリーの伸ばした手を振り切るように、カスケードは飛び立った。

ケリーの手は空を彷徨い、水面に浮かぶ月を掴もうとしているような、虚しい空気が流れていく。

さんざめく者共<5>

オルレカの噂は日を追う毎に、その回数を増やしていった。一昨日はどこそこの村に現れただの、昨日の晩は北に向かつて飛んでいく姿を見たのだのと、どこまでが真実でどこまでがでっちあげなのか、わからないくらいだ。

真実なのは、何者かを狩っている者がいること。そしてそれがカスケードであることである。彼がケリーとは別のオルレカであるかどうかは別として、カスケードは確かに人であるものを斬っているのだ。

無意識に険しい表情をしていたのか、アントニエッタがひよっこりと心配そうな顔突き出してきた。

「そんな難しい顔をしていたら、カスケードさまが心配するわよ？」
ケリーは驚いた。アントニエッタの唇がカスケードと言ったからだ。

「ふふ。驚くのも無理ないわよね。ずいぶんと会っていないんだもの。あのね。さっき村長さんが来て、急なんだけど今夜にでもカスケードさまがピレアにいらっしゃるから、その心積もりでいなさい、だって」

アントニエッタはそう告げると、さあ夕ご飯の支度にとりかからなくっちゃ、と楽しそうに鼻歌交じりに言いいながらキッチンへと消えた。

カスケードと今夜逢える。

ケリーの胸が躍った。しかし、楽しいばかりではない。アルバのこと。人々を狩っていること。訊きたいことは山のようにあった。早鐘のように打つ鼓動は、逢える喜びからなのか、それとも知りたくはない真実を聞かされることへの怖れからなのか……。

「ケリーさま？」

庭先からひよっこり顔を出したのは、最近村に住むようになった、

アルバとは別のタナソツム。

ネモフィラ。

彼女の額にも、ただの図柄でしかない紋章が描かれていた。オステウスの祝福を受けていない証だ。

祝福を受けていない彼女らが、いったい何処からやって来るのかわからない。ただ言えるのは、それがガーデンではないということだけである。

決められた数の魂がガーデンの花園から再生されるのに対し、タナソツムは別の場所から溢れ出してきているのか。ガーデンの人々の魂はすべてオステウスが掌握し、管理しているのだと教わった。ケリーは畏怖にも似た感情が、ふつと湧くのを感じる。

「ケリーさまが紅茶をお好きだと聞いていましたから、お茶の葉をお持ちしました。後でアントニエツタさまとご一緒に召し上がってはいかがですか？」

彼女は小さな籐の籠を差し出した。そこには溢れそうなほどの茶葉が入っているのが見えた。ケリーは彼女の傍まで行き、自分の紅茶好きを誰から訊いたのかと問うた。

「アルバです」

ネモフィラは笑顔で答えた。

彼がまるで今でもすぐ傍に存在しているかのように言っている。

ケリーは不思議を通り越して、不信感さえ抱いてしまいそうになる。アルバはもう存在しないのだ。カスケードが　あの満月の晩に手折ってしまったのだから。

「そのようなお顔をなさらないでください。アルバが存在しないのはすでに存じています。オルレカに手折られたのでしょうか？」

ケリーはぎくりとする。彼女が言うオルレカが、自分ではないことは承知しているはずでも、オルレカの名を聞くと、抗えない罪悪感で胸が痛んだ。

ネモフィラは言葉を続けた。

「それでもアルバは存在するのですよ。私や他の同胞たちの中に…

…。ずっと。永遠に」

彼女は心臓の辺りに両手を宛がい、瞳を閉じた。

ケリーはその言葉に、救いを見た気がした。自分の罪が軽くなるような気さえたのだ。

例え、彼女の額の紋章がただの図柄で、祝福を受けていないのだとしても、それすら瑣末なことに思えた。

祝福されなくとも、彼女は実際に存在しているのだから。

彼はぼくの友人だったんだと、ケリーはカスケードに詰め寄った。気を利かせたアントニエツタは、ケリーの愛犬、ヴェロニカと共にコリーンの家に遊びに行っているから、今、この屋敷にはケリーとカスケードしかない。

「例えそうであつたとしても、彼らを狩ることが今の俺の仕事でね。はいそうですかと言ってやめるわけにはいかない」

オルレカはぼくだ。人々を狩る役目を担っているのもぼくだ。それなのに、どうしてカスケードが人々を狩っているの？

「彼らは人々と称される類ではないからだ。だから俺の事をオルレカだと思っているのなら、それは大きな間違いだ。改めて否定させてもらおう。俺はオルレカじゃない」

人々と称される類じゃ……ない？

「ああ。そうだ。彼らはタナソツームだ」

ケリーはゆっくりと頷いた。

タナソツーム。だがそれがなんだと言つのだろう。彼らはピレアの人々と何ら変わるところもなく、同じように生きて過ごしているではないか。

ケリーは不服そうにカスケードを睨み上げた。

カスケードは無表情でケリーを見下ろす。その藍錆色の瞳に映り込んだ自分の姿を見ると、こちらが悪いわけでもないのに、ケリーはふい、と顔を背けてしまう。

彼らを……。タナソツームを狩るのをやめてって頼んでも、や

めてはくれないんだ。

目を逸らしたままでは俺の言葉がわからないだろうと、カスケードはケリーの顎に人差し指を宛がい、上向かせた。

ケリーは眉根を寄せ、カスケードを上目遣いに見やり、

彼らを作り出しているのは……。ウルマっていう人。ぼくもその人に会ったけど。とても綺麗な人だった。…愛っていうものの存在も教えてくれたよ。ガーデンじゃ、誰も教えてはくれなかったけど……。

「……ウルマ？」

カスケードの氷のように冷たい表情が、その名前を耳にして崩れていく。

「ウルマと会ったと言うのか？ ケリー」

その様子にケリーは訝しげな視線を向けた。しかしカスケードはすぐさま元の冷たい表情に戻り、

「それが真実だとしても、俺が狩りをやめるに足る理由にはならんな」

突き放すように言い放つ。

ウルマのこと。ガーデンで話す？

カスケードは、くだらない、と一笑に付した。

ウルマは何が狙いなんだと、カスケードが呟く。眉根を寄せて、考え込むカスケードに、ケリーはもう声をかけることができなかった。

ウルマが説いた愛について、カスケードならもつと解かり易く教えてくれると思っていたのに、予想外の彼の反応にケリーの唇は小さく震えるしかなかった。

さんざめく者共<6>

フィデリオは、見覚えのあるその場所に足を止めた。自分の領地からさほど遠くない場所を重点的に探索していたフィデリオは、雑草が生い茂る小道の先にある古い屋敷に視線を走らせた。

俯き、暗い表情でフィデリオに従っているステムに顔を向け、短い溜息を吐く。

「もう、怒ってはいないから、いつまでもそんな顔をするのはやめないか？」

「ですが、さしでがましいことをしたのは事実ですから」

ステムは視線を合わせようとはしない。

「確かにな。しかしヴェロニカを預けたのは俺を追う為だったからなんだろう？ その気持ちが理解できる以上、俺も、そう強いことは言えないよ。まあ。まるつきり怒っていないというのは嘘だが……。ケリーを早く見つければ済む話だからな」

フィデリオはもう一度小道の先に視線を戻した。その横顔を、盗み見るようにステムが見つめる。フィデリオに吐いた嘘に胸が痛んだ。

カスケードに預けたとは言えるはずがない。少なからず、ステム自身もカスケードには良い印象を持っていなかったはずだった。そうであるのに、最近のカスケードの微妙な変化に気付くにつれ、ステムの中で大きくその印象が変わってきたのだ。

つと見た草露に、回顧が浮かぶ。

「それはフィデリオも承知しているのか？」

カスケードは目の前のステムに確かめずにはいらなかった。

ヴェロニカを預かって貰いたいと、ステムがわざわざ足を運んで来たのだ。

「フィデリオさまは存じ上げてはおりません。私の一存でございます。私もフィデリオさまのお供をさせて頂こうと思っておりますので、ヴェロニカを連れては行けませんから……。そこで是非ともカスケードさまにヴェロニカをお頼みしようと思いいったわけでございます。やはり、ご迷惑でしたでしょうか？」

STEMは爽やかな笑顔で伺いを立てた。

カスケードは珍しく笑顔を見せながら、

「いや。ピレアに連れて行くから、たいした迷惑ではない。彼も喜ぶだろう」

ふと安堵の表情を見せた。

「カスケードさま？」

よもやカスケードがそのような顔を見せるなど、想像もしなかったSTEMは思わず訊き返していた。

「しかし、フィデリオの耳には入れない方が賢明だろうな」

カスケードは、口の端を上げ、いつもの冷めた笑みを浮かべた。

「それでは、どうかヴェロニカのこと。よろしくお願い致します」

STEMは深々と頭を下げた。なぜか、今のカスケードに頭を下げることに違和感を感じることはなかった。目の前の彼なら、ヴェロニカを任せてもいいと思えたのだ。

顔を上げ、もう一度カスケードの表情を見る。

彼は誰かに思いを馳せているのだろうか。カスケードの藍錆色の双眸は悲しげな色を湛え、遠くの空を眺めていた。

STEMは、カスケードとのやり取りを思い出しながら、主を見やる。フィデリオはその視線に気付き、笑った。

「ぼんやりしている。なにを考えているんだ？」

「いいえ。なにも……」

STEMも笑顔で答えた。その視界に数人の人影が飛び込んでくる。彼らは小道から外れ、森の奥へと向かっているようだ。STEM

は主にそれを告げた。

「この近くに人が住む場所はないはずだ。ガーデンで聞いた、タナソツームとやらかもしれないな。後を追ってみよう」

フィデリオは、小道の奥の屋敷に視線を一度移し、そしてステムと共に森へと入って行った。

ガーデンで聞いたタナソツームと思われる人影は、動きがかなり緩慢で、意識していないとすぐさまその差が縮まり、二人が後を尾けていることがバレてしまいそうだった。

フィデリオは、そう古くはない記憶を辿っていた。先程の屋敷が想像通りなら、この先には池が現れるはずだ。

神々の一人だったウルマが封印された池である。

あまり良くない考えを巡らせていると、ステムが小声で呼びかけてきた。

「フィデリオさま。なにやら囲まれているような気配がするのですが」

そう言われて辺りを見回してみると、追い越した覚えのないタナソツームたちが、いつのまにか二人の背後に回っていた。

「あちらにも」とステムが右手の先を指差した。

三、四人はいるだろう。背後には分かるだけで五人はいる。次いで左手に三人のタナソツームが現れた。

二人は背中合わせになり、タナソツームからの攻撃に備えたが、彼らはフィデリオたちには目もくれず、なにかに惹かれるように森の奥へと進んでいるだけだった。

「これは一体」

「フィデリオさま。霧が濃くなってきたようですね」

見ると、二人の足元に絡みつくような霧が流れるように発生していた。ねっとりとした霧についてくる霧に嫌悪感が走る。足元から這い上がってくるような霧を払いながら、森の奥へと進む。

ふとフィデリオの足が止まった。なにかに釘付けになっている。ステムも立ち止まり、フィデリオの視線の先を目で追う。

その先には、鈴蘭の群生が広がっている。その上を先程の霧が覆っていた。

霧の一部が盛り上がっていく。それは人型へと形を変え、足を踏み出した。それらは動き始めると徐々に男性、女性と更なる変化を遂げていく。

「ここが、彼らの発生源か。待てよ。自然発生なわけがないんだ。なにか原因があるはずだ」

フィデリオは独り言を呟き、彼らの後を追うことにした。

森を抜けるとフィデリオの予感は的中した。

池の上に浮かんでいるのは、封印されたはずのウルマで、そして彼女の信奉者のように多くのタナソームたちが集まっていた。

「彼女が元凶だったのか」

「すぐにガーデンへ引き返しましょう」

「いや、俺はこのままケリーを捜す。だからステム。君がこのことをガーデンへ報告に行ってくれないか」

ステムは、フィデリオがそう言うところわかっていたようで、口元を少し緩め、承知しました、と答えると、すぐさまガーデンへと引き返した。

「こんな夜遅くに帰られてしまうんですか？ 私、しばらく滞在されると思っていました。ケリーだって……」

アントニエツタはそう言うって屋敷の窓を見やる。ケリーがそれに気付くと、すぐに部屋の奥に姿を消した。

「ほら！ あんなに拗ねてる」

「ケリーは別のことで腹を立てているんだよ。気にしないでいい」
カスケードは顔色ひとつ変えず、言った。

アントニエツタは、そうですか？ と訝しげに答える。

カスケードはゆっくりと翼を広げ、ああ、そうだと顔を歪ませて笑い、そして空へと飛び立った。

アントニエツタは両手を腰に当て、飛び立っていくカスケードに口を尖らせてみたが、軽く溜息を吐くと屋敷の中へ戻って行った。ケリーはカーテンを握り締め、今しがたカスケードが飛び立った夜空を、思い詰めた顔で見つめていた。

下唇をきゅつと噛み締め、意を決したように屋敷を飛び出す。

驚いたアントニエツタがケリーの後を追いかけて、続いて庭へと飛び出してきた。

ケリーはくるりと向き直り、小首を傾げて笑顔を見せた。

黙っていてごめんね。

アントニエツタの顔に困惑の色が浮かぶ。その彼女の前で、ケリーは初めて二対の翼を広げて見せた。

「その姿は……」

アントニエツタは驚きの余り、言葉を失った。フラッシュバックのように蘇るラケナリアの悲劇。そして美しいオルレカの姿が脳裏をよぎる。

カスケードを止めなくちゃいけないんだ。もう、ここには戻って来れないかもしれない。それでも俺は行くよ。

アントニエツタは口をぽかんと開けたまま、宙に浮かぶケリーを見つめていた。

ケリーは、ただ驚いて言葉を失っているだけのアントニエツタを見て、許しては貰えないのだと思い込んでしまった。

悲しげにアントニエツタを見つめていたが、つと口角を上げ、自虐的な笑みを浮かべた後、さよなら、と告げた。

ケリーは振り返らずに、カスケードの後を追う。

ウルマの存在を知って尚、狩りを止める意志はないと断言したカスケードを止めるには、もはや実力行使に訴えるほかなかった。そしてそれが可能なのはきつと自分だけなのだとも思った。

久方ぶりの飛行にも関わらず、ケリーの翼は美しく空を切る。

空に浮かぶ下弦の月。真っ白なケリーの羽は、遠く、小さな点のようになっても、輝いて見えた。

さんざめく者共く7>

水面に浮かぶウルマは、以前見た時と同じ幼い笑顔を湛えていが、口調は厳しいものだった。

「タナソツームを創るなど言われるのね。でも、それは出来ない相談です。我が兄オステオスは、自らが犯した罪を認める時がきたのですもの。その為のタナソツームです」

カスケードが狩りを始めたんだ。カスケードはタナソツームしか狩らないって言ったけど。ぼくは、やめさせたいんだ。誰も消えて欲しくないもの。だから カスケードが狩りを止めてくれないなら、あとはウルマにタナソツームを創らないように頼むしかないんだ。

ケリーは固く口を結び、自分の意志が固いことを示した。

「ガーデンは壊れるわ」

ウルマはよく通る声で告げた。

「オステオスの過ちは元通りにはならない。永遠に繰り返す巡るひとつの環？ ふふ。そんなものが永遠ですって。馬鹿げているわ。」

ねえ、ケリー？」

ウルマの笑顔が一変した。目を見開き、鼻にかけた声で問う。

「カスケードが好き？」

幼く見えた彼女の小さな口唇はぬらぬらと光り、それをなぞるように舌なめずりする。

ケリーは言いようのない悪寒を感じ、ごくりと唾を飲み込んだ。

「ねえ。カスケードが好き？」とウルマは執拗に訊いてくる。

ケリーは答えに迷った。ウルマが知りたいのは何なのだろう。自分の胸の内につかえたものが、好きという代物だったとして、それをウルマが知ったところでどうなるのだろう。

戸惑いを隠せないケリーのその様子に、焦れたのか、ウルマは次に甘い声を出した。

「彼をいつまでも見つめていたい？ 彼の傍にいたい？ 彼に触れたい？ 彼のすべてが欲しい？ ほうら、迷っていたりしたらどこかの誰かに邪魔されて、奪われてしまいかもしれないわよ」

どこかの……誰か……？ フィ……デリオ……のこと？

ケリーの戸惑いは増すばかりで、ウルマに会いに来た、本来の目的を見失っていた。

「奪われる前に手に入れなさい。その手の中に、カスケードを握り込んでしまいなさい。そうすれば、彼はずうっとケリーのもの。誰にも奪われないし、どこにも行かない。私だけの大切な人」
うっとりとした顔でウルマは囁いた。その口角から唾液がつうつと落ちる。ケリーはその様に恐怖を覚えた。

普通じゃないとケリーは直感でそう感じた。

ぼくはカスケードをずうつと見ていたとも思っただし、傍にいられるなら傍にいたい。触れてもみたい。ずうつとぼくだけのカスケードでいてくれるのならどんなに幸せかとも思うよ。でも、ぼくは……そうじゃない。

カスケードと同じものを見て、一緒に笑ったりしたいんだ。カスケードがぼくといて一緒に笑ってくれれば……いいんだ。カスケードは本当に柔らかな笑顔を……ぼくに……見せてくれる……から。ケリーの瞳から涙が溢れる。溢れて満たされるのは、その胸中も同じだった。押さえられない想いが、込み上げる涙と一緒に溢れ出した。

ウルマがどういう素性で、こんな場所で囚われの身になっているのかは知らない。しかしはっきりと断言できるのは、ケリーとは決して理解し合えないということだ。

例え、心から愛する人がいたという共通点を持っていたとしても。

一頻り泣いた後、ケリーはその涙を拭い、ウルマの元を黙って去った。

狂乱は静かにやってくる。俺にも、お前にも。

ケリーの脳裏にいつかのカスケードの科白が蘇る。

果たして今がその時なのだろうか。

諦めとも恐怖とも取れるその言葉が、ケリーを奮い立たせる。

カスケードはぜったいにぼくが止めてみせる！ 誰も死なせない！

遠くに眺めるフィレ山脈は、しらじらと明け始めた紺色の空に浮かび上がり、やがて訪れる金色の縁取りはゆっくりとした足取りでガーデンを覆い尽くした。

ケリーは神苑の剣を呼び出し、決意の証として、その漆黒の長い髪をばさりと切り落とした。まるでフィデリオとの決別にも取れるが、それは雛鳥の巣立ちのようなものだ。

短くなつた髪をかき上げ、ケリーは夜明けの空へと飛び立った。

オステオスは、今までになく取り乱していた。額にはうつすらと汗を滲ませ、なにやらぶつぶつと呟いている。

STEMは主の命令通り、ガーデンへと急ぎ戻り、オステオスにウルマの一件を報告したところだった。すると、取り乱したオステオスは、STEMに退室を促すことも忘れ、焦点も定まらない状態に陥つたのだ。

「オステオスさま？ 私はこれで退室してよろしいですか？」

とりあえず尋ねてみる。

オステオスは驚いた様子で、大袈裟なほど身体をびくつかせ、

「あ、ああ。下がっていい」

STEMは小さく会釈をし、部屋を出た。

閉じかけた扉の向こうにSTEMが見たのは、頭を抱えたオステオスが激しく机を殴りつけているところだった。

オステオスの扉が静かに閉じた。

この日を境に、オステオスは神殿の奥に引き籠もってしまった。

「フィデリオの報告をどう見ますか？」

パンディオンは椅子に腰掛けながら、伏目がちに訊いた。

「ステムから聞いた時は俄かには信じられなかったが、オステオスのあの様子と、フィデリオの最終報告を見れば、それが事実だということとは否めないだろう」

ムスカリがそれに答えた。

「半月も籠ったままでは身体にも障るでしょうに。オステオスは姿を見せるつもりはないのでしょうか」

マウリーンの口唇は、また色を失っている。ただでさえ色素の薄い肌の色が、一段と白さを増してしまっていた。

「しかし……。ウルマはなにを考えてタナソツームなどを創っているのでしょうか。第一、彼女にそんな能力があったこと自体が驚きです」

「ウルマはオステオスの妹で愛を司っていたのだから、能力としては存在して然りと私は考えるか？」

「私は……。彼女こそが命を芽吹かせる正当な術者だと思っています」

そう告げるマウリーンの声は僅かに震えている。それでも彼女は言葉を続けた。

「オステオスがそれを司ること自体が間違っていたのです。いいえ、

いいえ。間違っていたのは私たちも同じこと。神ではない私たちは、所詮ただの魔法使いなのです。少しばかり力が長けていたからと、夢を見たのがそもその間違いなのですから……」

「今更なに言う！」

ムスカリが声を荒げて言った。

「第一、私たちは一度たりとも自らを神などと名乗ってはいないではないか。私たちを神だと崇め始めたのは、人々の方だった。私

「私たちは純粹に平和な国を築こうと集まったのではないのか。その為にこの地に赴いたのではないのか？」

ムスカリは荒い溜息を一つ吐くと、視線を窓の外へ向けた。

パンディオンが静かに口を開いた。

「国を今まで何度創ってきたか。その度に、彼らは私たちを神と崇めた。マウリーンの言う通りです。私たちは神などではありません。神になれるわけもないのです。私たちが神になるのではないのですよ。彼らが神を創り上げるのです。私たちが彼らを創ったように、彼らもまた神を創り上げるのですよ。それが私たちだったというだけ……」

パンディオンは席を立つと、ムスカリが見つめていた窓辺に立ち、窓を開け放った。外からは鳥のさえずりが聞こえ、入り込んでくる風には木々の緑の匂いがたつぷりと含まれている。パンディオンは、すうつと外気を思い切り吸い込むと、

「私たちの理想の国を創る為にここへやって来た。幸せは幾度も巡り、争いも悲しみもない。歌と花と風と……。それらに満ちた国を求めて私たちは、苦勞してここを探し当てた。

ほとんど伝承と化していた私たちの理想郷……。神苑の剣と月読の剣の噂を聞かなければ、私たちの旅は徒勞に終わったでしょう」

「だが、その国は遺跡をほんの少し残す程度でしかなかった」

「あの時のオステオスの落胆ぶりときたら、なかったですね。いつの間に彼は……。あんな風になってしまったのでしょうか。少なくともこの地に来たばかりの彼は、ああではなかった」

「ウルマを失ったから」

マウリーンの声はまだ震えている。弱弱しく、

「大切なウルマを失ってから、オステオスはおかしくなってしまった。愛や情をことごとく拒むようになったのもその頃からでした。神を騙った罰が、今、下されようとしているのかもしれない」

「騙っていたわけではない！ 罰など下ろすはずがない。……ゴホッ」

ムスカリは興奮の余り咳き込んだ。パンディオンはマウリーンと視線を合わせた後、ムスカリに一瞥をくれ、

「あの時の救いもカスケードでした。そして、また彼に救われようとしている。ウルマが創り出すタナソツームからこのガーデンをね」「カスケードの持つ月読とケリーが持つ神苑の剣が交わると、いったいどうなるのでしょうか」

マウリーンの問い掛けに、パンディオンとムスカリは顔を見合わせた。

「わからない。としか言いようがない。このような状況はガーデンを創って以来、初めてのことなのですからね。ただ言えるのは、月読で狩られてしまったら、ケリーは消滅するということ。そして神苑は元の持ち主であるカスケードの元へ帰るということだけです」マウリーンが、ふと思いついたような表情を見せた。

「ケリーはカスケードと剣を交えようとするのでしょうか？」

そして三人が三人とも顔を見合わせた。

「それはどうだろう。なにせ、狩り初めの晩から行方知れずになっているのだからね。第一、タナソツームを知っているかどうかも疑わしい」

落ち着きを取り戻したムスカリの声音はいつも通りだった。

やはり、とパンディオンが言葉を紡ぎ始めた。

「やはり私たちが国を、世界を創り出すのは不可能だったのでしょうか」

マウリーンとムスカリは押し黙る。

「魂を吹き込む魔法は 所詮、ただの魔法に過ぎないということなのでしょうか」

パンディオンは空を見上げた。二羽の雲雀が絡み合うように、寄り添うように飛んでいる。

「カスケードのあの翼の美しさに憧れて、フィデリオとオルレカはそれを模して創ったのでしたね。そんなことですら、昨日のこのように思い出されます」

窓辺に植わっている木の梢から、チチチ、と小鳥のさえずりが聞こえる。パンディオンは悲しげで柔らかな笑みを浮かべ、静かに窓を閉じた。

記憶の礎<1>

あれは何という儀式だったろうか。命の無いものに魂を吹き込む。ああ。思い出せない。そんなにも時は過ぎていったのか……。

俺に命を吹き込んだ……あの儀式……我が主。

遠い記憶の彼方に去って行っても、未だ鮮明にあなたのことは覚えてる。

花の香りが季節ごとに変わりうと、夜の月が満ち欠けを何度繰り返そうとも、記憶の中のあなたは今も昔のまま変わらない。

様変わりしてしまったこの国を、あなたは嘆かれるだろうか。それとも、未だ、あなたの掛けた魔法が発動しないことを嘆かれているだろうか。

俺は、あなたの想いを知るために　あの時の判断が間違っていたことを確信するために　あなたから頂いたこの月読で、命を散らせている。

俺は間違っていたのだと。

この世に語る正義などないのだと。

大いなる罪は芽吹いたときに狩らねばならぬ。

そこに正義はなく、ただ、大儀があるのみ。

だから、今の俺は間違つてなどいない。

平和を乱す者。環を崩す者。

あなたが嫌ったものすべてから、この地を守るために。

汚れるのは月読だけでいい。

あなたの剣　神苑　を罪で汚すわけにはいかない。

たとえ　この行為を正義と呼ぶ者がいたとしても、俺はそうは思わない。俺はただ守りたいだけだ。

あなたが愛したこの地を　不用意に乱す者たちから。

見上げた空は少しも変わらない。どこまでも青く、どこまでも澄んでいて、手を伸ばせばあなたが　変わらない笑顔で現れてきそ

うで　痛いほどの青空である。

垂らした前髪を揺らす風に、顔を顰めながら溜息を吐いた。
大きな声で自分を呼ぶ女官の声に、鈍い反応ながらもカスケード
が振り返る。どうやらぼんやりとしていたらしい。

彼女に向き直り、姿勢を正して「なにか？」と訊ねる。

女官は心配そうな目つきでカスケードを見上げながら、

「いえ、これといった用向きではないのですが……。カスケードさ
まが珍しくぼんやりとなさっておいでだったもので、どこかお加減
でも悪いのかと」

「どこも悪くはないが」

「そうですか。それならよろしゅうございます」

彼女は安堵の笑みを浮かべると、それでは失礼しますと言って元
来た道に戻って行った。

「俺がぼんやりすると具合が悪く見えるのか」

カスケードは自嘲気味に笑い、いつもの場所へと向かう。

小高い丘の上では、神殿にはなかった風が幾分強く吹いていた。
いつものように花を手向けたカスケードは、珍しくその場に腰を
下ろし、眼下に広がる街並みとガーデンを眺める。

「ここはいつ来ても風がうっとうしいな」

カスケードは一人ごちて、軽く前髪を払った。

丘から見下ろすと、ガーデンは一つの砦のように見えた。頑強な
堀で囲われ、唯一の出入り口は鉄の門扉で固く守られている。その
中に、人々が所謂、神と呼んでいるオステオスたちが住んでいるの
だ。

本来なら、あの場所には花々の咲き乱れる花壇がそこにあり、
花を愛でる我が主、エクセイシアⅡフェルフォーリアの少し高めの
可愛らしい笑い声がよく響いていたものだ。

「争うことが正義か。争わず言われるがまま従うが正義か。　我

が主よ。あなたを懐かしく思えば……嫌な記憶までも思い出してしまう。100万の民を救うために千人殺せと言われれば、今の俺なら殺せる。過去に負った過ちを繰り返さんためにな。だがケリ！。お前ならどうする？ 犠牲なくしてこのガーデンは救えん環が乱れれば すべてが狂うぞ？ ケリー」

記憶の礎<2>

揺らめくろうそくの明かりが生き物のように部屋中を蠢いている。勢いよく持ち上げられた濃紺のカーテンは、ベルベットらしい滑らかな光沢を見せながら、すつと現れた人影が通り過ぎた後、ぱりと重みのある音を立てて床へ落ちた。

濃いオレンジに近い金色の髪を振り乱し、怒り心頭の王子は怒りに任せてなんとも大きな溜息を吐く。

しまいには子供のように足を踏み鳴らし、間違っている、と声高に叫び始めた。それを宥めるように、柔らかで落ち着いた声が部屋に響く。

「我が主よ。心をお静かに」

果実酒が王子の前に差し出されると、彼はその見事なカッティングを施された異国のワイングラスを乱暴に受け取り、気を静めるように一気に喉へと流し込む。

「ああ、口の端から零れていますよ。まだまだ小さいお子のようだ」
そう言つて藍錆色の瞳は笑い「失礼します」と言ってから王子

エクセイシアの口元を指で拭った。

「すぐに綺麗な布をお持ちいたします」

「いや、いいよ。二度も拭いて貰うなんて、それこそ子供のようだからね。ありがとう、カスケード。これで少しは落ち着いた」

エクセイシアは空になったグラスを持ち上げ、屈託のない笑顔を見せた。

「父上はハブランの言いなりだ。あれではどちらが王かわからない」
傍にあったチェストの上に、飲み干したばかりのワイングラスを無造作に置きながら、愚痴のようにこぼす。

「そのようなことはありません。王は……王家の人々は皆、神の子なのですから、ハブランさまがどう足掻いたところで王にはなれません。」
ハブランさまのお考えは武將の血が濃いドルバドル家

独特のもの。王に取って代われるほどのものではありません」

カスケードの声は、とても落ち着いていて、憤っていた王子の心が少しずつ解れていく。

「そうだいいけど。ハブランの猛々しさはこの国に良くないものを連れて来そうで怖いよ」

窓辺に歩み寄ったエクセイシアは、差し込む月光に顔を覗かせ、眉根を寄せた。

「庭で話そう。いい月夜だ」少し思い詰めたような声が、庭へ行こうとカスケードを誘う。

カスケードは頭を垂れ、瞳を軽く閉じると「仰せのままに。我が主」と答えた。

「我が主はよせて言ってるだろう。エクセイシアでいいよ。何度も言わせるな」

エクセイシアは呆れたように首を横に振った。王子が廊下へ出ると、主の真意が図れないカスケードは慌てて後を追う、

「我が主をそう呼んでなにが可笑しいでしょうか」と、その真意を問うた。

エクセイシアは僅かに顔を振り向かせ、

「仰々しすぎる。確かに。カスケードを創ったのはぼくだけ、だからといってそう呼ばれるのは好きじゃない」と色素の薄い桜色の唇を小さく尖らせた。

「慣例に従ったまですが」

「従わなくていい。ぼくは主人と従者の関係の為に君を創ったんじゃない。ぼくの友人として創ったんだから、エクセイシアと呼べばいいんだ」

カスケードは眉根を寄せ、困ったように、目を伏せた。

「私も他の泥人形と同じく、感情に複雑な多様性がありませんから、そう命じられれば従います。呼べ、と。どうぞ命じてください」

エクセイシアはきゅっと下唇を噛んだ。

「友人は命じられて名を呼び合うものじゃない。いいよ、もう。」

そのまま……。いつか君の方からぼくの名を呼ぶようになるから

「

ふふふ、とエクセイシアが笑う。

カスケードは伏せていた視線を上げ、主を見た。

「それはどういふことでしょいか？」

「それを言つたらぼくの楽しみが減つてしまふよ。そうだね、ヒントをあげよう。君の身体の中に魔法をかけているんだ。いつ発動するかわからないところが、ぼくの術者としての未熟さなんだけどもね」

エクセイシアは両手を広げ、駆け足で廊下から回廊へ、回廊から庭へと飛び出した。

「ご覧、カスケード。今夜は満月だ。御伽噺に出てくる月の船が、魂を運び出すところだね」

子どもの頃になんとも聞かされた、フェルフォーリアの古いお伽噺を懐かしそうに呟く。

そして太陽が人々を生む　エクセイシアは両手を夜空に掲げた。中空に浮かぶ満月に、手を翳し、少し悲しげな笑みを浮かべる。

煌煌と月光が降り注ぐ中、エクセイシアの庭は芳しい花の香りで満たされていた。

ふわりと舞い上がる花の香りと、散る花びらの中に佇む主をカスケードは見つめる。

エクセイシアは振り返り、自分に向けられているカスケードの視線を絡め取るように見つめ返した。

幼さが残るエクセイシアの澄んだ高い声が、静かな夜にそつと囁く。

「いつか、きちんとぼくの名を呼んでね。カスケード」

例え君が泥人形であっても、ぼくにとって君はかけがえのない友人なんだ、と自分より遙かに背の高いカスケードの身体を抱き締めた。しなやかなエクセイシアの体軀からは花の香りが立ち上り、カスケードの鼻をくすぐる。

カスケードは抱き締められるまま、ぼんやりと、天空の月を眺めていた。

エクセイシアが、なぜ自分以外の泥人形を造らないのか。

他の王家の者達がそうするように、なぜ軍隊を造らないのか。

フェルフォーリアの泥人形は使い捨ての駒に過ぎないはずだった。命のないものに魂を吹き込む魔法の国。

その純然たる血統を受け継ぐ王子　エクセイシアが、たったひとつの泥人形　カスケード　に向ける純粋な想いを、この泥人形は理解できないでいる。

空に浮かぶ満月を囲うぼやけた環は、まるで月を守っているように見えた。

カスケードは、自分の存在意義はそれなのだろうかとも考える。腕の中の小さな少年を守ることが、泥人形としての生を全うさせる唯一の理。理解できない言葉を紡ぐ王子。叶えられるはずなどない希望を語る王子。

乾いた砂を魔法で繋ぎとめられているカスケードにはわからない。王子を守るといふ具体的な意義がなければ、この世の意味すらわからない。

カスケードは肩を竦めた。

「我が主。風が出てきたようです。もう戻りましょう」

花の香りが風に乗って鼻につく。

カスケードは眉根を寄せながら、主の背をそつと押した。

記憶の礎<3>

花の匂いは苦手だ……。

舐めるように丘を駆け上る風も嫌いだ……。

身体の中心が時折、こつやつて些細な日常に対して疼いた。なぜ苦手なのか、どうして嫌いなのか。

そもそも嫌悪を感じることを口にする、この行為にすら疑問を感じずにはいらなかった。

なぜなら、カスケードの同胞は、さしたる言葉を持たぬまま戦場へと赴き、その土塊の身体を粉々に粉碎させることがこの世に存在する唯一の意義だったからだ。

カスケードも本来ならば、エクセイシアが持つであろう軍隊の兵力として、国を守るための戦場へ向かわなければならぬのに、彼はそうならず、影のようにぴたりとその身を主に添わせ、宮殿で生活をしていた。

そのことが主への誹謗中傷へ繋がるということを……カスケードはわからなかった。

エクセイシアは　カスケード以外の泥人形は造らなかった。

その技術をとっせん持ち合わせてはいたが、元来、争いを好まない彼は、頑なにそれを拒み続けたのだ。

このエクセイシアの思いもまた、カスケードには理解できない。

いつかわかるよと、なんども、呪文のように主に繰り返されても「土塊の私には……」と目を逸らすほかなく、ただこの平和なフェルフォーリアの世が続けばよいと、現状の幸せを願う時でさえ虚ろだった。

それは自分が主たちとは違う、心を持たぬ「土塊なのだから」とカスケードは思う。

主が自分にどんな魔法を施したのか。想像もつかない。

それが苦しいものでなければいい。

悲しいものでなければいい。

チチチと鳴くヒヨドリの軽快な声。主がよく口にする甘みさえも感じるという森から吹く風。

主が綺麗だというものはすべて美しいのだろう。主が心地よいと感じるものはすべてそうなのだろう。ただ自分が……そう感じない。それだけだ。

ベッドから下りたばかりの主は未だ寝巻き姿で、「カスケード。

そろそろ何か変化を感じないか？」と小首を傾げてカスケードの顔を覗き込んでくる。

主に着を着るよう促しながら、カスケードは困ったように微笑み、その柔らかな藍錆色の瞳が暗く沈んでいく。

変化　とはなにか？

両腕を袖に通させ、襟を正す。

襟の縁を飾る重厚な刺繍に指を滑らせながら、カスケードは、低いがとても優しい声音で答える。

「いいえ、まだ何も……。我が主……」

伏せた長い睫毛が、悲しみを湛える藍錆色を隠す。

自分の瞳に、そんな色が宿っていることをカスケードは知らない。ただ、ふいに見上げてきた主の顔が、ぱっと明るいもの変わったことを不思議に思っただけだった。

小さな唇を僅かばかり開けて、鈴の音のような可愛らしい声で笑う。

「いいや。その顔が何よりの証拠だ。　ふふふ。早くカスケードの笑顔が見たいよ」

「命じていただければいくらでも」

「違うよ、カスケード。でも、まあいい」

エクセイシアがそつと腕を伸ばし、細い指先をカスケードの頬に宛がった。

「いつかきみの笑顔がぼくに注がれるのを楽しみにしているよ」

主の楽しいげな声とは裏腹に、落とした視線の先にある白い柔肌をカスケードはぼんやりと眺めていた。

きつとこの白くて柔らかい肌も綺麗、というのだろう。

泥人形である自分には持ち合わせないもの。目覚めたばかりの主の掌は温かいのだろうか。それとも部屋の温度に負けて冷たくなっているのだろうか。

胸の中央に小さな痛みが走った。

カスケードは胸を押さえて眉根を寄せる。崩れてしまうのかと小さく漏らした。泥で出来た土塊の自分の身体が音を立てて崩れていくのかと思った。

エクセイシアはすでにカスケードの傍から離れていて、テラスへと足を踏み出そうとしている。

眩しい朝陽に当てられて、主の身体が透けるように輝いて見えた。胸に小さな痛みが走ったことを主に告げれば、彼はどんな顔をसरだろう。さっきのように嬉しそうに微笑んでくれるだろうか。

白い頬を朱に染めながら「ほらね」と笑ってくれるだろうか。エクセイシアの笑った顔が見たいと、カスケードは望んだ。

記憶の礎<4>

わあわあと雄叫びがそこから上がる。

鉄と鉄が擦れ合う音。弾ける金属音。間髪いれずに上がる断末魔の悲鳴は敵か味方か。

兵士が一人、また一人と倒れ込むたびに花びらが舞い上がる。

逃げ惑う市民を容赦なく切り殺す敵兵に、一片の迷いのない顔をしたフェルフォーリアの土塊たちが果敢に襲いかかる。

フェルフォーリアは戦場と化していた。

カスケードは逸る気持ちを無理やり心の奥に捻じ込ませ、城門へとひた走る。

「カスケード！ 跳ね橋が落とされた！ 奴らはすでに城下に侵入してしまった！」

ようやく辿り着いた城門の前で、警備兵がカスケードに向かって叫んだ。彼の向こうには、いつもなら跳ね上がった橋で閉じられている門が、大きな口を開けて立っていた。

「危ないぞ。カスケード！」

その叫び声は、カスケードの目の前でくず折れた警備兵の背後から飛び出してきた敵兵の首を、一瞬にして斬り落とした。

「ぼやぼやしていると今度は貴様の首が刎ね飛ばされるぞ」

「ハブランさま」

真横に立つ屈強な武人に目を遣る。

ハブランは刃に付いた敵兵の血を払い、鞘に収め「敵国の王の方が一枚も二枚も上手だったってことか」と苛立ちを滲ませながら呟いた。

戦場に在りながら、うるたえるカスケードに、

「中の警備は手薄になっている。ここは私が抑えているから、貴様は早く城へ向かえ。城中には、智将のベルエアと官吏のフランバ

ムしかおらん。彼らでは……エクセイシアさまをお守りするのは無理だ。貴様が行け」

そう言うが早いか、どこからか現れた敵兵の首を瞬時に落とす。

「早く行かんか！」

そう怒鳴りつけられたカスケードは、転がるようにして城門を駆け抜け、あちらこちらから現れる敵兵を、エクセイシアから託された神剣の片割れ、月読で次々と斬り捨てていく。

カスケードの端正な顔が、敵兵の返り血で真っ赤に染まる。それらを拭うこともなく、ただひたすら主の元へと駆けて行く。

返り血が頬を流れ落ちるほどになろうとも、カスケードの足は止まらなかった。

頑強な造りの城門とは打って変わり、屋敷の門は簡素なものだった。城門と跳ね橋が落とされることなど、フェルフォーリアの王たちは考えもしなかったからだ。

簡素なその門はあっけなく打ち破られていて、屋敷へと戻ったカスケードの前には、累々と横たわる同胞の泥人形たちの哀れな姿が晒されていた。

命を奪われればただの土塊に還るだけ。知っていることとはいえ、カスケードはそれらを直視できなかった。

城の奥からは、剣の打ち合う音が響いてくる。

カスケードは中へと急いだ。

途中、ベルエアーの屍体を見つけたが構わず進む。カスケードの頭の中には主のことしかないのだ。エクセイシアの無事。ただそれだけである。

音はエクセイシアの庭から聞こえてくるようだった。カスケードは月読の柄を握り締め、通路の窓を打ち破って庭へと飛び出した。

飛び散る破片の向こうで、人影がゆらりと揺れた後、花壇の中へと倒れ込むのが視界の端に飛び込んでくる。綿毛のように真っ白な花びらが一斉に散り、宙へと舞い上がる。

窓から飛び降りたカスケードの足元には、官吏フランバムの屍体

が転がっていた。

カスケードはゆっくりと、視線をフランバムから前方の花壇へと向ける。

逆光の中で、数人の敵兵は何かを持ち上げ、高笑いしていた。カスケードは目を細め、それらを凝視した。

地の底から這い上がってきた魔物か何かの汚らしい、嫌な声が聞こえてくる。

「神の子と言われたフェルフォーリアも、攻め落としてみればただの人の子だったな！」

「なにやら妖しい術を使うと聞いていたが、なに。たいしたこともない。剣ひとつ扱えぬとは何とも貧弱な一族よ」

「そうなれば、この剣も無用の長物となろう。儂が貰い受けてやる。あり難く思えよ、王子殿」

眩しい光の中。

汚らしい男どもが高々と持ち上げたそれは、間違えようもない、カスケードの主。エクセイシアだった。

声が喉に詰まり、あるはずのない血が逆流しているかのような錯覚に陥った。身体の中のなにかが滾る。

今にも口から熱い炎でも迸るのではないかと思うほどの
が　だがけてカスケードにはわからない　なにか。　激情

じやり、とカスケードの足元の砂が鳴った。

高笑いしていた敵兵が一斉にこちらへと向き直り、目を細め、黒々と生やしたヒゲを撫で回しながら、にたりと笑う。

「まだ生き残りがいたようだ。ほうら、お前らが信奉していた神の子の哀れな末路を見るがいい」

放り投げられたそれはカスケードの前に落ち、ごろりと足元へと転がってきた。

瞳は固く閉じられ、口唇からは一筋の血が流れ落ちている。

「その剣から手を放せ」

カスケードは月読をすらりと抜き、切っ先を突きつけた。声が少

し震えていたが、武者震いである。

「剣を放せば見逃してやらなくもない」

今度ははっきりと告げた。

ヒゲ面の敵兵は、文官のようなカスケードの風体に嘲笑を浴びせ、
「お前もその剣を放せば見逃してやらなくもないぜ？」

ひっひっひと引き攣った笑い声をあげた。

カスケードは駆け出し、数メートルの距離を一気に縮め、彼らを
一閃の元に斬り捨てた。

ゆらりゆらりと頭と離れた胴体が無様に花の中へ倒れ込む。

「貴様らのような外道が触れていい物ではない！　これは……これ

……は。我が主……の物だ。　くっ」

月読を収め、抜き身のまま転がっている神苑を拾い上げた。鞘を
探してみると、それはエクセイシアが握っていた。しっかりと握り
締めた彼の指を、一つ一つ鞘から外し、抜き身の神苑をようやく収
める。

「王よ。あなたが選んだ争いの道は、我が主を奪い去ってしまった。
私を戦場へ送り込み、主と離れさせたのは何故ですか。他意はない
と言われたが、どうなのですか？　ハブランさま！」

回廊を回って現れたハブランに問うた。

近づいてくるハブランの足が、エクセイシアの花を踏みにじり、

王が懼れたのだと言った。

「エクセイシアさまの貴様に対する執着をな。ただの土塊にしか過
ぎぬ貴様をいつも手元に置いておかれたらう。いずれ王を継ぐ者
として、一介の土塊如きに執着するようでは政が行えんと嘆かれた
のだ。だから私が進言した。貴様を戦に向かわせるようにな。だ
が、貴様とて望んで戦場へと赴いたではないか」

「時には戦うことも必要だと感じたからです。そうでなければ我が
主の政が立ち行かぬと……王が申されたからだ」

「だが、貴様はそれに応じ戦場へと赴いた。己の意志でエクセイシ
アさまの元から離れたのだ。結果、エクセイシアさまは無残な最期

を迎えられた。この罪が誰の罪だと貴様は言うのだ」

「誰の罪だなどと。ただ 私は……このような思いが初めてなのです。胸が軋むのです。まるで……今にもこの身体が崩れ去ってしまふような……壊れてしまふような……」

「悲しみだとも言うのか？ 土塊のお前がそれを口にするのか？ だが涙は出ておらぬ」

「それは」

「教えてやろう 貴様がただの泥人形だからだ。土塊である貴様に、悲しみなどという人と変わらぬ感情が宿るなど、吐き気がするわ。夢を見るな。土塊は土塊らしく、戦場で死ね」

ハブランは吐き捨てるように言い、庭を後にした。

捨て置かれてしまったエクセイシアの亡骸を、カスケードはその庭に埋めた。

「やはり、あなたの名を口にすることはできない。私はただの土塊なのです。ですが、誓いましょう。私の主はあなただけであることを。この命が尽きるまで……」

カスケードはうつうつとうしそくに風に舞い上がる髪をかき上げた。憂鬱そうな溜息を吐き、翼を広げる。吹き上げる上昇気流に乗り、空へと飛び立った。

タナソツームを狩りに。

「私の身に感情は宿らん。だが願おう。」

今、この剣で花を狩ることが あなたの思いを裏切っていないのだと

記憶の礎<5>

広い敷地の中にあつて、猫の額ばかりの小さな畑。比率で言えば花壇の方が断然広い。咲いては散るだけの花を、アントニエツタはとても大事にしていた。

もちろん空腹を癒してくれる畑の野菜たちとて同じではある。

ただ枯れるだけの綺麗な花。

幼いアントニエツタに深い思いがあるとも思えなかったが、刹那的な存在に思いを寄せる様を見ていると、嫌な汗がケリーの背中を伝ってくる。

ケリーは門の向こうの影に気づくと、屋敷の裏手へ回り、気づかれないように飛び立った。

ふうと大きな溜息を吐いて、アントニエツタは曲げていた腰をぐいと伸ばした。うーんと伸びをすると、門の影からこちらを窺っている人影が見えた。コリーンだった。

アントニエツタは、不安げな様子のコリーンに、「どうかしたんですか？ コリーンおばさん」と声をかけた。

コリーンは辺りを見回しながら、敷地に入ってくる。

「可笑しなコリーンおばさん。本当にどうしたの？」

アントニエツタは先ほどまで撒いていた肥料の麻袋の口を結わえながら、笑いながら言う。

「ちよいと可笑しな噂を聞いたもんだからね。それを確かめに来たつてところかねえ」

コリーンはもじもじとしていて、いつもの豪快さがなかった。

「近頃、ケリーの姿を見ないだろう？ いやね、あたしゃ、カスケードさまがガーデンへお連れしたんだって思ってたんだよ。それがさ。あちこちの村や町に現れてるオルレカさまの一人がケリーの年恰好とそっくりでさ。村の皆が騒いでんのさ。 ここのラケナリアみ

たいにされるんじゃないかって。よその村や町なんかじゃ代表者が集ってガーデンへ向かったって話も聞いてるんだよ」

「それを確かめに？」

「ああ。　ねえ、アントニエッタ。ケリーはカスケードさまと一緒ににガーデンへ連れて行っただろう？　オルレカさまなんかじゃあないよねえ」

コリーンは祈るような気持ちで訊いた。

アントニエッタは彼女の顔をじっと見つめ、そしていつもの笑顔を見せた。

「そんなことあるわけないでしょ？　だってケリーがピレアにいる時からオルレカさまは現れていらっしやったもの。　安心してコリーンおばさん。ケリーはカスケードさまについて行っただの。後を追いかけてね」

そう言ったアントニエッタの顔は寂しそうで、コリーンは、
「あんたもそれじゃあ寂しいね。　こんな広いお屋敷に一人残されてさあ。　いつでもうちに夕飯食べに来てもいいんだよ？　　じゃあね。　それだけ訊きたかったんだ」

アントニエッタをぎゅっと抱き締め、じゃあねと言って敷地から出て行った。

「コリーンおばさんに嘘、吐いちゃった」

ケリーがオルレカであることは、アントニエッタも承知していた。二対の翼を広げて見せて、さよならと悲しげに笑ったケリーの顔が忘れられない。

そのケリーの様子から推し量るに、もう一人のオルレカと呼ばれているのはカスケードであることも分かっていた。

ケリーの苦しみが何であるかが分かっても、それが自分の悲しみと比べられない。

どちらがより苦しんだとか、悲しんだとかいうことではないのだ。
「ケリーを苦しめていたのは私。私を悲しませたのはケリー。ただそれだけのこと。恨んでなんかいないのに……」

寂しいよ。と呟き、小さな手を目に押し当て、しゃくり上げた。

腰が抜けてしまったのか……。ケリーの背後では逃げるよう促されたのにも拘らず、数人のタナソツームたちがみつともなくしゃがみ込んでいた。

きらりと煌く月読の切っ先は、迷うこと無くケリーを指していた。「タナソツームを庇った所で、お前の免罪符にはなりはしないぞ」

ぼくは、そんなものが欲しくて彼らを助けているんじゃない。ぼくは、ただカスケードに人を斬って欲しくないだけなんだ。

カスケードは変わらずケリーを指したままで、

「退け」

冷たく、突き放すように言い放つ。

ケリーは両手を広げ、退かないと頑なに答えた。

「ならば神苑を抜け」

抜かない！

「争う気がないのなら、俺もお前を斬る理由はない。そこを退ける。俺が用のあるのは後ろで腰を抜かしている奴らだけだ」

斬らせないって言うてるだろ？ もう止めてよ。紋章があつても無くてもいいじゃないか。彼らだって同じ花だ。

「生憎だが俺には花の気持ちとやらは理解出来ないんでな。……俺は花じゃない。ただの土塊なんだよ。これ見よがしに花の気持ち云々語られても、気分が悪くなるだけだ」

土塊……？

カスケードの口から語られたのは、自分は土塊だということだった。

ガーデンに存在するものすべてが、花芯を魂に持つと教わってきたケリーの胸に衝撃が走る。

オステオスの祝福をその額に掲げ、ガーデンに存在するものすべては花の筈である。

その中に土塊が……？

ケリーの一瞬の隙をついたカスケードは、彼の背後で蹲るタナソ
ツームを容赦なく斬り捨てていく。

永遠に繰り返し巡るひとつの環。

ウルマは馬鹿げていると言って笑った。

その時点で彼女が正気だったかどうかは定かではないが、それが
本当だとしたら、オルレカとして教え込まれたものすべてが脆く崩
れ去ってしまう。

オルレカが繋いでいる筈の魂の環。

馬鹿げていると笑うウルマと、自分は土塊だと告げるカスケード。
安穩と次の再生を待つ為に花園へと送ったのに、込み上げる激し
い喪失感の答えがこれだということなのか。

涙を流したアントニエツタと自分自身は、もしや同義の存在だっ
たのではないか。

信じていたものが壊れる瞬間とはあっけなく訪れるものだった。

「感情があるというものは厄介だな、ケリー？」

そう突き放すように言ったカスケードだったが、胸の奥が軋むよ
うに痛み始める。

古傷が痛むように。

思い出したいくない過去の記憶が蘇ってくる。

わからないものだらけの日々。それらを教え、諭してくれるもの
の消失。

土塊であっても考えた。

考えて 考えて 考え抜いた。

それでも……。それでもぼくはカスケードを止める！

ケリーの瞳は誰かを彷彿とさせる。

似ても似つかない。むしろ風貌が似ているのはマリールーではな
かったか。しかしマリールーの瞳とケリーのそれはあまりに違う。

その違いがわからない。

また長い年月をかけて考え続けなければならないのだろうか？

「それはお前の意志か？」

ケリーは、カスケードを真つ直ぐな視線で見据えている。

カスケードの苦手な瞳だ。大切な人を思い出してしまっからだ。彼が言っていた謎の半分も解けていないのに。

だから、つい目を逸らしてしまう。

「俺と争う　ということなんだな」

ケリーはカスケードの前に進み、彼の頬を鷲掴みにすると強引に顔を自分に向けさせた。

目を逸らしたらぼくの言ってることがわからないよ。ちゃんとぼくを見て。

ケリーの瞳に映り込んでいるのは、情けない顔をした自身だった。ケリーの意志の強い瞳に見つめられれば、否が応でも自分が土塊であることを教え込まれているようで、反動で胸がさくれ立つようだった。

カスケード。ぼくは争いたいんじゃない。争わない方法がきつとあるって思うんだ。だから、手遅れになる前にカスケードを止めたい。……お願いだから、タナソチームを狩るのを止めて。タナソチームがいても永遠は得られる筈だよ？　その方法を探そうよ。

「無理だ」

カスケードは喘ぐように呟いた。

「環を巡らすにはオステオスの祝福が不可欠だからだ。それ以外はその環から外れてしまう。均衡が保たれなくなれば、いずれ大きな争いが起きる。だからその前に手を打つ」

カスケードはケリーを突き飛ばし、

「これが争わない唯一の方法だ」

鰐を鳴らし続けていた月読を鞘に収め、翼を広げた。

飛び立ったカスケードの後姿に、

ほかにも方法はある筈だよ！

ケリーが叫ぶ。

カスケードの剣の前に無残に散ったタナソツムを拾い上げ、ケリーは涙を拭った。

記憶の礎<6>

ピレアには戻らないと言ったケリーは、ウルマの池の近くにひっそりと佇む廃墟に身を隠していた。いつぞやカスケードがケリーの傷を癒したウルマの屋敷だったが、ケリーはそれを記憶していない。偶然にその屋敷を見つけ、隠れ家にしただけである。

あれからカスケードとは何度か剣を交えた。

その最中に幾度も訪れた、月読に斬られるというぞくりとした感覚。しかし、月読がケリーの身体を貫くことも、果ては斬り捨てることもなかった。

その都度あちこちに打ち身や裂傷を負ったが、どれも致命傷には到らず、月読からの充分すぎるほどの殺気に似た強い意志を、カスケードが拒んでいるように見えた。

自惚れでなければいい、とケリーは思った。

カスケードが苦しんでいるのなら、救いたいと思う。

土塊がどうだと言うのだろう。

ケリーの中のカスケードは、いつまでも美しいままなのだ。

綺麗な指先で髪をかき上げる仕草も、翼の扱いもなにもかもが、美しく変わらない。

腕の傷を包帯で隠し、痛さに顔を歪ませながら、それでも想うのはカスケードのことばかりである。

ガーデンは、この惨事に不似合いなくらいに良い天気が続いていた。

ただどね、カスケード。花は土がなくなっちゃ綺麗な花を咲かせられないんだよ？ 気付いてるのかな。

森の中はひっそりとしていて、時折山鳩が思い出したように鳴き止まっているのかと思えた時間が、きちんと流れていることを思い出す。

カスケードを救うための具体的な方法が思い浮かんだわけでもな

く、このガーデンの永遠を欠けることなく巡らせる名案を思い立つたわけでもない。

それでも、少しは前向きに考えたいとケリーは思う。

両手を広げて空に掲げてみる。指の間から木漏れ日が透けて見える。

カスケードを救う手立てはないかもしれない。でも、あるかもしれないのだ。ないかもしれないと考えるよりも、あることを信じて立ち上がるうと思うのだ。

きつとカスケードはあの端正な顔を曇らせて「土塊の俺にはわからん」などと吐き捨てるかもしれない。それでもケリーは 例え、何度も剣を交えようと 幾度だってカスケードの前に立ちはだかつて見せるのだ。

オルレカとして教育された、このガーデンの永遠の環を巡らせる使命を負わされた者の務めだと信じて 。

しかし、それはカスケードのいう「環から外れたものは除外する」という理念からではない。

カスケードは新たな変化を恐れているだけだと、ケリーは呟いた。

共に乗り越えよう、カスケード。

愛されて育ったケリー。

愛をその身に湛えて育ったケリー。

その手で愛する者の魂を狩った辛さを乗り越えて、何かに怖れ、闇雲に剣を振るうカスケードの手を取ろうと立ち上がる。

ウルマの言った“永遠”の意味が、少しだけ解かった気がするよ。

きらきらと音を立てながら日差しが降り注ぐ。

月読に切られた箇所はとも痛むけれど、それすら愛しいと思えてくる。 生きているのだと実感する。

頬を撫で上げていく、森を渡る優しい風。

丘の上で、うっとうしそうに前髪を上げていたカスケードは、疎んじながらも風を感じていた。

だからきつとわかるはず。

神苑^{これ}に誓って！

ケリーが右手を突き上げると、ふわりと風が舞い上がり、その腕に絡みついたと思うと、その手には、あの不思議な文様に剣が握られていた。

しなやかな反りを見せながら、神苑はケリーの手で明らか意思を持つ。

それが“誰”のものであるかは、ケリーのおずかり知らぬところなのだが……。

眉根を寄せて、物憂げな顔でカスケードがガーデンの石畳を進む。おい、と無礼な声音で声を掛けられ、振り返るとフィデリオが建物の影から飛び出してきた。

まるで待ち伏せてでもいたかのような感じである。

フィデリオの血走った目が、カスケードの顔や手に不躰に向けられ、

「その傷はケリーに負わされたものなんだろう？」

そう問いかけたフィデリオの声は意外にも、怒りというよりも焦燥感が勝っている気がした。

カスケードは目を細め、わざとらしくニヤリと笑い、

「これはこれはフィデリオ。ケリーの探索はもういいのか？ それとも諦めたのか？」

と嘲笑うように言う。

フィデリオは怒りで震える指をカスケードに突きつけ、

「俺の目は誤魔化せないぞ。今、ガーデンになにが起きているのかも知っている。彼らを狩る為に」

とここでカスケードに向けていた指先を、彼の腰に納まっている月読へと向きを変え「お前がその剣を振るっていることもな」と吐き捨てた。

カスケードは、こう息巻くフィデリオを鼻であしらいながら、

「毎日毎日、そこら中の代表者共が大挙して押しかけてくれば、よほどの莫迦でなければわかるだろうな」

更にフィデリオの神経を逆撫でするような発言を繰り返した。

「タナソツームを庇っている翼人がいることもわかってるんだ。

斬る翼人がお前なら、残る翼人は 誰だ！」

カスケードは冷たく笑いながら肩を竦め「じゃあ、フィデリオだと彼を指差し、莫迦にしたように答えた。

「ケリーだ！」

フィデリオは齒軋りするように言い、その両の拳に力を込めた。

「ひとつ訊きたい。お前はその剣を何の為に振るう？」

カスケードは、珍しく目を逸らさずにフィデリオの眼差しに受けて立った。

ケリーのあの眼差しに比べれば、フィデリオのそれなど、今のカスケードにとって取るに足らないものだった。
ゆっくりと、カスケードが口を開く。

「俺がどんな答えを言おうと、お前は納得しないだろう。ただ、俺に斬られてしまいかもしれない自分の花が心配でならないだけだ。
違うか？」

フィデリオは、一旦は力を込めるだけに留まった拳を、怒りに任せてカスケードの顔面へと叩き付けた。
少しだけよろめいたカスケードは小さく息を吐き、血の滲んだ口の端に舌を這わせ、フィデリオを見据えた。

「前に言った筈だ。俺には愛も正義もわからんとな。それが答えだ。
得心がいったか？」

フィデリオは「はっ」と吐き捨て、

「それが本心か。では、その剣は 愛する者を守る為でもなければ、貫きたい正義の為でもないんだな。ならばお前のその愚行は、ただの殺戮に過ぎないぞ」

フィデリオが激しくカスケードを罵る。

カスケードの胸がまた軋む。

鋭利な刃物の切っ先で、じわりじわりと皮膚を突かれるその痛みは、止む気配を見せないどころか、時間を追うにつれ増していくようである。

フィデリオの言葉が胸に突き刺さる。

殺戮だと ？

争いのない、平和な国を目指してガーデンを造ったのではないの

か！？

永遠の環から外れた者はいずれ災いを招く。それがわかっていて芽を摘むことのどこに咎があるというのだ。

俺が奮うこの剣に意味があるのかと問うか？

これは決して“愛する者を守る”為ではない。我が主は“愛する者”ではないからだ。

“貫きたい正義”の為でもない。我が主はその名の下で死んでいったからだ。

俺はただ 争いたくないだけだ。

ケリー。その方法があるというのか？ この……月読を奮う以外に……。

すでに立ち去っているフィデリオの影を目で追いながら、カスケードの右手が月読へと伸びる。

カチャカチャと鐸を鳴らしている。

ケリーのいないこの場所で、月読が騒ぎ立てる。 斬り捨てた

花の数が多すぎて、月読が狂い始めたのだろうか。

この剣は元々王家に仕える聖剣だったのだ。よもや花を手折るために振るわれようとは思いもなかっただろう。

月読はいったい何を求めて鐸を鳴らしているのか。

カスケードが膝を折る。

どこか遠くから吹いてきた柔らかな風が、カスケードの黒髪をふわりと巻き上げると、彼の藍錆色の瞳が鈍い光を湛えるのを映し出した。

記憶の礎<7>

まるで、つい先ほどまで誰かがいたような気配を残している。

夜は冷え込むこの森の奥で、暖炉には消したばかりと思われる薪の燃えかすが残っていた。まだ少し燻っている。小さな煙が細く立ち昇る。

二人掛けのソファには、きれいに畳まれた一枚の毛布が置かれてあり、触れれば温もりすら感じられそうだ。もちろん、カスケードにその温もりを感じることが出来るはずもないのだが。

「ここで過ごしているのか」

ぽつりと漏らす。

このウルマの屋敷で過ごしているのがケリーであるということに、すぐに気づく。

ぐるりと部屋の中を見回すと、キャビネットの上に薬箱が見えた。自分と剣を交えたときにできた傷を治すためのものだろう。それを手に取り、蓋を開けてみると、中身は使われていてほとんど空っぽだった。

ケリーの身体に月読が触れた感触が蘇る。深手を負わせたことはないはずだが、それでも、あのざくりとした重い感触を忘れることはできない。

薬箱の蓋を閉め、振り返るとドアが半分ほど開いているのに気づき、ぎくりとする。その隙間に黒い影が見え、それはゆっくりとドアを開けた。

ぎいと蝶番が軋み、薄暗い闇から姿を現したのはフィデリオだった。

そのやつれた風貌から、ケリーの探索がはかどっていないことがわかる。しかし、ここを突き止めたことで、ケリーの探索は大きく

転換することになるだろう。

いつもは先に口を開いて食ってかかるフィデリオが、なぜだか押し黙ったままでカスケードを睨んでいる。

「入ったらどうだ」

キャビネットに薬箱を戻しながらカスケードが声をかける。

フォデリオは黙ったまま後ろ手にドアを閉めた。

カスケードは改めてフィデリオに向き直り、ケリーの探索の調子を伺うと、途端にフィデリオの眼光が鋭くなる。

「お前もケリーを探しているのか？」

「俺がか？　言いがかりだな」

「では何故ここに来たんだ。偶然だとも言うつもりか？」

「そうだな。偶然だ」

「そんな戯言を俺が信じるんでも思うのか。カスケード」

「戯言……か。なにをそんなに意地になっているのか知らないが……。たとえばケリーが死んだとしても、次にまた新しい花を育てるだけのことだろう。オルレカの一人一人にいちいち感情移入などしていたら、身が持たんぞ」

「カスケード。お前はいつもそうだな。何かと言えば“オルレカに感情はいらん”の一点張りだ。だが、それを俺に押しつけるのはやめてくれないか。俺はお前とは違うんだ」

「ああ、わかつている」

カスケードはキャビネットから離れ、一人掛け用ソファの肘掛けに腰を下ろした。

「フィデリオと俺が違ふことくらい、わかつているさ。いちいち言うな」

「カスケード。いいか？ 問題をすり替えるなよ。俺は、お前と俺の違いを話しているんじゃない。オルレカのことを話しているんだからな」

「ああ、それもわかつているさ。フィデリオはオルレカ一人一人に愛を注げと言いたいんだろう。だが、俺は同じセリフをお前に返してやるよ。お前の理想を俺に押しつけるな」

淡々としたカスケードの喋りに、次第にフィデリオが苛立ちを覚え始める。何を言っても撥ね返し、何度説明しても理解をしない。

「俺は押しつけた覚えはない！ 提案しているだけだ。愛を注げば、それはいつか強い力と意思を生む。痛みを伴う役目だからこそ必要なんだよ」

「では何故痛みが伴う？ そんなものを植えつけるからじゃないのか？ そもそも痛みを感じるにおかしいんだ。オルレカの職務は、ガーデンの環を円滑に回し、魂を繋ぐことだろう。その作業にどうして痛みが生じなければならん。フィデリオが提案している“愛を注ぐ”行為がオルレカに痛みを感じさせているとは思えんな」

「違うぞ！ それは違う！」

「なにが違っんだ。そうやってすぐに感情的になるところがお前の悪い癖だ」

顔を赤らめ、感情的に声を荒げるフィデリオとは対照的に、カスケードは専ら落ち着いた様子で、話す声色も淡々としている。

足を組みかえると月読がソファに当たり、小さな金属音がした。フィデリオはぎくりとした顔で、カスケードのコートの合わせの隙間から覗いている月読に目を遣る。

カスケードに名前を呼ばれると、慌ててフィデリオは視線を戻した。その様子はうろたえている様にも見える。

与えすぎれば、とカスケードは投げかけるように言い、

「与えすぎれば、いずれ欲するようになる。与えられることに慣れ、それが当然になる。その結果が　マリールーとウルマの悲劇を生んだと俺は思っているんだがな」

「マリールー？」

「ああ、そうだ。俺はマリールーに愛だなどというものを与えたつもりはない。それがどうだ。ウルマに会い、そんなものを植えつけられた所為であいつはどうなった。　ん？　消滅する破目になった。これが真実だ」

「これが真実だと、お前が言うのか。マリールーが元々欲していたのはカスケードの心だったはずだ。お前の愛が欲しくてやったことだろう」

カスケードの顔が僅かに歪みを見せ始めた。

「俺のなにが欲しかったと……？」

「お前の“愛”だ……！」

カスケードは堪らず立ち上がった。月読が派手な音を立ててソファにぶつかる。

「求められれば与えなければならぬのか！ そんなものを持ち合わせていないというのか！ 傲慢だな……」

カスケードは吐き捨てるように言った。

「そんなものの為に、マリールーは己の腕を腐らせたのか？ 拳句、俺にその身を斬らせたのか……？」

あの瞳は、と言いかけてカスケードは口を噤んだ。

「それでも彼はお前の為に精一杯働いたじゃないか」

フィデリオの声が震え始める。生きていた頃のマリールーを思い出したのか、それともただの感傷に浸っているのか。フィデリオの瞳にじわりと涙が浮かぶ。

カスケードはふいと顔を逸らした。

「俺の為だとか言うのはやめてくれないか。あれはオルレカとしての職務を全うしていたに過ぎないんだからな」

「辛い職務を全うできたのは、カスケードの喜ぶ顔が見たいからじゃないか。それ以外になにがある！ いつまでもお前がそうだと、死んだマリールーが不幸せに思えてならない」

「マリールーはウルマと愛し合ったじゃないか。そして逃げて……」

「カスケードが月読で斬ったんだ」

カスケードの脳裏にウルマが沈められている池の風景が浮かぶ。
水辺に腰を下ろし、珍しく感傷的にマリールーへ語りかけた。

お前は幸福だったか、と。

善悪が付けられないでいるのに、この上愛がどうだとか言う。
誰がいったい答えを知っているというのだろうか？

「マリールーが求めたのが愛だとしても、それを与えることができたのはウルマだったわけだ。求められれば与えなければならぬのか？ その先に破滅が待っている……か？」

「待っているものが必ずしも破滅だとは限らないだろう。お前が何に対してそんな恐れを抱いているのか知らないが、それすらも覆す力を持っていると俺は信じているんだ。だから俺は ケリーに愛を注いだんだ」

「……ケリー」

そのケリーもカスケードに求めてきた。何を求められているのか理解できないカスケードに、ひたすら求めてきたケリー。

翼の扱いを教えてくださいと言ってきた。救いを求めるように血まみれでウルマの池に現れた。タナソツムを斬らないでと懇願もしてきた。

求められてばかりだ。何一つ。与えることなどできもしないのに。

「争わない方法がきつとあるはずだよ」

ケリーの言葉が頭をよぎる。

泣きそうな顔で、それでも泣くまいとして。

ケリーのあの強さがフィデリオの言う“愛”だとかの所為なのだろうか。

視線をフィデリオへ向けた。だがそこにはすでにフィデリオの姿はなく、蝶番が軋み、ドアに目を遣ると部屋から出て行こうとするフィデリオの横顔がちらりと見えた。

何を言うでもなく、ただ一瞬だけ視線をカスケードに向けた後、フィデリオはドアを閉めた。

堪えていたように大きく息を吐く。

癖のようになった胸を押さえる仕草。痛みが少しずつ酷くなっているような気がしてならなかった。

それがいったいどんな意味を示しているのか。

「泥人形に感情はいらない。造られたものに感情はいらないんだ。ただ戦場でのみ死するだけ……。そうなのでしょう？　ハブランさま」

ではこの泥人形はいつ死ねばよいのでしょうか。

「その答えも　ケリーが持っているのだろうか」

萌芽の刻（とき）

鉄と鉄が擦れ合う音。弾ける金属音が空中で何度も繰り返される。その合間に翼が空を切る。

振り下ろされた月読の刀身を神苑の鞘で受け、上下に激しく肩を揺らしながらケリーが懇願する。

「ぼくを斬り捨てる気がないのなら、もう終わりにしよう」

顔を何度も掠める月読の切っ先が付けた無数の傷跡から、血が滲み、つうと頬を伝い落ちる。

反対にカスケードの身体には傷一つ付いていない。剣の腕が違うことも理由だが、何よりケリーにはカスケードを斬ろうという意思がない。

そしてカスケードには、ケリーを斬り捨てることに躊躇いもあり、それが致命傷を与えないのだ。やみくもにケリーの身体に傷を付けていくだけだった。もちろん、カスケードほど腕が立てば、ケリーを一刀両断、瞬時に斬り捨てることは可能だ。それをカスケードの内側にある何かが拒んでいるとしか思えなかった。またそれを、ケリーは敏感に感じ取っているからこそ、彼もカスケードを斬る行動を取らないのだ。

繰り返される単調な動き。

まるで剣技の練習をしているみたいで、次の太刀筋までもよくわかる。

「こんなことを繰り返してなんの意味があるの？」

カスケードの身体を突き飛ばして距離を取り、ケリーがもう一度問う。

息苦しそうにカスケードは胸を押さえ、俯くと、数メートル下の地上に散らばっている無数の花々を見た。ケリーがここへ現れる前に斬り捨てた、タナソツムの残骸だ。赤い花びらが風に飛ばされていく様は、まるで血飛沫に見えて、それらから逸らすように視線をケリーへと移す。

カスケードの呼吸が荒いのは、ケリーとの一戦のせいとばかりは言えないようだ。どこか身体の異変を感じさせる。

「繰り返す……か。確かにそれでは終わらん。元を断てと言うところか」

月読の鏑鳴りがいつそうの激しさを見せた。まるで意思を持った何者かが鏑を鳴らせているようだ。カスケードは柄を握り締め、ケリーをなぎ払うように剣を振った。

いつものカスケードならば、振り切る前にぴたりと剣を止め、瞬時に斬り返してくるはずが、なぜだかその時はそのまま振り切る形になった。

ケリーは難なくそれをかわし、当然斬り返してくるであろう次の太刀筋に備えて下から剣を振り上げた。しかし、斬り返してくるはずの月読が戻ってこなかった。

しまったと思った時にはすでに遅く、神苑の切っ先がカスケードの左頬を掠めていき、何かを削っていった。

カスケードは緩慢な動作で自分の頬に指先をあてた。じやりつとした乾いた砂の感触を感じると、それを一つまみ取り、指先で捏ねてみた。ぱらぱらと薄茶の乾いた土が風に吹かれて飛んでいく。

身体が崩れ始めているのだろうか。カスケードの表情が俄かに曇り、やがて強張っていった。

「カスケード！」

ケリーは、わざとではないにしろ、自分が振った剣でカスケードを傷つけてしまったことに酷く狼狽している。

カスケードの傍へやってくると、その傷に手を伸ばした。

「ごめんなさい。ごめんなさい」

傷を擦り、何度も誤るケリーの手を払い、カスケードは、平気だと素っ気なく言った。

「土塊だから気にするまでもない」

平静を装うその声が少しだけ震えている。その身に終焉が近づいているのを感じ取ったのかもしれない。命に終わりがあるように、土塊にも風化という終わりがあるのだ。

先ほど、月読を扱いきれなかったのはそういうわけかと、カスケードの顔に自嘲じみた笑みが浮かぶ。

「俺は何をしていたんだろう。もっと早くにこうしていれば良かったんだ」

カスケードは地上に視線を遣ると、未だ鍰鳴りが治まらない月読に語りかける。

「環を乱していたのはウルマだった。彼女を斬ってしまえばタナソツームは現れない。彼女を斬ってしまえば マリールーの元へやれる」

「カスケード？」

心配そうに見上げているケリーの顔へ視線を戻す。左右色の違う

瞳が自分を凝視している。透きとおる山吹色、山の息吹のような深緑に映りこむ己の姿。

「月読はなぜ……ケリーに対して鍰を鳴らした……？」

その答えだというのだろうか。カスケードの左頬が崩れた。崩れたその奥は空洞になっている。詰め物すらない空っぽの身体だ。ただ暗い闇だけが顔を覗かせている。

「神苑^{おまえ}は何もしないでいい。月読^{これ}がすべてを解決させる。そしてガーデンは元に戻り、これまでと変わることのない時間が流れる。ケリーはその世界で命の環を繋げばいい。それが神苑^{おまえ}の役目だ……ケリー」

カスケードは翼を大きく羽ばたかせた。その風圧をケリーは両腕で遮りながら、距離を取っていくカスケードの姿を目で追った。

「つつがなくガーデンの環を廻らせることがお前の仕事だ。その為にもウルマは排除すべきなんだ。心配しなくていい。それは俺がやる……！」

見失いかけたカスケードを十数メートル先でみつけた。月読を鞘に収めながら、カスケードらしからぬ大声で叫んでいた。

ケリーは慌ててカスケードを追うが、後少しというところでカスケードが加速をしてまた距離が離れる。

誰も傷つかない方法を一緒に探そうとケリーは叫ぶ。しかし、発音が上手く出来ない、まして読唇術の効果がある距離にカスケードがいない。ケリーの叫びは虚しく宙を駆けるだけだった。

カスケードの言葉も当然ケリーにはわからない。力なく首を横に振りながら、カスケードは呟く。

「ケリーは鍵だったんだ。ガーデンの終天と、そして　過去の遺物（俺）の終焉の　鍵……」

カスケードは胸を押さえて宙で蹲る。心配し、近寄るケリーを右手で制止すると、厳しい表情で恫喝した。

音は聞こえずとも、カスケードの制止する手とその表情で、近づくと言われていることをケリーは覚るが構わず進む。手の届くところにカスケードがいる。

その肩に触れて自分を見るよう促す。

自分を見てもらわなければ、言いたいことが何一つ伝わらないのだから。

「誰も傷つけない方法を探そう？　ウルマを斬るとか言わないで。

ばくがきちんと役目を果たせば、ガーデンの環は巡るから……」

顔を上向かせてこちらを見据えているカスケードの藍錆色の瞳は、暗く澱んでいる。

「誰も傷つけない方法などありはしない。すでに俺はこの手で何度も花を散らしているからな。それに　オルレ力をひとり斬り捨てている。だから俺は　いつでもお前を斬り捨てられるということだ」

沈んだ藍錆色の瞳が鈍く光り始め、カスケードの右手がゆっくりと月読へと伸びていく。

すらりと抜かれた月読は、まるでカスケードの思い詰めた心が映し出されたように、その刀身もまた鈍く澱んでいた。

歪んだ光を放ちながら、月読は弧を描くように下から上へと振り抜けていく。僅かに左に逸れた切っ先が、ケリーの前髪をひと房切

り落としただけだった。

その振動で、カスケードの頬の傷がまた広がった。ぱらぱらと乾いた土が落ちていく。

躊躇わずに剣を振り抜いたカスケードに、ケリーは強い衝撃を受けていた。カスケードは決して本気で月読を向けたりはしないと信じていたからだ。今のは確かに逸れはしたが、狙いがケリーの眉間であったことは確かだった。それが殊更ショックなのだ。

動けずにいるケリーを、鞘に収めた月読で突いた。ケリーの身体はぐらりと揺らいで体勢を崩したが、落下まではしなかった。

「お前はよけいなことを考えず、ひたすら永遠に環を廻らせていればいい。争いのない、決められた運命の中で」

ただひとつ残念なことは、主の術が発動する前に終わりが訪れてしまったことだ。その願いを叶えることが無理ならば、せめて彼が嫌った争いがない世界のために、その一端を自分が担えればいい。

カスケードは、ウルマの池に向かい、飛び立った。

萌芽の刻（とき）＜2＞

嫌な霧が、行く手を阻むように四人の前に立ちはだかる。

いつも神殿で身に付けている、裾を引きずる貫頭衣を脱ぎ捨て、軽装で森の中を歩いている四人とはパンディオン、ムスカリ、マウリン。

そして一番後方を歩いているオステオス。

四人が向かっているのは、かつて自分たちが封印したウルマのいる池だった。

タナソツームの発生の発端がウルマであると分かった以上、放置しておくわけにはいかない彼らは、彼女の説得に池へと赴いたのだ。そしてその説得の役目を担ったのが、彼女を封印した、兄でもあるオステオスだった。

忘れてしまいたいその記憶は、池が近くになるにつれ鮮明に思い出されて、当時と変わらない独特の湿気臭さが四人の鼻を衝く。

澱が凝ったような陰鬱な記憶が、彼らの進む足を鈍くさせていく。生きるものを感じさせない森。

ここは以前からこうだっただろうか。

そんなに古くもない記憶を手繰り寄せ、そうさせてしまった原因に行き当たると、それぞれの顔が暗く沈みこむ。

ようやく繁みを抜け、拓けた場所に出ると、そこがウルマの池である。

波紋ひとつない水面に、みなも辺りの木々が映り込んでいる。

さあつと、まるで雨でも降り出したかのような音が立ち、水面を瞬く間に霧が覆い尽くしていく。

それは周囲を取り囲むように、ざわざわと拡がりを見せ、拓けて明るかった池の周りはやがて暗くなる。

ふふ、と楽しい笑い声が聞こえた。

少女のようなその声。

「何とも懐かしいお方々が、こんな場所へ揃ってどのような御用でしょう？」

その声は、恭しく彼女を出現させるべく、霧が掻き消されていく池の中央から聞こえ、やがてそこにウルマの姿が現れた。

四人は彼女を見ると途端に顔を顰める。

彼らの記憶に残るウルマの面影が、そこにまったく残っていないかったからだ。

幼い面差しはそのままであるのに、清楚で純粹だった彼女は欠片も見えない。

きちつと結われている髪が、却ってその異様さを増幅させているようで、口の端から零れているなにかの液体に、四人は一樣に寒気を感じた。

「ごくりと誰かが唾を飲んだ。

異様な彼女が、にい、と笑む。

まず一歩足を踏み出し、ウルマに声を掛けたのはオステオスだった。

「その様はなんだ、ウルマ」

毅然とした物言いである。

しかし、ウルマは小首を傾げ、尚も笑う。

「あら、お兄さま。ごきげんはいかが？」

「すこぶる悪い。お前のその様を見たら尚更だ」

「それはそれは。私なんて四人の顔を見たら、心が乱れて大変ですわ。

今すぐそちらへ行つて、その首を掻き切つてしまいたいくらい。
でも無理ですわ。

だって私の足にはお兄さまがこの池の底へと繋いだ鎖がしっかりと巻きついているのですもの。

これ以上、私にどんな苦痛を与えようというのです？

マリールーを奪つて、私を鎖で繋いで……。

それでお兄さまは満足？」

ぐ、とオステオスが言葉に詰まり、眉間に皺が寄る。

ウルマの白くて細い指が、紅で光る唇をゆっくりとなぞっていく。

「私をここに繋いで得たものはなに？

永遠に繰り返し巡る一つの環？

それは永遠ではないわ。

この世で終わらないものなんて、何ひとつないのですもの。

そうでしょう？

だからマリールーの命は終わった……いいえ……終わらせられた。

けれどね、お兄さま。

また、始まるのよ？

それはマリールーではないけれど。

私ではない別の誰かと……新しい永遠を紡ぎ始めるの。

だから　今のガーデンの永遠など、ただの幻影に過ぎないわ。

澱んだ世界には破滅が必ず訪れるもの。

喜んで？

お兄さま？

お兄さまが創り上げた澱みを、この私が終わらせてあげる。

お兄さまのその苦しみを　この孤独と苦痛に塗れてきた私が解いてあげるの……！」

青ざめ顔を背けるオステオスやパンディオンたちを尻目に、ころ

ころと鈴の音のようなウルマの笑い声が水面を滑るように駆け抜けて行く。

そして彼女は一層大きな声をあげる。

「私たちは、所詮、神にはなれないの。

覚えておくといいわ。

私たちは神じゃない！」

ウルマの鈴の音が、耳障りなけたたましい笑い声へと変わった。彼女の狂った笑い声は、渦を巻くように森中に響き渡る。

神ではないと嘲笑うウルマのその様は、やはりすでに正気ではないらしい。

そんな彼女を直視できないマウリールたちは、一様に目を逸らし、口唇を噛み締める。

「お兄さまの独占欲がガーデンの理想を取り崩してしまった。ガーデンはもうお終い。

今の私が紡ぐ言葉はもう愛の言葉じゃないの。

マリールーを失ったあの瞬間に、私のすべては終わった。

私の言葉はすべて呪い……。

嫌い……嫌い……大嫌い！

理想を押しつけるお兄さまも、それを心の底では否定しているくせに何もしない他の方々も……みんな大嫌い！

返して！

マリールーを返してちょうだい！

そうしたら たとえ冷たい池の底に沈められても耐えられるから……。

そうしたら……もう二度と……呪いの言葉は吐かないから」

二度とタナソツムは創らないから、と言葉を結ぶ。

しかし、一度奪った魂は戻せない。

月読で斬られたマリールーはその刀身へと魂を吸い込まれたのだ。神苑で斬られ、花園で再生を待っている人々とはわけが違う。

それはウルマも承知していることだ。

自分の望みがどれだけ無駄なことであるか。

だから、彼女の声音に一層の凄みが増していくのを一同は肌で感じていく。

「お兄さまの祝福を得たものは花園で再生を待ち、祝福を得ていないものはただ滅するのみだと、あくまでそう仰るのね。

それならば、私はこれからもタナソツームを創り続けていくだけ……。

お兄さまのガーデンが根底から崩れていくまで　お兄さまの選択が過ちであったと認めるまで　私が……マリールーの元に逝けるまで……。

だからお兄さま……。

私はこれからもずっとあなたを呪い続けるわ　！」

兄を呪い、ガーデンの滅びを願ったウルマの叫びがオステオスに襲いかかる。

静かにくずおれるオステオスに、パンディオンとムスカリは急いで駆け寄ったが、二人が抱え上げたオステオスはすでに息をしていなかった。

目を見開き、苦悶の表情を湛えている。

呻き声ひとつ上げるでもなく、まるで赤子の手を捻るように彼の魂は奪われた。

「ウルマ！

あなた……一体なにを。

オステオスは兄でしょう。

それを呪い殺すなど、酷過ぎませんか？」

パンディオンは、水面で狂人の如く笑うウルマに問うてみたが、すでに正気を失っている彼女にその声は届かない。

人形のように動かないオステオスの傍らで、彼が死んでしまったことを受け入れられずに頂垂れる二人の傍へ、マウリーンが膝をつく。

彼女の声はとても落ち着いていた。

まるで、いずれこうなることを先見していたように。

「オステオスは呪いなどで死んだのではないと思います」

「では、何故」

「張り詰めていた彼の神経は、もう限界だったのだと思います。」

だって……愛していたウルマを自らが封印し、その苦しみにならずと苛まれていたのですから。己の罪深さをもっとも呪っていたのは他でもない 彼自身だからです。

例えウルマがオステオスの死を望んでいたとしても、それに彼が答えたのだとしても。

彼は……永遠にその責め苦から逃れられないというのに」

「永遠に？」

「永遠に……です。」

彼は赦すことも赦されることもないまま」

「永遠に廻るのは」

ムスカリは震える両手をマウリーンへ差し出した。しかし、その手を取ったのはパンディオンだった。

「なにも廻らないということでしょう」

「私は時間を操れる……！」

豊穰も司っている……！」

パンディオンはゆっくりと首を振った。

「止まるわけではないでしょう？」

時の流れが一時的に緩慢になるだけで、それを永遠とは言いません」

「もう　終わるときがきた、ということです」

マウリーンが涙をぽつりと零す。

ムスカリは自身の掌を凝視している。

「オステオスが死に、ガーデンが終わる。
私たちにもそれはやってくる……？」

重い空気がたち込め、背後で続いていたウルマの笑い声がまったくしなくなったことに、三人は気づいた。

パンディオンたちはゆっくりと視線を水面へと向けた。

その視界に飛び込んできたのは、剣で胸を刺し貫かれ、ずぶずぶと池の中にゆっくりと沈みこんでいくウルマの無残な姿だった。

鈍く光る切っ先から刀身を伝って血が滴り落ち、水面にはウルマの血で出来た波紋が幾重にも広がっていった。

萌芽の刻（とき） < 3 >

カスケードの後を追ったケリーの前で、一人の村人が消えた。
小さな光りの粒子となった彼は、一筋の白煙の如く空へと昇って
いく。

あ、と手を伸ばしてみても空を切るばかりで、消えた村人の残像
すら掴めない。

彼が持っていた鍬が虚しく路上に転がる。

畑仕事に従事しているほかの村人たちも、次々と姿を消していく。
まるで悪い夢でも見ているような気がしてくる。

あちらからも、こちらからもその光りの筋は空に向かって伸びて
いる。

人であつたはずの光の筋が、真つ直ぐに空へと　。

五分と経たないうちに辺りの村人はすべて消え去った。

ケリーは様子を確かめるべく翼を広げ、上空へと移動した。

そしてガーデン中から立ち上る光の筋に愕然とした。

大きな街では塔の如く光りが立ち昇っているのだ。

畑の中から。

或いは川辺から。

果てはガーデンから伸びる街道からも光りは天をめがけ伸びてい
た。

これはいつたい？

どういうこと？

光りは吸い寄せられるように一点へと集中していた。

見上げた中空に　　昼の月が浮かんでいた。

いつもは空の明るさに負けて見えない筈の真昼の月が、天空いっ
ぱいにその存在を誇示している。

月は魂を地上から引き寄せる……そして太陽へと運ぶ……。

ピレアで過ごしたカスケードの屋敷で読んだ、古い書物の一説が頭に浮かぶ。

ガーデンが、ガーデンとしてこの場所に存在する前の　　栄華を誇った豊かな国フェルフォーリアに伝わる言い伝えだ。

同じ場所だからその言い伝えが生きているとは考えにくいが、それでもケリーは理屈ではなく、あの光の筋をガーデンの人々の魂だと理解した。

だが何故そんなものが起こったのだろうとケリーは首を捻り、そして脳裏に浮かんだのはカスケードの姿だった。

カスケードはウルマの元へ向かった。

彼女を斬ったところで、こんなことが起こるのだろうか。

ケリーの胸に暗い不安が押し寄せてくる。

ガーデンで暮らす人々は、生を司るオステオスの祝福を受けて生きているのだから、なにか起こったのだとしたら、オステオスの方だと言うのだろうか。

ぐるりと空を見回した。

変わらない澄んだ青空。

変わらない柔らかな風。

変わらない　　路傍の白い花。

目に映るすべての風景は変わらないのに、足りないものがある。きつかけを作ったのはやはり、カスケードなのだろうか。

間に合わなかったのか、遅かったのかと振り返ったその刹那、背後にいたのはカスケードだった。

彼の手に握られた月読の、刀身をしとどに濡らしているのが血であることに、ケリーの視線が釘付けとなる。

いつもはカタカタとうるさく鳴るはずの月読が嫌に大人しい。

カスケード？

虚ろなカスケードの双眸が、眼前のケリーを静かに捉えた。
もう、終わりだなと呟くカスケードの声は掠れていて、酷く聞き辛い。

終わりって？

この光りのことを言ってるのか？
なにがあっただ！
なにをしたんだ！

「光りがすべて月の船に乘せられてしまえば、ガーデンは終わりだ。

喜べ、ケリー！

俺はお前と争わなくて済む。

もう、誰とも争わなくて済むんだ……」

自嘲するカスケードの顔は強張ったままだ。

争わなくて済むことを心底喜んでいるようには見えない。

それってどういう意味？

どうしてガーデンの人たちが光りになんてなるの。

月読に付いてる……その血のせい？

カスケードは月読を改めて見つめた。

その動作は緩やかで、酷く疲弊しているようだ。

カスケードはだるそうに「いいや、これは違う」と答えた。

「オステオスが死んだ……」。

ウルマの呪いのせいなのかは知らない。

パンディオンたちはそうは思っていないようだがな……。

この血か？

これはウルマのものだ。

マリールーが望んだことだ……ウルマもそれを望んでいた。これはあくまで憶測だがな。

だが あの場合にいたウルマはもう正気じゃなかった。

これでいいんだ。

これで……。

満足したんだろう。

ウルマを殺してから少しも鐙を鳴らさない。

勝手なヤツだ」

ははは、と空笑いしながら、カスケードは血の付いた月読をそのまま鞘に収めた。

光りの筋が立ち上る様をぼんやりと眺め、

「綺麗なものだな、花の魂ってやつは」

独白のように呟く。

カスケードの手は胸に当てられていて、その指先はゆっくりと上着を握り締めていく。

「訪れたのが狂気ではなく、終焉だったとはな。

それなら、この胸の息苦しさから解放されるのだろうか？

ケリー」

答えはお前が持っているのだろうと、カスケードの視線がゆるゆるとこちらへ向く。

ケリーは質問の意味を解せない。

小さく首を振って答えた。

「与え過ぎればいずれ欲するようになる”か……。
俺はお前に答えを求めてばかりだ」

浅い息を吐きながら、カスケードは言う。

緩やかに、朝摘みの芳しい花の香りを嗅ぐように、カスケードは息を吸い込む。

両手を広げ、なにかを迎え入れるように、その顔に笑顔を浮かべた。

「私はとうとう貴方の名を呼ぶことはできなかった」

我が主、と囁くように言う。

カスケードの背後では、空の月に向かい、光の筋が煌き、昇っていく。

彼の身体がぐらりと揺れた。

月読の柄をしっかりと握るカスケードの身体がバランスを崩し、落下を始めた。

彼の羽根から零れ落ちてくる羽毛が、ケリーの顔に触れては飛んでいく。

まるで時間の早さが変わったようだ。

伸ばした手に彼の羽根を握り込む。

何枚も何枚も、続けざまに握り込む。

ケリーの顔は必死だった。

カスケードの羽根を塗り取られているようで、ケリーは必死で飛び交う羽毛を集めていた。

そして足元から聞こえる鈍い音に、ケリーの手は止まり、正気に返った。

地面に叩きつけられたカスケードの手には、変わらず月読が握られていた。

土塊の彼は、飛び散った羽毛の中に横たわっている。

ガーデンの人々のように光りの粒子にならない彼の体躯は、ひび割れたただの泥人形と成り果てていた。

綺麗な藍錆色の瞳は、ガラス玉のようにひび割れて、ケリーの
る虚空をじっと見上げていた。

萌芽の刻（とき） < 4 >

カスケードが動かなくなつてから数時間が経った。

昼間の暖かい風も、夜ともなれば温度がぐんと下がり、時折強く吹かれると、ケリーは堪らず身震いする。

例の光りの筋は、フォレ山の方角からの一筋を最後に夕方には治まっていた。

信じがたい昼の満月は、夜になればさぞかし輝くのだろうと思われたが、まるで新月のようにひっそりと形を潜めた。

その代わり、今は満天の星が瞬いている。

カスケードが横たわる街道の石畳の上にケリーは座り込み、ひび割れた彼の藍錆色の瞳をずっと見つめていた。

彼の土塊の体躯は、時折小さな音を立てて崩れた。

その音を耳にする度にケリーは身体をびくつかせた。

触れると壊れそうで、ただ寄り添い見つめるしかできないことが酷くもどかしく思える。

土塊の身体には現実感が沸かないのに、彼の真つ白な翼だけが妙にリアルで、羽が一枚風に飛ばされていくのを目の端で追いながら、ひとつひとつの思い出が脳裏に浮かぶ。

夜風がどこからか花びらを運んできた。

その内の数枚がカスケードの頬に張り付く。

ケリーの脳裏には、うつとうしそうに風に煽られた自分の髪を抑えるカスケードの横顔が浮かび、ケリーは思わず小さく笑う。

きっと嫌だろうな、と呟き、カスケードの頬から花びらを一枚取り除いた。

ただそれだけの行為にも耐えられないのか。

カスケードの頬の一部がその衝撃で剥がれ、地面に落ちて粉々になる。

剥がれ落ちていく彼の一部を見届けると、押さえ込んでいた様々

な感情が堰を切って溢れ出した。

ケリーは天を仰いで、わあわあと声を上げて泣く。

ガーデン中から昇った光りの筋の正体よりも、目の前で土塊と化したカスケードのことしか考えられない。

思考が急速に動き始める。

異国の服に身を包み、剣を携えるカスケード。

悲しげな表情で花を手向けていたカスケード。

フィデリオとのそつの無い会話の間で見せる冷たい表情。

ケリーと戦わなくて済むと言って見せた安堵の表情。

サムとルードを失った時とはまったく違う喪失感がケリーの全身を覆う。

これが終わりなんだと声を限りに叫んだ。

朝日の眩しさと人の気配でケリーは目覚めた。

取り囲むように立ち並ぶ足先から視線を上に移動させると、逆光の中からゆうつと手が伸びてきて、ケリーを力いっぱい抱き締めてきた。

明るさに目が馴染まないケリーの手を取り、

「無事で良かった」

フィデリオが筆談でケリーの無事を喜んでいることを伝えてきた。徐々に馴れてきたケリーの視界には、フィデリオの他に、パンデイオンとマウリン。

そしてムスカリの三神がいた。

オステオスが亡くなったことを告げられた。

カスケードから聞いていたからさほど驚いた様子も見せない。

しかし、光りの筋のことは確認しておきたかった。

「オステオスがいない今、彼の祝福で生を受けた者は、皆、あの光の筋となって月へと運ばれました。

古い言い伝え通りに。

彼らは二度とこの地に現れることはないでしょう」

みんな？

そうですとパンディオンが大きく頷いて見せた。

ぼくは？　ぼくはどうして平気なの？

「あなたもフィデリオも、オステオスが施した術で生まれてきたわけではないからですよ。

フィデリオは私たちが、あなたはフィデリオが育てた花だからです」

「ケリー。

俺たちはこの地を離れて別の地へ移ることに決めたんだ。

さあ、一緒に行こう」

そう言っただけで座り込んだままにいるケリーの手をフィデリオが握んだ。

しかしケリーはその手を振り払う。

ケリーにはここから動きたくない理由があった。

カスケードは？

このまま放っておくなんてできないよ。

「彼は違うのです。

カスケードは元々この地にいた人。

正確にはこの地で墓守をしていた泥人形なのです。

彼が本来の土塊に戻ったということは、役目を終えたということなのでしょう。

そのまま土に帰しておあげなさい」

パンディオンは同情的な視線を土塊に向け、まるで餞の言葉のように言う。

役目を終えた？

でも、ぼくの身体からは神苑はなくなっていないもの。
まだこの中にあるから終わってなんかいない。

フィデリオは首を振りながら、死んでいるんだよと言いつけるように告げ、

「ほら、見てごらん。

ケリー。

あれが彼の 本当の姿なんだ」

フィデリオはケリーの肩越しに見える、カスケード土塊を指した。

ケリーは、フィデリオに視線を一旦は残しながら、背後へとその視線を移動させた。

カスケードは、微かな風にさえも掬われるようにその姿を変えていく。

固形だった身体の端から、崩れるように小さな砂粒になり、流砂のようにさらさらと流れていく。

崩れ始めると早いもので、数秒の内にカスケードは、最早、人の姿をしていたかどうかの判別も難しいほどになる。

後に残ったのは異国の服と砂の山だった。

ケリーはカスケードだったものを何度も掬い上げた。

砂は、やはり砂のままで、いくら掬ったところで変わりはない

のに、何度も繰り返すケリーの行動に、フィデリオが堪らず止めに入る。

「無駄だから止めるんだ。

ケリー。

ここを離れて他の土地へ移るんだ」

いやだ！

「ケリー！」

カスケードは、自分は花のように理解できないとか言ってたけど、違う。

カスケードは自分が土塊だからとか言ってたけど、それも違う。

花は……土がなくなっちゃ育たないもの！

花だけじゃ無理なんだって、土もちゃんと必要なんだって、カスケードに教えてあげたいんだ。

カスケードは必要なんだって言いたいんだ！

「もう、無理だって言ってるだろう？

ヤツは死んでるんだよ。

土に帰ったんだ。

ケリーが悲しいのはよくわかったから。

いい加減に諦めるんだ」

諦めない！

ぜったい方法があるんだ。

カスケードはぼくと争わない為の方法を探してた。

今度はぼくがカスケードの為の方法を探すんだ……？……！

力づくでもとフィデリオはケリーに掴みかかったが、その時である。

ケリーの動きが止まり、その視線は掌の砂の中に注がれている。その様子にフィデリオたちも視線をケリーの掌へと向けた。

ケリーが余分な砂を払うと、そこには一粒の種が姿を現した。

ケリーが掌を皆の前に差し出すと、

「発芽しています」

マウリーンが驚いたように呟いた。

彼女が指した箇所から、白い小さな芽が頭を出していた。

僅か数ミリしかない芽だったが、しっかりと天を仰いで伸びている。

ここに残るよ、ぼく。

ケリーがぼつりと言った。

なにを馬鹿なことをとフィデリオが呆れた声を出す。

ぼくが育てるんだ。これ。

ケリーはもう一度フィデリオに種を見せた。

「育てるのは構わないよ。

でも、それはよその土地でも出来るだろう」

ケリーは、首を振る。

「ここじゃないとだめだと思う。

だから、ここに残って育てるんだ。

何か言いたげなフィデリオにケリーは笑顔を見せ、

フィデリオがぼくを育ててくれたように、ぼくがこの種を育てたいんだ。

大切に育てるよ。

フィデリオがそうしてくれたように、ね？

フィデリオは言葉に詰まった。

ケリーに返す科白が見つからずに、ただ俯くしかなかった。

カスケードに突きつけるように言い放った己の言葉が蘇ったからだ。

オルレカには感情が必要であること。

それはいずれ強い意志を生むのだということ。

まさにそれが実現したではないか。

ケリーは自分の意思で、ここに残ると言っている。

変わらぬ愛を注いだ花の結晶が、今度は自分が注ぐ番なのだっていうのだ。

「俺も残ると言ってもお前は承知しないんだろうな」

フィデリオはぼくに甘いから……。

ぼくもきつとそれに甘えてしまっただろうから、フィデリオは残ったらだめだよ。

「それでも、一番ケリーのことを愛しているのは俺だってことは忘れないでいてくれよ」

フィデリオはケリーを力いっぱい抱き締めた。

ケリーも最後の抱擁に、身体を小さく振るわせた。

フィデリオが名残惜しそうにケリーの身体を離すと、マウリーンがカスケードの服を手渡してくれた。

綺麗に畳まれたその服を腕に抱くと、今度はムスカリが月読をその上に置いた。

微かに香るカスケードの匂いがケリーの鼻をくすぐる。

思い出したように、やっぱり一緒に残るのだとこねるフィデリオを、パンディオンが説得しながら、彼らは街道を歩いて行く。

ケリーとの距離が離れると、彼らは一旦立ち止まり、振り返った見送るケリーに小さく手を振った後、彼らの足元から湧き上がったつむじ風とともに姿を消した。

ケリーの前には一本の石畳の街道が、真っ直ぐフィレ山の峰に向かって伸びていた。

ケリーは歩き出した。

この街道の先にはあの丘がある。

ガーデンを見下ろす小高い丘。

急くように駆け出し、そして翼を広げる。

二対の翼は空を切り、ケリーは滑るように丘を目指した。

萌芽の刻（とき）＜5＞

真つ赤なベゴニヤの花が一面に咲いていた。

視線を少し横に向けると、草丈の高いオーニソガリムの白い花とフェアリーテールのグリーンが風に靡いている。

丘の上を這うように咲き乱れているのは濃淡のピンクの花びらを煌かせている、パレットフラワーだ。

草むらにごろりと横になり、見上げた空は抜けるように青く、雲はゆつたりと流れていく。

誰もいなくなってしまうたガーデンで、一人きりで花の世話を始めたケリーが、ようやく迎えた念願の春だった。

なにもかもが変わってしまった。

そしていろいろなことを知った。

この地には、この地独特の季節の流れがあるということだ。

環を乱すことなく廻り続ける永遠の環が、どれだけ理想的であったこともよくわかった。

それは幾度となく季節に裏切られ続けて身に沁みて気づいたことだ。

だからこそ、ようやく訪れたこの暖かな春の季節がとても悦ばしい。

一粒しかなかったベゴニヤの種は、なぜだか不思議なことに増え始め、その育ち振りから開花の心配をケリーにさせたが、それすらも跳ね除け、立派な蕾をあちらこちらに付け、とうとう今日の満開となった。

一斉に咲いたベゴニヤの花に、ケリーの胸は期待で躍る。

同時に不安も襲ってくる。

なにか足りないものはなかっただろうか。

与えすぎたものはなかっただろうか、今となっては虚しい杞憂ばかりである。

やはり様子を見にいくべきだったろうか。

それとも今日一日ここで待ちぼうけを食らうべきか。

どうあっても無駄な考えを思い浮かべてしまうようだ。

溜息をひとつ吐いて目を閉じると、すうつと影がかかる。

雲が太陽を隠してしまったのだろうか。

ケリーは目を閉じたまま、そんなことを思った。

こつん、と固いものがケリーの頭に当たる。

ケリーはゆっくりと目を開けた。

影になっていたのは覗き込んでいる誰かのせいだった。

目の端には見覚えのある金系銀系の帯が、丘を駆ける風に揺れている。

ケリーは跳ね起きた。

異国の服の青年は、剣を腰に携え、

「術が発動するのに五百年近くもかかってしまった」

ケリーは言葉の意味が分からず、小首を傾げた。

しかし彼は構わず言葉を紡ぐ。

「今なら、あなたの言った意味がわかります。

一介の土塊の兵士を作ったのではなく、ひとりの友人として私を作ったのだということ。

あなたの心がわかります。

それだけのものを得た。

今なら呼べる。

我が主ではなく、友人として。

あなたの名を呼ぶことが出来る。

我が友、エクセイシア」

青年は腕を伸ばし、ケリーをその懷中に収めた。

ケリーは窮屈そうに青年の顔へと手を伸ばし、その頬に宛がった。

ぼくはケリーだよ。

青年はケリーの口唇を見つめ、わかっていると言って笑い、

「誰かに聞いて欲しかったただけだ」

そう呟くと、ケリーの肩に顔を埋め、大きく深呼吸をした。

カスケードの背中に翼はもう無かった。

自分の翼は健在だと自慢するケリーに、カスケードは柔らかな笑みを向ける。

それを見たケリーは少し面映い気がして俯いた。

カスケードが、いろんな話を聞かせてやろうと言った。

ケリーも訊きたいことは山ほどあるものだから、大袈裟に喜んで見せた。

沈む太陽を丘の上から眺め、昇る月を眺め、カスケードは古い御伽噺のような話を語り始める。

ケリーも早く聞かせたかった。

カスケードが必要なこと。

花と土との話。

それなのに、饒舌に語るカスケードを見てみると、もうそんな話が必要ではなくなったのではないかとも思う。

思ったとおり、カスケードの笑顔はとても素敵で、見とれずにはられない。

月明かりに照らされたオーニソガリムとフェアリーテールが風にそよぐのを眺めながら、ケリーの胸は込み上げてくるこぼれ感情を口にしたいとてうずうずしていた。

「昔話はつまらないか？」

ケリーの様子に気付いたカスケードが訊く。
ケリーは慌てて首を振り、

そんなことないよ。

ただ、ぼくもカスケードに言いたいことがあって、
うずうずして
いたんだ。

「俺に言いたいこと？」

ケリーは上目遣いに頷いた。

「それなら先にそれを聞こう。

俺の昔話はまだまだ続くからな」

ケリーははにかみながら、

カスケードが愛しいなって思ったんだ。

「愛しい？」

俺をか？」

ケリーは何度も頷いた。

愛しくて愛しくて、胸が破裂しちやいそうだ。
思ったとおり、カスケードの笑った顔は綺麗だし……。

「相変わらずお前の基準は綺麗ってところなんだな」

カスケードは声を出して笑った。

いいじゃないかとケリーは拗ねてそっぽを向く。

「まあ、いいさ。」

お前とはこれからもずっと一緒にいるんだからな。

お前が好きだと思えるものを俺が持っているのなら、それだけでいい」

カスケードは、ケリーの視線が向いていないのを見計らって呟いた。

「花の魂は美しいのだろうか？」

カスケードはもう胸が痛まない。

主の植えた術という種子が萌芽し、時を得てようやく心を解するようになった。

土塊ではないと胸を張って言える。

水に触れて、冷たいと言おう。

風を感じて心地よいと目を閉じよう。

日差しを浴びて微睡まどろみもう。

花を見て美しいものと告白しよう。

丘を駆け上がる夜風がケリーの髪を吹き上げる。

最後に見たときには肩までしかなかった彼の髪は、もう腰まで届くほどに伸びている。

それだけの時間をかけて彼は注いでくれたのだ。

土塊だった頃に否定していたもの。

フィデリオと対立していたもの。

胸に溢れてくるそれが、主、いやエクセイシアとケリーが注いでくれたものと同じであることを感じていた。

ガーデンの跡地に、流民が住み着くようになったのは、カスケードが花の魂を持って生まれたおよそ五十年後のことである。

それでも変わらずに、この地に花は咲き乱れていて、人々の目を和ませていた。

彼らが住まう街を見下ろすその丘の上に、幾年月過ぎようと姿形を変えない美しい二人が住んでいることを、流民は知らない。

一人は二対の翼を持った光彩陸離の如き少年と、清廉な匂いを漂わせる、剣を携えた青年である。

“それはいずれ強い意志を生むと信じている。
だから俺は愛を注ぐんだ”

この広い青空の下。

どこか遠い地で、フィデリオは変わらない愛を ケリーに注いだものと同じものを きっと注いでいるに違いない。

白い羽根が丘を舞う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0910b/>

G U R D E N

2011年5月23日10時55分発行